東方機体伝

ライオネル

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年が目覚めた場所は、幻想郷!?

超常の地で彼が得た能力は

『ガンダムになれる程度の能力』!?

ガンダム×東方シリアス?コメディここに始動！

これ系（ガンダム×東方）は恐らく先駆者がいるでしょうけど書きます（鋼鉄の意思）

よかったら見てってください。

目次

プロローグ・霧雨邸編
目覚めたらそこは ―――― 1
森で出会った子は魔法使い!? ―― 21
零章・博霊神社編
巫女さんとの遭遇 ―――― 49
スキマとの遭遇 ―――― 68
食う寝る所に住むところは大事 86
能力発動、気絶! ―――― 107
動き出した物語 ―――― 129
機体を動かしてみよう! ―――― 143
機体を乗りこなしてみよう! ―― 158
～Stage―0～ VS 博霊霊夢 ―――― 174
対戦の後に ―――― 192
似た者同士 ―――― 208
一章・紅霧異変編
人里にて ―――― 222
～Stage―1～ は回避 ―――― 239
～Stage―2～ VS 湖上の氷精 ―――― 256

プロローグ・霧雨邸編
目覚めたらそこは

ーー「じゃ、また明日な」
千斗「おう、じゃあな～」
俺の名前は普通の高校生、矢部千斗（やべせんと）。退屈な授業が終わり、帰路が途中まで同じ幼馴染ではない友人とも別れ、今は我が家へ帰る途中。
しかしその足取りは友人と一緒に帰っていた時よりも早い。別に特段歩きが早いわけではなく、むしろいつもはややゆっくりめのスピードで歩くのが俺だ。
・・・ではなぜ早足で帰ってるのかと言うと。
千斗（ちゃっちゃと帰ってフルブだ！）
そう、『フルブ』である。
最近俺は、『ガンダムエクストリームＶＳフルブースト』、略して『フルブ』というゲームにはまっていた。
このゲームの何が素晴らしいって言うと、語ると長くなるが～（中略）～まぁ要は、「機

動戦士ガンダム」シリーズの機体が一同に介して、２対２のタッグバトルを行うという、夢の用な内容のゲームである。

それだけでガンダムゲームファンにはたまらないモノであるのに、対人対戦において、体力調整、格闘コンボ、前衛後衛、覚醒システムｅｔｃ．．．とやり込める設定盛りだくさんで、ついついやり過ぎて徹夜することもしばしば……な代物なのだ。

ここまででもう察する事が出来ると思うが、早く帰ればそれだけ早くゲームを始められる、そんな気持ちで急いで帰っていたわけだ。

だった。

千斗「何処だここ……。」
気が付くと、辺りは木々に覆われていた……。

……まあ、流石に。
いきなり視界が変化するなんて事は無い訳で。
この状況に至るまでの経緯をゆっくり思い出してみるとしよう。

小走りで最寄り駅へ向かっていると、大通りに差し掛かる所で、信号が青で点滅していた。流石にこれは間に合わないと考え、一旦足を止め、頭の片隅でフルブのことを考えつつ、信号が変わるのを待っていた。

しばらくして信号が赤に変わった頃、大きな傘を持った人が不意に視界の右側に入った。とても大きな傘でその人の身体全体を覆っていたんだけど、足元から紫のスカートらしきものが見えたので、多分女の人だろうな～なんて思ってたっけ。

んで、その人は軽やかに俺の横を通りすぎて行くんだけど――――

・・・え、信号赤じゃね？

と、考えたときには、すでにその人の姿は車道の真ん中に写っていた。

そして右からは、トラック。

どうしてだか、理由なんて分からない。ラノベの主人公みたいだが、その時『勝手に体が動いた』んだ。

――間に合え！

そう心の中で叫びながら、必死に手を伸ばして彼女を突き飛ばそうとした……

……しかし俺の手は、彼女の体ををすり抜けた。

そこで俺の記憶は途切れて、気が付くとここにいたって訳だ。すり抜けたってか触った感触が無かった気が・・・？

あの女性に触れた瞬間に意識が飛んだ・・・？

それに気を失う前と後で周りの景色があまりにも違いすぎるし、トラックと衝突して意識を失ったとしても、ぶつかった衝撃くらい感じるよなぁ？

今までトラックとぶつかるなんて数奇な体験をしたことは無いから確かではないが・・・。

トラックとぶつかった人間がもし生きて目覚めるなら、普通病院の白い天井が目に入ってくるんだろう。

でも俺は、薄目から差し込む陽の光と、往々に生い茂る木々、その隙間に広がる雲一つ無い空が、意識が覚醒して一番最初に認識した光景だった。

その光景を目にしたとき、どうしてだか、何処か現実離れした何かを感じた・・・上手く言葉に出来ないが、本能的に感じたというか、自分のいるところが、普通の世界じゃない・・・？

こんな発想が、どうして、どこから出てくるのか自分でもさっぱりだが、確かに、そんなふうに感じたんだよな。

まぁここがあの世だったら、当たっちまってんのかね・・・。

それ以外にも『女の人は無事だろうか』とか、『誰がどうやって俺をここまではこんできたのか』など、正直疑問は尽きない。それでも、起きてしまったことは仕方無い。命があっただけ（多分だが）で良しとしよう。

問題は、これからどうするか、だな。

千斗「身体は・・・よし大丈夫そうだ。」

腕を大きく回したりその場で跳び跳ねたりしてみるが、どうやら身体に不調はないらしい。トラックに跳ねられたのに・・・と考えるのは袋小路だな、やめよう。

まずは今俺がいる場所、それがいったい何処なのかということからか。
こんな森林は都心にはまず無いだろうし、どこかの山の中かも分からんが、場所を調べようにもポケットに入れておいたスマホは何故か無くなってるし、俺が持ってた学生バックも無い・・・。
あるのは、財布・・・中身は無事みたいだな、良かった。あとは――

千斗「……なんだこれ？」

身に覚えのない白色の紙が、ズボンのポケットに入っていた。肌触りは和紙のような感じで、その紙の表に印刷されたような文体で『博麗神社』、裏には手書きと思われる字で『幻想郷へようこそ』と書かれていた。
千斗「博麗神社・・・幻想郷？」
思わず声に出して読んでしまい、周囲を確認するが、見渡す限りの木、木、木で、独り言を聞く人はいないようだ。
……というか、そもそもこの辺に人が住んでいるのだろうか？
住んでたら良いけど……事情を説明して親なり警察なりに助けを呼べるし。とりあえず連絡が着いた時の事は頭の片隅に置きつつ、幻想卿、博麗神社という２つの単語に

ついて考えてみる。
幻想郷・・・どっかで聞いたことあるような。でも、よく思い出せない。うーん……
幻想…郷…。もしどこかの地名だとすると、妙に中二心を擽られるフレーズだな。
こんな不思議体験と重なってるってことは……まさか、『異世界』に転移したとか!?
千斗（・・・ってんなわけないか）
アニメじゃあるまいし……。第一、この紙に書いてある幻想郷と言うのが地名かどうかも分からんし。
博麗神社・・・は、うーん。聞き覚えの無い神社だな。博麗なんて地名あるんかな？
もしあるなら、今いるここが博麗？知らんけど。

……つまり何もわっかんねーと。
千斗「う～む、どうすれば……。」
これは、本当に困ったな。
このままではフルブやるどころか、見知らぬ地で遭難する可能性まで出てきたぞ。
……いやもうすでに遭難はしてるのか。
と、自身が置かれた状況に困惑していた時だった。

〉ドカーーン!!

千斗「ッ!?」

突然、それほど遠くは無さそうな場所から、大きな爆発音のような音が聞こえてきた。
爆発音がした方向を見ると、やや離れたところに黄色い煙が上がっているのが見える。

千斗「あれは……。」

こんな静かな森林で爆発音なんて物騒だと理性は警告していたが、状況が状況なだけに正常な判断が出来なかったようだ。気がつくと俺の足は煙の出所へ向かっていた。

――ｓｉｄｅ???

?「ゲホッ、ケホッ、ケホッ！」

――またやっちやった……。

実験の失敗作（爆発したモノ）を見ながら、私は心の中でそうぼやく。

元々黄色く美しかったそれは、今はもう跡形もなく黒ずんでしまっていた。
私自身も、さっきの爆発のせいで少なからずダメージを受けているし服はもうボロボロになってしまっている。
？「はぁ……これじゃあ霊夢に追い付くことなんて無理だよ……無理だぜ。」
いけない、昔の口調に戻ってしまっている……。
今回の失敗が余程堪えたのだろうか。無意識に発せられたそれは、過去の自身の口調そのものだった。
弱いままじゃいけない。強くならなくちゃいけない。私は魔法使いなんだから。大切な人も守れない。そう思って今日まで生きてきた。
・・・でも。
？「やっぱり私には、無理……」
魔法の実験の失敗が重なった事で、過去の自分を思い起こされ、気付くと視界が歪んでいる。
？「ッ……！
……ダメだダメだ、弱気になっちゃダメだぜ……！私は、強くならないと……！」
気を強く持て、そう自分に言い聞かせて、また材料集めから始める。さっきはホウキダケを使ったけどダメだった。なら、他の奴を……。

？「そうだ！へこたれるな、私！」
諦めないで何度も何度も試すんだ。私は今までそうやって生きてきたじゃないか。家を出たときだって、魔法使いになった時だって！
今はまだ、魔法使いとして半人前だけど、努力して努力して、いつの日か立派な魔法使いになる！
もう、あんな思いはしたくないから……！
？「そのためには、努力、努力……だぜ！」
お気に入りの帽子をかぶり直して、私は深く息を吸い込んだ。

――ｓｉｄｅ千斗

千斗「ハァッ、ハァッ、意外と……遠いな！」

今俺は、煙の方へ向かって走っている途中。最初は歩いて向かっていたのだが、何だか一向に距離が縮まって無いような気がして、煙がいつ消えるかもわからないので仕方なく走ることにしたのだ。

歩き始めた地点から煙までせいぜい２００メートルくらいしか無いように見えたのだが、異常な状況から来る焦りからか、はたまた幻覚か、体感ではすでに４、５００メートルは走ったと思うが、煙との距離が縮まる様子はない。それどころか離れているようにも見える。

……一旦止まるか。

千斗「クッ！何がどうなってやがるっ！」

どこぞの戦争屋（ひろし）を意識したセリフが口から漏れる。どうやら心にはまだ余裕があるらしい。ついでに走った事で上がった息も整えていく。

幸い煙はまだ消えていないので、すぐに場所を見失うということは無いだろうが、それがいつまで続くとも限らない。

千斗「あんま悠長には……。」
しかしこのまま向かっても結果は同じような気がする。根拠は無いが、何となく直感がそう言っていた。いったいどうやってあそこまで行けばいいんだ……。
現状は、どれだけ走っても一向に縮まらない煙との距離、周りは背の高い木々に囲まれていて、移動するのには困らないが人工物らしきものもひとつとしてない。今のところ手がかりはあの煙だけ……。
千斗「クソッ……！」
たまらず舌打ちをしてしまう。
……成す術なしか、そう思った時、俺はあることを思い付く。
千斗「まてよ、自分が通った所に跡を付けて行けば……？」
そうすれば自分が、同じ道を延々と走って要るのか、それとも予想以上に距離があるだけなのかが分かるかもしれない！
千斗「よし！そうと決まれば善は急げだ！」
俺は自分が通った道に跡を付け始めた。と言っても、通りすぎた木に石で目の高さくらいの傷を入れただけだ。でも一目で分かるし簡単だからな！
そうして、１２本目の木に傷を入れようとしたら、

千斗「傷が付いてる……！」

どうやら俺は、同じ所を延々と走っていたようだ。

……いや気づけよ俺！

千斗（でも煙の方にまっすぐ進んでたのにどうして……）

新たに疑問が出来てしまったが、結局の所、この状況を打破しなければならないことに変わりはない。

どうする……とりあえずもう一度、現環境を整理してみよう。

千斗「現環境・・・鳥、鳥、鳥、うっ・・・頭が・・・。」

・・・オーケー。アホな事考えたから一旦落ち着けた。

とりあえず一つ一つ挙げていこうか。

・目が覚めたら知らないところ

・持ち物が色々と無くなっている

・残ったのは財布と謎の紙

・水も食料もない。食べられそうな木の実自体はあるにはあるが、本当に食って良いもんかも分からんし、そもそも木々が高すぎる。よじ登って取るしか無さそうだ。昇れるかどうかは別として。

・何か分かるかもしれない煙（手がかり）は見つけたがどういう訳か、そこにたどり着くことが出来ない

・俺以外に人が居そうにない、周りに建造物が一切見えない。３６０度全て木々。

結論：詰んでる。

千斗「え!?マジか!?俺こんなところで死ぬの!?」

ものすごい大声で叫びたくなった、て言うか叫んだ。普通に白い目で見られそうだが今はそんなの関係ない。だって俺以外に人いないっぽいし！こんなん叫ぶしかないし！（やけくそ）

――あぁ俺の楽しい高校生活が……フルブが……バーサスが……エクバ２が……。

こうしてあまりに意気消沈して項垂れていた俺は、近づいてくる気配に全く気づく事が出来なかった。

？「お、お前誰だ……ぜ？」

自分以外の人がいないと思っていた場所で、突然目の前から発せられた自分ではない誰かの声。

そのあまりにも突飛な出来事に、警戒もせず反射的に顔を上げる。そこには――

――怯えような様子で、とっても可愛い女の子が立っていた。

――ｓｉｄｅ???

さっきの実験の失敗(爆発)から少したったあと、私は魔法の触媒であるキノコを取りに来て

いた。因みに帽子は被ってない。キノコ取りに来ただけだからな。お気に入りだけど、正直採取する上では邪魔だし。

私がキノコを取っているこの森、通称マジックフォレストは、常時キノコや木の実から発生するガスに覆われていて、普通の人間が入ると幻覚や五感のマヒ、悪ければ卒倒する危険性もあるほどの、危険な場所だ。まあ私は元人間だから平気なんだけどな。

……おっと、いけない。

余計なこと考える余裕は無いんだった。今は材料収集（キノコ狩り）に集中しないと。そう自分に気合いを入れ直していると――

「う……ん！……のま……ぬの!?」

？（……ッ!?）

――断片的に叫び声に聞こえてきた。

突然の事に一瞬身体がビクッとした……。声の大きさからして、多分すぐ近くで誰かが叫んだのだろう。

この森には私と人形使いのアリス、そして幼馴染のこーりんしか住んでないはず。でも今の声は、その二人のどちらでもない。

？「と、とにかく行ってみるのぜ。」

――ちょっと怖いけど、行ってみよう。

少しの好奇心と、何か自分の成長に繋がる未知の発見があるかもしれない、そんな淡い期待を胸に、私は声のした方向へ歩き出した。

森で出会った子は魔法使い!?

――side千斗

――魔法の森、???宅付近

?「お、お前、誰だ……ぜ!?」

――そんな声と共に現れたのは白黒の天使だった。

……ではなく、金髪の女の子だった。

千斗「や、矢部千斗でしゅ……ッ!?」

――アカン、噛んだ。

その人の印象は最初にほとんどが決まるとかどっかの偉い人が言っていたのが不意に思い起こされる。とするならば、いくら突然の事とは言え自己紹介もまともにできな

い人の印象はどうなってしまうのか。
?「・・・あっ、え、と・・・。」
ほら、女の子（。д。）ポカーンって顔してるし……！
二人の間に何とも言えない気まずい沈黙が蔓延る。
ヤバイなんか言わなきゃ！
千斗「……ち、因みに高3です。」
――いやもっと他に言うこと無かったのか俺ェェ!?
ここはどこですかとか、君は誰ですかとか、他に色々あっただろうが！
何でよりによってクッソどうでもいい自己アピール!?そりゃ自己紹介する上で、年齢を言うことは大事だけどさぁ！
心の中で自分で自分にツッコミをいれるという、まさにアホな事をしつつ、彼女の様子を伺う。
?「こうさん……?え、いや、私は何もしないぜ！」
すると彼女は、少し慌てた様子でまくし立てるように言葉を並べると、怪訝そうな表情で俺を見てきた。
私は何もしない・・・?
いや確かに俺がものすごい何かをしちゃった訳だけど！

・・・どういう意図だ？

千斗「えっと・・・なんかすんません、自分は高3ッス。」

とりあえず、もっと他に言う事あっただろ、と自分に言いつつ、慌てていたから仕方ないと自己弁護する。でも今回は伝わるはずだ。そもそも自分が高校三年生だと伝えた所で何だという話だが。

？「いやだから、私は何もしないぜ？降参なんて言われても困るんだが・・・。」

しかし女の子は相変わらず怪訝な表情を崩さず、先程と同じような内容の言葉を返してくる。

――あれ？何か会話成立してなくね？

……いやそれは元々だったか。

どうして自分が高3だと告げることが何かをすることに繋がるんだろうか？この辺りでは高3を狩る文化でもあるのかな？

いやあるわけないだろそんなの。何だ高3だけを狩る文化って。ちゃんと高1と高2も狩ってくれ。

しかしそこで、俺は自分が変に落ち着いていることに気づいた。どうやら会話が噛み合わない事で先程のやらかしは記憶の底へ追いやられたらしい。冗談を考える余裕もあるようだ。

ほら、あるよね。失敗したあとにそれよりも大きな問題が起きるとそれが無かった事になるって。まあ会話が噛み合っていないということが無かった事にはならないが。

そこで、まずはこの齟齬を解くべく、なるべく冷静な口調で女の子に質問する。

千斗「えーと、俺は矢部千斗、高3だ。君は？」

ついでにさらっともう一度自己紹介をしておく。自己紹介は大事だからな。

？「・・・霧雨魔理沙。魔法使いだ。言っとくが私に戦う気なんてないぜ。」

・・・戦うゥ!?

今この子戦うって言った!?

まさか本当に高3狩りなるものがあったりするのか・・・!?

しかし霧雨魔理沙と名乗るこの少女（凄い名前だな）は、中学生、あるいは高校生になりたてなくらいの見た目をしている。加えてとてもキュートだ。言い換えれば可愛い。落ち着いてよく見るとめちゃくちゃ可愛い。金髪だし。色んな意味で何だこの子!?

この子に対する疑問は果てしないが、早急の課題として、彼女と戦う？事になったとしても、純粋な力勝負なら負けるとは思わない。だが、そもそもどうしていきなり『戦う』という発想に至ったのか。

俺が高校3年だと戦かわなければいけないのだろうか？
そんな文化は生まれてこの方聞いたことも無いが、世界は広い。そういうものがあってもおかしくはない・・・のか？
いやおかしいだろ。何だ高3だと強制的に戦いになる文化って・・・。限定的過ぎるし意義も全く理解出来ん。
・・・ん？
――『私は何もしない』
確か彼女は、最初に慌てながらこう言ったはずだが。慌てているってことは自分が危害を加えるような存在だと思われてると思ったのか・・・？
どうして自己紹介しただけで・・・あっ
千斗（まさか、『高3』を『降参』と勘違いしているのか？）
・・・いやなんだその勘違い。もし仮に事実だとすると、自己紹介で高3を降参と間違えるって、この辺では会ったら即リアルファイトが普通なのかな？（すっとぼけ）
千斗（ってんなわけあるかーい！）
自分でノリツッコミしてしまった・・・。ふと彼女の方を見ると、相変わらず無言でこちらの様子を伺っている。
とりあえずギャグっぽく聞いてみるか？一応辻褄は合うし・・・いやかなり意味不明

だが。

千斗「あーあれよ、まいったの『降参』じゃなくて、高校生三学年生の『高3』よ（キリッ）。」

――流石にふざけすぎただろうか？

普通に引かれてもおかしく無い事言ってるよな俺？

やっぱりまだどこか気が動転しているのだろうか。普段ならこんなこと言わない・・・言わないよね？

しかし彼女の反応は、予想とは違い、如何にもなクエスチョンマークが表情に現れているようだった。

魔理沙「えっと……こうこうせい、って何だ？」

――え、そっち？

って何で？発音が悪かったか？

千斗「ごめん、高校生って行ったんだけど……。」

俺はさっきよりもはっきりと、彼女に伝わるように言った。ちょっとふざけすぎたのが気に障ったとかならともかく、彼女は本当に分からないといった様子で首を傾げている。

そして彼女から返ってきたのはまさかの一言だった。

「だから何だよそれ、聞いたことないぜ?」

――いや、そのボケは無理があるだろ……。

さっきの俺の寒いギャグも大概だが、これはボケと言えるのだろうか。

もしかしたら彼女なりに場を和ませようとしてくれているのかもしれないが、流石に高校生という単語のみでボケをかますのは些か辛いものがある。

しかし当の彼女はと言うと、少し悩んだように顎に手を当てて、「でもさんがくねんってのは・・・」、と呟いている（かわいい）。

ふざけて言ったわけではないとしたら、高校という単語自体を知らない……?

それこそふざけた話だが、この子金髪だし、ここは日本じゃなく外国のどこかで……

いやでも待てよ?

日本語で会話が成立してるよな?

と言うことはやっぱりここは日本……いやでも、高校生を知らないなんて、そんなことあるか?

この子が極端に年齢が低ければ、分からなくもない話だが、見た感じはやはり、どれだけ高く見積もっても、同い年か1個下、低くみるなら小学校高学年・・・いやそれはないか?

まあどちらにせよ、高校という単語くらいは、知ってて然るべき歳の筈だが・・・。

千斗（つまりどういうことだってばよ……。）
これもうわかんねぇなあ（幻聴
魔理沙「お、おい、大丈夫か？」
俺の困惑焦燥気味の態度を気遣ってか、声を掛けてきてくれた少女。ついさっき会ったばかりの人を心配してくれるなんていい子だなぁ（現実逃避）。
あとかわいい。
千斗「ゴメン、大丈夫だよ。」
魔理沙「そうか、ならいいんだ。」
とりあえず、分からない事だらけだけど、少しずつ解き明かしていこうか。多分この子に聞けば何かしらは分かるだろ。
楽観的すぎるような気もするが、ポジティブと捉えれば問題ないよね！

――さて・・・そろそろ追求してもいい頃合いか。
千斗「魔法使い……。」
彼女にも聞こえる声でそう呟く。
俺の聞き間違いで無ければ、確かにそう言ったな、この子は。
普通に考えれば、何言ってのかなこの子は、で終わるんだが、俺には彼女がそんな嘘

を付くような子には見えないし、状況が状況だから、そんなあり得る訳無い様なことがあり得てもおかしくない・・・?

千斗（いや……おかしくないと思ってしまう方がおかしいのか?）

通常では発生しないことが連発して、俺の頭がおかしくなっている可能性も大いにある。元々かもしれんが。

彼女の言った『魔法使い』という言葉に、何故だか、あまり疑問は感じなかった。だからこそ今までスルーしていた訳だが、普通に考えれば真っ先にツッコミを入れるか、墓場の下まで持っていくかの二択しか無いわけで。

ある程度落ち着いたこのタイミングで話題に出すということは、言外に『魔法使い』という存在が現実にあると思っているからか?

自分はロマンは好きだが、それほどメルヘンチックではないと思っていた、が、とすればどうしてこうもすんなりと『魔法使い』と言う言葉を受け入れられたのか。

魔理沙「そうだぜ!私は普通の魔法使い、霧雨魔理沙だぜ!」

すると彼女・・・霧雨はやや気張って、そう言った。

その発言には、やはり一切の詐称や虚偽を感じる事が出来なかった。

かといって、そんなの架空の存在でしかないと思われたものを真っ向から信じる事も出来ない。

結局のところ、考えても結論は永遠に出そうにないので、ちょっと置いといて、他の事を聞くことにする。

千斗「じゃあさ、此処って幻想郷であってる？」

次のキーワードは、あの謎の紙に書いてあったことについて。思い返すと『ようこそ』と書いてあった。であれば、今ここは幻想郷なる場所で違いないはずだが。

魔理沙「そうだぜ？でも何でそんなこと聞くんだ？」

――どうやらビンゴのようだ。

さっきからやけに思考がクリアな気がするが、悪いことではないので深く考えないことにする。

となると、何か理由があって俺は幻想郷に連れてこられた、のか……？

……何のために？何故俺なんだ？

結局のところ、分からないことが増えただけ、か。

千斗「えっと、正直俺もよく分かんないんだけど、気が付いたらここに居たわけで……。だから、ここがどこなのかも分からなくて・・・。」

ここまで話して、俺はようやく自分が無意識に言葉を発していたことに気づく。彼女に対する警戒心がいつの間にか無くなっていたのか、自分でも驚くほど素直に境遇を口にしていた。

すると霧雨はとても驚いた様子で
魔理沙「そ、そうなの!?もしかして貴方、『外来人』なんですか!?」
と、興奮気味に俺に聞いてきた。
千斗「外、来、人……?」
『外』から『来』た『人』、ってことか?なんか『悪』『即』『斬』みたいだな。主に語呂が。
この場合外ってのは、日本って訳で、やっぱりここは外国のどこかで、たまたま日本語を喋れる少女が居ただけなのか……?
千斗「えっと、ここの地名は何て言う名前なの?」
魔理沙「地名?マジックフォレスト、だ……ぜ?」
……何故か彼女の顔が赤くなってるように見えたが、あまり深く考えず、続ける。
千斗「マジックフォレスト?魔法の森ってこと?」
魔理沙「そうだぜ!あれ、何で知ってるんだ?」
……英語を直訳しただけなのだが。にしても、『マジックフォレスト』ね。どうにもRPGに出てきそうな名前じゃないですか。嘘みたいだが、段々と現実味を帯びてくるな。
千斗「あー、うん。じゃあさ、ここは何処の国のマジックフォレスト?」

魔理沙「……クニ？」
……あー、まさか本当に、なのか？
ここが異世界なんて、
そんな非現実的な事が……。
千斗「……ねぇ、霧雨。ちょっとでいいからさ、魔法、見せてくれないかな？」
魔理沙「えっ、魔法をか？」
千斗「うん。何でもいいからさ。」
そう……これで決定的になる。
これが嘘か真か。夢か現実か。
俺の知ってる世界だったら、魔法なんて使えないからね。だから、彼女が嘘をついてなければ……！
魔理沙「わ、分かったぜ。……やぁ！」ボゥッ‼
千斗「……ッ！！」

俺は今、目の前で起きている普通ならあり得ない現象を目の当たりにして、全身に鳥

肌がたっていた。彼女の手のひらから、炎が出ている。マジックなんかじゃない。そこには何もない、何もない手のひらから、炎がメラメラと燃え続けている。これを魔法と呼ばずになんというのか。

魔理沙「お、おい、もういいか……？」

千斗「……あっ、あーごめん！も、もういいよ、ありがとう。」

――信じられない……。まさか、自分が。

異世界トリップするなんて……!!

これで確信した。俺はなろう系主人公だった。

って違う。

異世界に来たようだった。俺がそうなった理由は分からないが、ここは普通の世界じゃないことだけは確かだ。最初に感じた直感は、間違って無かったらしい。

千斗「……ねぇ、霧雨。この世界の事、もっと教えてくれないかな？」

でも俺の物語は、まだ始まったばかりだ！

俺の楽しい異世界ライフはここから加速するんだ！

～幻想郷について少女説明中～

千斗「……そう思っていた時期が僕にもありました。」

現実は非情である（知ってた）。

?「・・・ふーん。」

～少女説明中のハイライト～

―幻想郷とはなんなのか―

千斗「……えっ、帰れるのか!?」

魔理沙「あ、あぁ。多分な？」

先程から霧雨に幻想郷の説明を受けていたんだが、なんと、俺は元の世界にも帰れるそうなのだ！

異世界ものって、だいたい戻れないパターンだからこれは非常に助かる！まだまだ元の世界でやりたいこともあるしな。

にしても……凄いな幻想郷。

霧雨から聞いた話によると、幻想郷には魔法使いの他に妖怪までいるらしく、その種類も鬼に天狗に妖精に吸血鬼とさまざまで、おまけに『種族:巫女』、なんてものまで存在しているそうだ。

何でもありだな幻想郷……。
て言うか種族巫女とはなんなのか。
……いやマジで何なんだよ!?

—俺の価値は—

霧雨の言った『外来人』とは、俺のように幻想郷外から、何らかの理由で幻想郷に入ってきてしまった人の事を指すらしい。
魔理沙「私も初めて見たぜ～。外来人なんてさ。」
千斗「へぇー俺って珍しいんだ。」

……なーんて口では言っているが、内心は
千斗（俺は希少価値♪チヤホヤされること間違いなし♪）
……なんて事を思ってたりするわけだ。
魔理沙「外来人ってすぐ死ぬからさ、だからほとんど見ないんだよ。」
千斗「えっ」
魔理沙「ここって瘴気が酷いからさ、多分1～2時間位で普通の人間なら倒れちゃうんだ。それに幻覚症状とかも酷いしさ。他には、野良妖怪に食べられるとか？
まぁお前は運が良かったな！私、生きた状態の外来人には初めてあったぜ！」
千斗「あー……そういう……？」
千斗（同じ所をぐるぐるしていたのはそういう訳か・・・）
魔理沙「……どうかしたのか？」
千斗「い、いえ……何でもありません。」
魔理沙「？」

因みに今は霧雨のお家にお邪魔させて貰ってます。
僕は今も元気です。

―魔理沙はかわいい―

千斗「そう言えば、霧雨って他にはどんな魔法が出来るんだ？」
魔理沙「……えっ？えっと……。」
おや？
千斗「えっと？」

魔理沙「溶媒があれば、出来るんだけど……。」

霧雨の様子が……？

千斗「それなしで出来るのは……？」

魔理沙「……うぅぅぅ……。」／／／

しおらしく……！

千斗「霧雨はかわいいなぁ（ごめんごめん、魔法を使えるだけでもすごいよ）。」

魔理沙「えっ？」

千斗「あっ」

……聞かなかった事にしてもらいました。

―お姉さん―

？「魔理沙ー、お邪魔するわよー？」
千斗「ん？誰だ？」
魔理沙「この声は……アリスか！」
アリス「ちょっと魔理沙ー？居るなら返事して……って。」チラ
千斗「……。」汗ダラダラ
――初対面！……女性！……美人！……無理！
魔理沙「あぁ、アリス紹介するぜ。コイツは……」

アリス「……お邪魔しちゃったかしら？」
魔理沙「……!!ち、違うんだぜ！そんなんじゃなくて……！」／／／
アリス「あら、私何も言ってないわよ？」
魔理沙「……!!
……あーもう！アリスの馬鹿っ！」ナミダメ
アリス「フフ……ごめんなさいね。ちょっとからかっただけよ。よしよし……。」ナデナデ
魔理沙「あ、頭を撫でるなぁ！」／／／

千斗（かわいい）
アリス「……それで、貴方は？」ギロ
千斗「……ッ!?」ビクッ!!

～少年説明中～

アリス「なーんだ、そうなの。てっきり魔理沙に男でも出来たのかと……。」
魔理沙「で、出来るわけないだろ！」／／／

千斗（えっ、いないの!?こんなにかわいいのに!?）
それにしてもこの女性、アリスっていう人らしいけど、霧雨よりも年上っぽいし、金髪だし、ちょっと似てるし、もしかして霧雨のお姉さんなのか？
アリス「あら、紹介が遅れたわね。私はアリス・マーガトロイド。人形遣いよ。よろしくね、千斗くん。」ニコッ
千斗「ッ！　い、いえ！こちらこそ……！」ドキドキ

……美人はそれだけで罪。

―お泊まり―

※アリスは帰りました。

魔理沙「ところで千斗は今夜はどこで寝るんだ？」
千斗「あ……やばい、どうしよう。」
そう言えば、どうする……。てか、これからどうやって暮らせば……。
魔理沙「……あーその、お前さえ良ければなんだが……。」
千斗「？」

魔理沙「……その、一晩だけなら家に居ても、いい、ぞ。」／／

千斗「……あべしっ！」トケツ
魔理沙「えっ!?千斗!?しっかりして！千斗！」

……かっ、かっわ（知ってた）
!!!!

総評：濃い1日だったな……。

零章・博霊神社編
巫女さんとの遭遇

――博麗神社・境内

魔理沙「ほら、ついたぜ。」
千斗「っと、ふぅ・・・ここが。」
不馴れな2人乗りから解放され、一息つく。
というのも、目的地に到着した訳で。
一晩霧雨の家でお世話になった俺は、なんやかんやあり、此処『博麗神社』という神社に来ていた。というか、連れて来てもらった。もちろん、霧雨に。

千斗「ごちそうさまでした！」
これは昨日の出来事。
晩御飯に、なんと霧雨が手料理を振る舞ってくれた。いや霧雨の家なんだから当たり前だが。
魔理沙「はい、お粗末様でした。」
それが美味いなんのって、霧雨という美少女が作ってくれたのも相俟って、もはや店で出しても遜色ないくらいの味だった。
魔理沙「それじゃあ、お皿洗うから。」
千斗「いや待って、それは流石に俺が……。」

魔理沙「いいから、千斗はその辺で寛いでて？」

とまあ、新婚さんみたいなやり取りをしながら（意識したら赤面しそうだが）、霧雨は台所に消えていった。てかいつの間にか名前で呼ばれてるし。

食事まで用意してくれて、申し訳ない気持ちだが、家主がやるというので、俺が口を挟む権利は無い。手持無沙汰になった俺は、食器洗いをしている霧雨を尻目に、一人椅子に座りボーっとしていた。あまり他人の家をキョロキョロするのも気が引けるので、あえて何もしない事を選んだ訳だが。

すると、急激に眠気が襲ってきた。

満腹で牛になってると、当然眠気は襲ってくるものだが。今日は本当に色々とあったから、いつもより余計に眠気を感じる。美少女に色々と世話を焼いてもらい、自分はだらける、なんてシチュエーションも、案外拍車をかけているのかもしれない。それが良くないことであるのは、言うまでもないが。

だからといって、家主を差し置いて寝るわけにはいかないし、俺は椅子に座りつつもこれからの事を思考することにした。この世界に来たばかりで、右も左も分からないことだらけだから当然であるが、やっぱりどうしても考えが纏まらない。

自分がどうしてここにいるのか、ここにこれたのか、この世界は何なのか、元の世界とは何だったのか、考えるとキリが無いし、自分だけで答えを出すのは不可能だと、分

かってはいるが、どうにも落ち着けないというか・・・いやこれやっぱり霧雨だけに食器洗わせるの不味かったんじゃないか!?

まぁわかってた。本当に落ち着けない原因は何なのかってのは。霧雨に寛いでいてと言われたその時は、彼女の気を損ねないように、といってもこれは無意識の自己防衛ではあるが、無理やり自分を納得させた。

しかし椅子に座り、しばらく心が落ち着いた所で、いざ冷静に振り返ってみると、寝床を世話してもらい、食事を用意してもらい、片付けまでお任せするなんて、良心の呵責を感じずにはいられないではないか。

最初は最もらしく自身の境遇について考えてはみたものの、やはり心のどこかで霧雨の事を考えてしまう。いやもちろん変な意味じゃないよ?

実際のところ思考に耽りつつも、やっぱり手伝いに行こうか、とか、何かやらんと申し訳ねぇ、とか考えたりした。しかし良いよと言われた手前、無理に恩を返さんでも・・いやしかし世話になりすぎでは・・・。何度か椅子から立ったりもしたが、どうしても足がそこへ向かわなかった。

そうこうしているうちに、キッチンから食器が擦り合う音が途絶えた。とうとう踏ん切りが付かず、行動には移せなかったようだ。笑ってくれて構わんよ……。

魔理沙「ごめんね、おまたせ。」

全然待ってないよ！と心の中で言っておく。もちろん声には出さない。そんな勇気ないからね。
千斗「いや、こっちこそごめん。料理もしてくれたのに洗い物まで……。」
魔理沙「いいの。私が好きでやってるから！」

……天使かな？
めちゃくちゃかわいい。もはやかわいいという言葉では言い表せない。めちゃくちゃ尊い。いい子すぎる。やべぇ語彙力が足りない。
そんな現代に舞い降りた天使は、眩しいくらいの笑顔で俺を見てくる。と、思ったら今度はいきなりハッとした表情になると、そのまま俯いてしまった。
千斗「ど、どうしたんだ霧雨？」
魔理沙「だ、大丈夫……なんでもない・・・だぜ。」
ホントに大丈夫なのだろうか？なんかプルプル震えているんだが……。
魔理沙「……そ、そんなことより千斗！何か私に聞きたいことはないか!?」
千斗「え？なんで？」
魔理沙「ほ、ほら、千斗は外来人だろ!?まだ分からないこともあるだろうしな！」
と、早口で捲し立てる彼女。

どうやら話題を変えたいらしい。かなり強引な話題転換だが、反発する理由も無いのでそのまま話に乗ることにする。

千斗「あぁ、うん。まあそうだね。じゃあ聞いてもいいかな？」

魔理沙「あぁ、いいぜ！どんとこい！」

さっきまでの清楚な感じはどこへやら、男勝りな口調で喋る彼女に違和感を感じずにはいられないが、変に追求しない方が良いと直感が言っているので、気にしてない振りをする。

千斗「えっと、俺って元の世界に帰れるの？」

と聞いてはみるが、本当はあまり期待してはいなかった。こういうのは大抵は帰れないのが普通だし、帰るとしても魔王を倒さなきゃいけないとか、そういうのだろうし（偏見）。なんて事を考えていると

魔理沙「あぁ、多分帰れるぜ？」

と、予想外の返答が来た。これには思わず

千斗「……え、帰れるのか!?」

驚きと若干の嬉しさに声が大きくなってしまった。

魔理沙「あ、あぁ。多分な？」

……霧雨も少し引いている。当然である。

我に返った俺は目を瞑り、一呼吸いれると今度は落ち着いて霧雨に問いかける。
千斗「えっと、それはどうやって？」
今度は努めて冷静に質問をしたはずだ。すると、霧雨は得意そうに
魔理沙「博麗神社に行くんだぜ！」
そう言った。

そして、今に至ると。

まあ、自慢気に神社の巫女の説明をしてる霧雨だったり、此処に来るまでに、いろいろと有ったんだがそれはまた、別のお話で……。

因みに神社まで霧雨に物理的に送ってもらった。

具体的に言うと箒に乗せて貰ったのだ。

流石、魔法使いというだけあって、空を飛ぶのも御手の物らしい。

空を翔ぶにあたって、最初は驚きもしたし怖さもあったが、慣れると自転車の２人乗りの要領で、想像したほどの恐怖は感じなかった。まぁ怖かったのは間違いないんですけどね。

霧雨が俺を気遣って、安全運転してくれたのかもしれない。それにしたって、我ながら大分異世界に順応しているようである。

神社に到着したのは、箒に乗せてもらってから１０分少々といったところ。博麗神社の本堂は随分高いところにあるようで、来る途中にあっためっちゃ長い石段が特徴的だった。まあ自分たちは空を飛んで来てるので関係ないが、あれ歩いて向かうのキツすぎんか？と思ったり。

そうして大きな鳥居を潜ると、ずいぶん遠くに本堂が見えた。２００メートルはある

ように感じるが、いくらなんでも遠すぎるのでは・・・？

色々と参拝客に優しく無さそうな神社だな。

その本堂の外観は、外で見る近所の神社よりは、少し大きいってところか。平均サイズがどれほどなのか良く分からないが、特別大きいって訳でも無さそうだ。見た目も普通の神社みたいだが……。

ーーと、ここで霧雨が言ってたことを思い出す。

魔理沙『あそこの巫女は普通の人間じゃないぜ。』

霧雨はその時、『行けば分かる』と言って詳しくは教えてくれなかったが。

な、なんかゴツい巫女が居るのだろうか……。種族『巫女』ってくらいだしな。

とにかく、百聞は一見にしかず、巫女さんに会ってみよう！

本堂の前まで行くと、ポツンとお賽銭箱が置いてあった。俺はそれに、何だか得体のしれない寂しさか、虚しさか、上手く言葉では表せない、何かを感じた。一体何なんだこの感覚は・・・。

魔理沙「おおーい！

・

・

・

霊夢ー！　来たぜー！」

俺が謎の悪寒を感じていると、霧雨は一見誰も居なさそうな母屋？の中へ声を掛ける。

・・・しかし返ってきたのは、沈黙。

魔理沙「霊夢ー？　いないのかー？」

？「・・・はいはい、いるわよ。」

と思いきや母屋の中からうんざりしたような表情の女の子が出てきた。

ーーあの子が、巫女さん……？

若いな・・・。『巫女さん』と何となく思い込んでいたので率直にそう感じた。

その子の髪は黒み掛かった茶髪で、大きな赤いリボンで後ろに纏めてある。背は霧雨と、同じか少し小さい位か？

あ、でも霧雨のお洒落な黒三角帽分入れると、少し巫女の方が大きいかな？

魔理沙「よう！霊夢！」

霊夢「ったく。またあんた……？

なに、暇潰しにでも来たの？」

魔理沙「いや、今回は違うぜ？　実はだな……。」

と、二人で会話し始めた。処遇、ガールズトークと言う奴だろうか？
別に俺は部外者だから話に入る必要なんて無いが。
いや、別に疎外感感じてる訳じゃないですよ？
女の子二人、しかも一人は全く面識ない人だし、その会話に混ざるトーク力も勇気もないのにどうしろっていうのか。ここは黙ってじっとしているのが一番正解なんだ、そうだ間違いない。
二人が何を話しているのかは断片的にしか聞こえないため良く分からないが、俺のことについて話をしているのは間違いないだろう。
と、思考に耽っていると、おもむろに巫女がこちらに歩いてくる。その目はまっすぐ俺を見据えていて、俺の前に立つと、開口一番にこう言い放った。
霊夢「それで、あんたがその外来人ね」
千斗「……？」
その意表を突く問いに、俺の思考が一瞬フリーズするが、すぐに『外来人』と言う言葉が俺を指していることを察知して
千斗「あ、あぁ、なんかそうらしいな。」
と、やや曖昧な返事をした。『外来人』なんて呼ばれ慣れてないので、認識に時間がかかるのも無理は無いのだが。

すると巫女は俺の顔をまじまじと見てくる。
な、なんだ？俺は見つめられるのは苦手だぞ……。
そんな見るほどの価値無いと思うんですけど。
誰かに見つめられることに慣れてない俺は、思わず表情を強張らせながら、目が泳いでしまった。誰だって女の子に見つめられたら、目を合わせ続けるのは難しいと思うが、何が良くないって、この博麗霊夢という巫女。
めっっっっっっちゃくそ美人。
霧雨も大概天使だったが、この子も負けず劣らず、あり得んほど整った顔立ちをしている。
いわば『美少女』と呼ばれるに相応しい容姿をしているのだ。
そんな子にヘタレの俺が見つめられ続けたらどうなるかって？
千斗「えっ・・・えっとぉ・・・。」
はい、どもりました。うわきも。我ながらきっしょ。
さっきまで自分ではクールぶっていたつもりだったが、ちょっと動揺するとすぐにこれである。
あほくさ……。
霊夢「ふーん……。」

そんな俺の様子に呆れたのか、はたまた自然に出たのか、無機質な声を出す巫女。それだけで絵になるのはホントにズルいと思う。

霊夢「私は博霊霊夢。この博麗神社の巫女よ。霊夢でいいわ。」

と、俺の内なる苦心は知らんとばかりに、その無機質な声のまま、彼女は自己紹介をしてきた。

千斗「えっと……よろしくな、博霊。」

それに対して俺が出せたのは、『よろしく』という必要最低限の挨拶だけだった。正直これでもいっぱいいっぱいである。よく噛まずに言えたと自分を誉めてやりたい。

たが、俺が『博霊』、と言った瞬間に、あの巫女さんの瞳から、ハイライトが、消えた・・・？

霊夢「私は霊夢よ。博霊って呼ばれるのは好きじゃないの。だから・・・霊夢って呼びなさい。」

無表情、確かに彼女は無表情のはず・・・だが、その瞳に光は無く（主観）、このまま訂正しなかったら殺されるんじゃないかと錯覚するほどに凍てついた視線が、俺に突き刺さる。その威圧感たるや、俺のちっぽけな羞恥心を蹴散らすには十分すぎるものだった。

千斗「ひっ・・・わ、わかったよ……れ、霊夢……。」

さっきまでの恥ずかしさは何処へやら。
いくら博ｒ・・・霊夢が視線だけで人を殺せるんじゃないか、と思うほどの眼力で凄んできたとはいえ、見た目年下の女の子にここまでビビらされる俺って・・・。
いやでも何て言うか……逆らったら冗談でもなく消すぞ、って感覚が・・・。
千斗（種族『巫女』怖すぎる・・・。）
霧雨が言ってた『巫女は普通じゃない』って、こういうことだったんだなって・・・。
そこでふと、霧雨に視線送ると、やや不満そうな表情で俺を見つめ返してきた。なんで……（困惑）
霊夢「で、あんたは何て言うのよ？」
そう質問してくる霊夢には、さっきまでの威圧感を既に無く、年相応の女の子といった感じだ。相変わらず声に抑揚は全くないが・・・。
そういえば自己紹介がまだだったな。
千斗「俺は矢部、矢部先斗だ。よろしくな。」
嫌な予感がしたので、俺はあえて、名字の方を強調して言った。
――が、無駄・・・！
霊夢「ん、よろしくね先斗。」
知り合ってからほとんど時間たってないのに名前で呼び会うって・・・。ここに来て

恥ずかしさが再燃してきた。
ていうかお前より付き合いが長い、まぁ大差ないが、霧雨だって霧雨って呼んでるのに・・・。
ここで、またふと霧雨の方を見てみる。今度は普通に不満顔で俺を見て来た。えぇ・・・。
霊夢「で？あんたなに？外の世界に帰りたいの？」
すると霊夢は、飄々と、いきなり核心を突いた質問をしてきた。
千斗「ま、まあそれはそうなんだけど……頼めるのか？」
此方としても、やはり帰れるなら帰りたいものである。それは勿論、現代（あっち）に居る家族や友人に会いたい、と言うのもあるし、フルブもエクバ2もやりたいのだ。長らくやってないと腕が落ちてしまうし、出来るだけ早くがいい。ごく当たり前の様に、帰る理由のひとつにゲームが入っている事については、突っ込まないでおく。
すると霊夢は、少し考えたような素振りを見せると
霊夢「まあ、出来なくはないわね。」
と、言ってきた。おお、本当か！と心の中で興奮しつつ、表情は冷静にして
千斗「出来なくはない？どういう事だ？」
そう疑問をぶつけた。出来なくはない、と言うことは、出来るけれどやりたくはない、

だったり、やりずらい、と言うことなのだろう。ヤツの場合は前者っぽいが……。

霊夢「いちいち結界を開けて、それを直すのが面倒なのよ……。」

はい前者でした。ですよね。まあ確かに、他人の為に疲れるようなことは、なるたけしたくないだろう。それ相応の対価ってもんが要るよな。そこで俺は霊夢にこう提案してみた。

千斗「じゃあ、今何か……して欲しい事とかないか？俺に出来ることなら何でも……

霊夢「お賽銭が欲しいっ！」……はい……？」

俺は、ポカーンとなってしまった。いや、だって何でもするって言われて、お賽銭！なんて言う奴がいるか……？

いや目の前にいるけどさ。そう俺が呆れていると

霊夢「あんた、出来る事なら何でもするって言ったじゃない……！」

若干頬を赤く染めながら、上目遣い（背の関係でそう見える）で俺を見てくる霊夢に不覚にもドキッとしてしまう。

知り合ってからずっと退屈そうな無表情だったのに、突然の赤面顔である。そのギャップが余計に心臓の音を大きくさせるが、ここはグッと堪えて、その事をなるべく表情に出さないように努めながら霊夢に返事をする。

千斗「いや、確かに言ったけどさ……。」

霊夢「何よ。」
千斗「本当にそれでいいのか？」
もしかしてお賽銭レベルじゃない額のお賽銭を要求するんじゃ無かろうな？てか、現代の金って使えるのか？
霊夢「出来れば多い方が……。」ボソボソ
千斗「ん？」
霊夢「何でもないわよ！そうよ、それでいいわ。」
最初の方何を言ってるのか分からなかったがどうやらそれでいいらしい。それでいいのか巫女さん……。
千斗「えっと……現代（こっち）のお金でもいいか？」
霊夢「別にいいわ。後で紫に変えて貰うし。」
千斗（ゆかり……？誰だろうか……？）
まあ、今はどうでもいいか。取り敢えずお賽銭をすれば帰れるみたいだから、と自分の財布から千円札を取り出す。普通のお賽銭ならこんな額絶対に入れないが、今回は特例だ。奮発しておこう。
そこでまた、ふと霧雨が視界に入る。さっきから霧雨の事チラチラ見すぎだろ俺…。
すると霧雨は何か言いたそうに、もじもじしていた。

千斗「霧雨、どうかしたのか？」
そう俺が問い掛けたところ、彼女は恐る恐るといった様子でかつ上目遣いになりながら
魔理沙「……その……千斗は、帰っちゃう……のか？」
と若干頬を赤く染めて、そう言ってきた。

こうかはばつぐんだ！
せんとに３２２のダメージ！
「まだだ、まだ終わらんよ！」
せんとはたおれ……そうだったがなんとかたえた！

Ｚの覚醒技を生当てされたような衝撃だった。しかもリスから３秒で。あのときは我が目を疑ったが、耐久ミリの運命を追おうとしたら相方に対して下ろされた大剣がｒｙ）……。

とにかく、物凄い衝撃とともに頭に電撃が走って、冗談抜きでくらっとした。マジで心臓に悪い（良い意味で）。
それでも俺は、霧雨の質問（攻撃）を何とかこらえて
千斗「大丈夫だ、しばらくしたら、また戻ってくるさ！」
と、恥ずかしさを紛らわすようにわざとらしくカッコつけて言った。
千斗（・・・いや、戻れるのか？）

？「それは、不可能ですわ。」
俺がそう考えたのと、何処からかその声が聞こえたのは同時だった。

スキマとの遭遇

ーー博麗神社・本堂前

？「それは、不可能ですわ。」

突然、何処からか声が聞こえた。それは霊夢や霧雨の声とは違うものだった。しかし周りを見回しても、それらしき人物もいない。はて……？

霊夢「何やってんのよ、紫」

と、うんざりした表情の霊夢が上に向かって言った。

千斗「んぇ・・・？」

つられて空を見てみると、何かが、ある。

千斗「ッ・・・おぉう!?」

何も無いはずの空間に、それはあった。

空間が裂けているのか、その中は謎の目玉で覆われていて、割れ目の両端にはリボン

らしき物がある。
はっきり言わなくても不気味なそれは、霊夢の問いかけにこう返した。
？「・・・ツン、霊夢？今わたくしは、訳あって姿を現せないのよ。だから、スキマから失礼するわね？」
霊夢「はぁ？」
千斗（はぁ？）
思わず、すっとんきょうな声が漏れそうだったが、霊夢が代わりに答えてくれたようだ。
霊夢「いったいどういう・・・いや、どうせ聞いても無駄ね。」
？「そうね♪」
いやあの、二人で完結しないでもろて・・・。完全に置いてかれた俺は、疎外感と恐怖心から逃れるように、霧雨の方を見る。
魔理沙「・・・・・・・。」
霧雨も同じようにポカーンとしている・・・いや、少し腰が引けているな。あの謎のアレに、ちょっと怯えてるんではないだろうか？
千斗「だ、大丈夫か？霧雨。」
俺は特に何も考えず霧雨の近くに寄り声を掛けた。

魔理沙「あっ、千斗・・・うん。」
といいつつも、俺の後ろに隠れるように半歩下がった霧雨。あっ、ちょ、霧雨さん!?袖掴んでませんか!?
右肘が後ろに引っ張られるような感覚。霧雨の位置的に、多分右の袖を掴まれてるんだろう。こんな訳分からんシチュエーションじゃなけりゃ、ドキドキしたりするんだろうが、正直今は俺が霧雨の後ろに隠れたいくらいである。いや絶対にそんなことはしないが。
?「・・・・・・・」
あ、あれ?心なしか謎の空間から繰り出される威圧感が強くなったような・・・。
それにしてもあれはいったい何なのだろうか?
とりあえず人間じゃないことは確かだ。人型ではない。空に浮いてる。声はエコー掛かった声で、まぁ聞くぶんには普通に聞こえる。謎のそれの回りの景色が雲一つ無い青空なのが、余計に不気味さを際立てているが・・・。
霊夢「で、何しに来たのあんた。」
と、俺と霧雨が狼狽えてるいるのをお構い無しに、霊夢がそれに向かって声を掛ける。
?「その前に、お互いに自己紹介といきましょう?」
しかし、それから放たれた発言は、意外にも俺と霧雨を気遣うともとれる言葉だった。

もしかしたら『謎のそれ』は霊夢（目の前の巫女）よりも思いやりがあるのかもしれない。

？「驚かせてしまってごめんなさいね。わたくしは八雲、紫。スキマ妖怪とも呼ばれているわ。」

あっ、妖怪か！それならばこの不気味な形態も納得だ。少しばかり日常的な会話をして、ここが異世界ということを失念していた。空間が喋るということに無意識に拒絶反応があったようだ。自分の世界であればそれが普通だが、ここは異世界。何が起きても不思議じゃない。

千斗「俺……あ、いえ、自分は矢部千斗です。」

とりあえず自己紹介を、と言われたので、少し緊張しながらも自身の名前を伝える。あの謎の空間は、スキマ妖怪の八雲紫さんというらしい。名前は普通に人間みたいな名前だが。見た目的にはクロウラー、とかミュルニル、とか、そっちの方がしっくり来そうだ。

魔理沙「わ、私は霧雨魔理沙、です。」

と、俺に続いて霧雨も自己紹介をする。しかし声がはっきりしてないと言うか、やっぱりまだ怖いのかな。

？「大丈夫よ、怖がらなくて。取って食ったりしないわ♪」

そんな霧雨の様子を汲み取ってか、少しおどけて言う八雲さん。あ、この妖怪良い奴

だな、と今までビビってた事を棚に上げて思ったりする。やはり人・・・ではなく妖怪だが、先入観でモノを見てはいけないようだ。

そこでふと、霊夢の様子を伺う。俺とは視線合わせず、八雲さんの方を見ている霊夢の表情は、苦虫を噛み殺したといった感じで、いかにも『うげー』とでも言いたげである。

霊夢「うげー・・・。」

あ、言った。言いたげかと思ったら本当に言った。

こいつホントにマイペースだな。悪く言えば容赦がない。真に恐れるべきは八雲さんではなく、霊夢なのかもしれない・・・。

実際さっきめっちゃ怖かったしね。

紫「あら、霊夢。何か言いたげね?」

霊夢「・・・・・・・・・。」フリフリ

八雲さんがそれに対して反応するが、霊夢は何も言わず、うんざりした表情のまま、手をヒラヒラと上下に振っただけだった。ひょっとしなくてもこいつ、八雲さんのこと嫌いだな?

紫「ふふ、ごめんなさい。霊夢はいつも私にああなのよ。別に仲が悪い訳ではないから、あまり気にしないで?」

千斗「は、はぁ。」
これで仲が悪くないって言えるって、この妖怪どんだけ心広いんだよ・・・。
紫「それで、千斗くんと魔理沙ちゃんね？」
千斗「あ、はい。えと自分は・・・」
紫「外来人、でしょう？」
『外来人』と自分が言う前に言われてしまった。な、何故分かったんだろう。都会人からみた田舎者みたいな感じなんかな・・・。
紫「・・・その佇まいを見れば、言わなくも分かるわよ♪」
少し間があったのが気になるが、なるほど、服装の違いか。俺は今制服を着てるわけだし、霧雨や霊夢の服装も特徴的で、何かしら『極り』というものがあるのだろう、と自分を納得させた。

ーー後から思うと、どうしてこの説明ですんなり納得出来たのか疑問だが、この時の俺は、八雲さんのこの言い分に、不思議なほど疑問も違和感も感じなかったのだ。

紫「それで、千斗君は幻想郷（こちら）と元の世界を行き来出したい、ということで良かったかしら？」

八雲さんからそう言われてハッとする。そう言えばそういう話だった。あまりの突拍子の無い出来事に、それまでの話の流れをすっかり忘れていた。

千斗「あ、はい！そうなんですけど・・・。」

しかし俺はそこで、最初に八雲さんに言われた、『それは、不可能ですわ』という言葉も一緒に思い出したため、はっきりと『ハイそうです』とは言いきれなかった。やはり、そう都合良く事は進まないのだろうか。

紫「そうね・・・結論から言うと、今は無理ね。」

霊夢「今は？どういうことよ？」

八雲さんの言葉に反応したのは、意外にも霊夢だった。さらにそれは、俺の言いたかった事と同じだったので、俺は黙って二人の様子を伺う。

紫「彼・・・千斗くんにはね、異能が眠っているのよ♪」

と、八雲さんは得意気に（声だけなので実際にそうか分からないが）そう言った。

すると霊夢は不満気ながらも納得した様子で

霊夢「あー・・・はいはいそう言うことね。めんどくさ。」

と言って、そのまま押し黙ってしまった。

え？俺に異能が眠ってる？

それなんてラノベ？と言いたくなるくらいには二人の会話には現実味が無かった。

いや元々現実味はないが、まさか自分に『異能がある』なんて。
異世界にトリップしただけで無く、そこで異能の力を持つなんて・・・。ご都合主義にもほどがある気がする。もしかして俺無双しちゃうんですか!?
霊夢「変なこと考えてるわね。」
そう霊夢にジト目で指摘され、俺はハッとする。顔に出ていただろうか?ニヤけてはいなかったと思うんだが・・・。
心の中はニヤけるどころか狂喜乱舞だったけども。
千斗「か、考えてないぞ!?」
やべっ、声が上擦った!全然隠せてないぞ俺!
霊夢「ねえ、千斗。」
え、今のセリフ、スルーされんの?
何かリアクションしてくれませんかね?笑うとか、からかうとか、なんかあるでしょ?
無視されるのが一番心に来るんですよ・・・。
しかし霊夢はそんなこと知らんとばかりに続ける。
霊夢「今からあんたの能力を発現させるから、私の言う通りにしなさい。」
千斗（えぇ・・・?）

え、マジか。そんな発現させるからホイって、出来るもんなのか？
何か裏がありそうだな・・・。
すると霊夢は俺の考えを読み取ったのか
霊夢「あくまで、発現させるだけよ。そこからどうするかはあんた次第よ。」
千斗（あーなるほど、そういうことか・・・）
つまり、能力を使用出来る状態にする事は簡単でも、それを使いこなすのは難しいってことか。なるほどね。現実はやっぱり甘くない訳だ。あんまり上手く行っても後が怖いので、そっちの方が安心はするが。
千斗「よしっ！霊夢、いつでもいいぞ！」
それにしたって、不思議な力が、しかもすごい（とは言ってない）能力が、俺の中に眠っていると言うことなので、自然と声に箔が付く。
霊夢「やる気を出すのはいいけど、凄く簡単よ？」
って、えー・・・なんだそうなのかよ。そりゃ難しいよりは簡単な方がいいけどさ。なんかむなしい。
霊夢「まず、目をつぶりなさい。そしたら手を両端に広げなさい」
霊夢からの謎の指示に対して、なんじゃそりゃ、と言いたくなるが、ここは黙って言われた通りに目をつぶり、手を広げた。

霊夢「そしたら、手はそのままで、その場で回りなさい。」

千斗（は？回りなさい？）

霊夢「ほら、早く」

流石に聞き返そうかと思ったが、霊夢が急かして来たので仕方なく、目をつぶりながらその場で回り始める。

正直、恥ずい。事情を知らない奴から見たらだいぶ頭おかしい事をしている。しかしこれも能力の為だっ！と自分に言い聞かせ、そのまま回り続ける。

すると３０秒ほどたったころだろうか？

どうにも頭がくらくらしてきた。そりゃ目を瞑って回ってりゃ、フラフラになるのも無理無いが・・・。

しかし待てど暮らせど、霊夢からは何も言ってこない。

ちょ、そろそろ限界なんだが・・・。

千斗「れい、む…まだ、か？」

何だか片言の様な聞き方になってしまったが、確かに言ったはずだ。しかし霊夢からの返答はない。それどころか周りの音が一切しないのだ。あ、あれ……俺は今何をやってるんだっけ。

……意識が。

霊夢「判ったわよ、あんたの能力。」

次に意識が覚醒したのは、そんな霊夢の声が聞こえる少し前だった。本音を言えば、能力の事よりも先に、何であんなことをさせたのか問い詰めたいところだが・・・。

しかし俺の考えをよそに、霊夢は続けてこう言った。

霊夢「あんたの能力は、『あらゆるがんだむになれる程度の能力』よ。」

・・・あらゆる・・・がんだむ・・・に、なれる・・・？

ええ!?

ーー博麗神社・母屋

千斗「おいっ！それって本当なのか!?」
かなり興奮気味で言葉を発した男……名を矢部千斗と言う。
身長は１７０センチ前後で、服装は制服を着崩しており、白いＹシャツの第一ボタンは外れ、袖も捲っている。髪はうす黒い色で所々跳ねており、寝起きというのが見て分

かる。顔は整ってはいるが、やや中性的で、目が若干垂れており、世間一般で言う『イケメン』の分類ではない。

霊夢「本当よ。私も『がんだむ』ってのが何なのか知らないけど、あんたの能力はあらゆるがんだむになるって能力で間違いないわ。」

そう答えたのは、博麗霊夢という巫女。年齢は１４、５くらいの少女で、頭に赤く大きなリボンを着け、胸にはさらしを巻いており、一般的な赤と白の巫女服を着ている。ただ一つ違う点としては、彼女の巫女服は袖の部分が一切無く、脇が丸見えな所だろうか。

霊夢「分かったなら退いてくれないかしら？」

と、ほぼ無表情で千斗にそう告げる霊夢。彼女をよく知らないと、まるで怒っているかのようにも感られるそれは、興奮した彼を説き伏せるには充分すぎるものだった。

千斗「あ、悪い……。」

そう言われた千斗は、気まずそうな顔をしながら霊夢から離れていく。流石に自分のしている行為が不味い事に気付いたようだ。千斗はさっきまでの威勢はどこへやら、縮こまりながらも、霊夢の方へ向き直った。

千斗「そ、それで能力に関しては分かったんだが、どうやって使うんだ？もう使えるのか？」

まだ興奮が冷めきってないのか、やや捲し立てながら霊夢に問い掛ける千斗。その一端だけ見ると、下心的な感情も汲み取れなくはないが、彼はいたって大真面目である。

千斗からの問い掛けに対し霊夢は、顎に手を当て少し考えるような素振りをしてから

霊夢「・・・そうね。もう使えるようになったと思うわ。使い方は自分で考えてちょうだい。」

千斗「あ、そ、そう・・・。」

やはり無表情で彼に答える。一見冷たすぎるようにも見える態度に、まだ彼女との付き合いが浅い千斗は、狼狽えながらも何とか返事をするので精一杯だった。

千斗「そ、そういえば霧雨と八雲さんは？」

先程とは別の理由で早口な千斗が、霊夢にそう問い掛ける。すると霊夢は母屋の外へ顔を向け

霊夢「紫は帰った、魔理沙はあっち。」

と、いかにも面倒くさそうに返答した。

千斗「あっち・・・って、あっちか？」

千斗が母屋の外を指指すと

霊夢「ん。」

そう言って、霊夢はそれ以上千斗の相手をする気が無いのか、そさくさと部屋を出て

いってしまった。
千斗「俺、嫌われてるんかな・・・。」
誰にも聞こえないような声でそう呟く千斗。霊夢の態度からすると無理もないが、大分ショックを受けているようだ。背中を丸めてだらんとした体制で、一人部屋に佇む。しかししばらくすると気を取り直したのか、静かに母屋の外へ歩きだした。
辺りをキョロキョロ見回しながら、もう一人の知り合いを探しているようだ。そしてほどなくして、その知り合いは見つかった。
魔理沙「あっ、千斗。」
千斗「霧雨～。」
知り合いから声を掛けられた千斗は、男とは思えない情けない声を出しながら、彼女に駆け寄った。
魔理沙「・・・?どうかしたのか?」
千斗「あ、いや霊夢がさ・・・。」
千斗がそれまでの経緯を説明すると、彼女は納得した様子で
魔理沙「いや、霊夢はさ、誰にでもそんな感じだから、あんまり気にしない方がいいぜ。あいつも悪気があるわけじゃ無いんだ。嫌われてるってことは多分無いと思うぜ。」

まるで自分も体験したと言わんばかりに千斗に言い聞かせた。
千斗「誰にでもあんな感じなのか・・・。」
友達いなんじゃ無かろうか、とまでは言わなかったが、そんなニュアンスも含まれた言葉を独りごちる千斗。
その表情は困惑気味ではあるが、先程までの悲壮感は既に無かった。
魔理沙「まぁまぁ、それより千斗。」
千斗「ん、なんだ霧雨？」
魔理沙「能力の事は、どうだったんだ？」
彼女のその言葉に、千斗は嬉々としながら、事の顛末を話すのだった。

？「また会えたね・・・千君・・・。」

食う寝る所に住むところは大事

――博麗神社・境内

霧雨に事のいきさつを説明した俺は、いったいどうやって能力を発揮すれば良いのか見当も付かないので、そのことを霧雨に相談したのだった。

千斗「なぁ、どうすれば良いと思う？」

魔理沙「まずがんだむ、ってなんなのぜ・・・。」

・・・そうだよなぁ。

その対象を知らないのにどうしろって話だよなぁ。俺はなんとなく予想はしていながらも霧雨に問い掛けたが、その返答は残念ながら予想通りのものだった。

ていうか冷静に思い返すと『ガンダムになれる程度の能力』ってなんだよ・・・。いや確かに凄いけどさ、『乗る』じゃなくて『なる』なのかよ！

ますます訳分かんねーよ！

それに、何で特にガンダムと関係なさそうな異世界でこんな特異的な能力なんだろうか・・・？

八雲さんは能力云々で世界を行き来、って言ってた気がするが、ガンダムになるとそんなことが出来るようになるんですかね・・・？

千斗「いや、何ガンダムになればそんなこと出来るんだよ・・・。」

思わず独り言を言うくらいには行き詰まってしまった。てなわけで、今は一縷の望みを掛け、霊夢を探して神社の中をうろついていた。

霧雨は所用があるようで、流石にこんな無理難題を一緒に解決しようなんて言えるわけも無く。

先程母屋を出たところで別れて、今は一人。

霧雨が居なくなった事による精神ダメージは大きいが、そうも言ってられない。思い返せば幻想郷（こっちに）に来てから年下の女の子に頼ってばかりだった。これからの事は、自分で何とかしないとな！

しかしこうして歩いてみると、意外と広いんだなこの神社。本堂と母屋自体はそれほ

ど大きくも無いんだが、謎の祠らしきものだったり、倉庫っぽそうな小屋だったり、敷地面積は結構あるぞここ。

それでも10分もあればある程度は端の端まで見て回れた。残念ながら霊夢は見つからなかったが。神社の中にはもういないのかね？

そう思った俺は、母屋の縁側に腰を下ろす。しばらく歩き続けていたので、ちょっと休憩だ。外は相変わらずの青天で、頬に微かに感じる風は、現代の様に湿り気があるわけでもなく、心なしか空気も上手いような気がする。

千斗「そりゃこれだけ自然に囲まれてればなぁ。」

何だか腑抜けた独り言が漏れてしまったが、多分誰も聞いてないので良しとしよう。この縁側から見える溢れんばかりの緑が、無意識に張っていた心を解していたらしい。

鳥居の前まで行けば分かるが、神社がものすごく高台にあることもあって、石段の頂上からある程度幻想郷が一望できる。

といってもパッと見て木々しか見えないんですけどね。自然豊かにも限度ってもんがある。霊夢や霧雨以外のこの世界の住人は、いったい何処に住んでいるのだろうか？

千斗「そういや、人間だけじゃないんだっけか・・・。」

幻想郷（ここは）いろんな種族が存在してると霧雨が言っていた。何も現代の様に、人間の集落が必要な訳では無いのかもしれない。この神社も意味不明なほど高所にあるし。上か

ら見ると木々しか見えなかったが、地下に生活圏があるとかね。色々と考えられる。

千斗「・・・・・・・・・・・・。」

しかしこうして一息ついてみると、今まで自分がやっていた行為の異常性に、今更ながら気が付く。疚しい気持ちは無いとは言え、人の家を勝手にうろちょろするのは、当然ながら良くない事である。何で何も思わんかったんだろうか俺・・・。

・・・なんだか幻想郷に来てからというもの、すっかり一般常識というか、思慮というのが著しく欠如している気がしてならない。元々かも分からんが。

千斗「・・・そういや俺、これから住むとことかどうするんだろ。」

そこでふと、なんとなしに思った事だが、もしかしなくてもこれは一大事ではなかろうか。

そう、俺はこれからの自分の生活拠点がない事にやっと気付いた。

昨日は流れで、というか霧雨のご厚意で一泊させてもらったが。流石に霧雨の家に居座り続けるのは気が引けるし、霧雨も迷惑だろうしなぁ。

千斗「え、ホントにどうしよう。」

能力の問題の前に、生活の問題が来てしまった。

しかもこちらは早急である。ある意味で俺は今ホームレスなのである。ホームレス高校生、まさか自分がそうなるとは・・・。

いや、ふざけてる場合ではない。一刻も早く何とかしないと、冗談抜きで野垂れ死ぬ。異世界での死因が餓死って、末代までの恥ぞ。しかし、いったいどうすればいいんだ・・・。

千斗「うーむ。」

?「・・・・・・・・・。」

俺が一人唸っていると、何処からか視線を感じたような気がした。

不振に思って座ったまま辺りを見回すと、いつの間にか霊夢が俺のすぐ後ろに立っている。え、い、いつの間に!?

千斗「れ、霊夢!?」

俺は思わず驚きの声をあげたが、霊夢はそれに特に反応せず、そのまま相変わらずの無表情で、黙って俺を見下ろしていた。

・・・おかしいな、美少女に見つめられているのに、冷や汗が止まらない。めっちゃ独り言言いまくってたと思うが、全部聞かれてたんだろうか?

千斗「ど、どうかしたのか?」

どうかしてるのは俺の方なのだが。元々能力云々で霊夢を探していた事なんてもうとっくに頭から抜け落ちていた。俺がどうしていいか分からず、まごついていると、痺れを切らしたのか、霊夢が口を開いた。

霊夢「あんた、これからの事は？」
これからの事は。
言外に俺の生活環境について聞いているのだろうか。さっきは俺の相手をするのを気だるそうに拒んでたので、まさか今さら能力についてアドバイスってことも無いだろう。
と言うことは、やっぱり。
千斗「それが、皆目見当も付かなくて、途方に暮れてたところでさ・・・。」
霊夢「知ってる。」
え、知ってるって何よ!?
やっぱりさっきの独り言聞いてたでしょ!?
霊夢「聞こえたのよ。」
うわぁ・・・最悪だ。元々霊夢からの評価は低評価なのに、それに更に拍車を掛けてしまった。
と、とにかく話題を変えよう！
千斗「じゃ、じゃあさ霊夢。この辺で住み込みで働けるとこって知らないか？俺生活に困っててさ。」
いや生活に困ってるって何だよ。（自戒）

あまりにも強引な話題転換だし、そもそも年下の女の子に相談するような事では断じて無いが、この時の俺は相当参ってたらしい。年上のプライドなど地平線のはるか彼方へ吹っ飛んでいた。

それに聞いてはみたものの、こんなことを言われても霊夢は返答に窮するだけだろう。霊夢だってまだ１４、５の女の子だし。発される威圧感だけはとてもじゃないが、年齢相応とは言えないが・・・。

霊夢「知ってるわよ。」

千斗「ええ!?」

しかし霊夢から帰ってきた答えは予想外すぎるものだった。先程までの気まずさは何処へやら、俺は霊夢に捲し立てる。

千斗「そんな所があるのか霊夢!?」

霊夢「ええ、あるわ。」

千斗「いったいそこは何処なんだ!?」

すると霊夢は表情を一切変えずに、下へ人差し指を向けて

霊夢「此処よ」

と無機質な声色で言った。

霊夢が指差したのは地面。なるほどね。つまり霊夢は諦めて俺に野宿しろと言いた

いらしい・・・。
悲しいなぁ・・・。
霊夢「何を勘違いしてるのか知らないけど、博麗神社なら住むのはダメだけど、あんたが外の世界に帰るまで泊まるくらいなら別に構わないわよ。」

……え、マジすか？
正直その可能性も心の何処かではあるかもって思ってたんすけど・・・。
霊夢「住む部屋はあんたが寝ていた部屋を使いなさい。それと、あんた料理とか出来るの？」
……一応、まぁ普通には。
霊夢「そう、それなら良いわ。泊まるからにはタダ泊まりなんてさせないわよ。働いてもらうわ」
あ、はい。もちろんでございます。
でも本当にいいんですか霊夢さん。
霊夢「あら、なら他に行く宛があるのかしら？」
いや何もないんですけど。博麗神社に泊めてくれるのはすごくありがたいんですが、本当の本当にいいんですか霊夢さん。

霊夢「別にあんたが仕事サボらないで、私に変なことしなければ良いわよ。」
今『そんなことしたら○すけど』って聞こえたんですけど幻聴ですよね？だって口動いてませんでしたもんね？
しかしこの自分の家に男を泊めさせる度量というか、大の男に対しても堂々とした態度といい、この子実は年上だったりするのか？
霊夢「失礼ね。私はまだ１５よ。」
俺の２コ下・・・。
マジかよ、男気ありすぎだろ。
これもうどっちが男かわかんねぇなぁ・・・。
ーーいや、てかそれよりも！

千斗「さっきから俺、一言も喋ってないのに、何で会話が成立してるんだ!?」

霊夢「勘よ。」

ーー勘とは？（哲学）
こいつマジもんのニュータイプなのでは？
え、俺の能力ってそういうことなの？
ここはガンダムの世界線だったりするの？
霊夢「で、あんたはどうしたいのよ？」
脳の処理能力が全く追い付いていないが、色々と道徳的な問題だったりは、とりあえず棚にあげておくとしよう。
千斗「そりゃ、泊めさせてもらえるならホントに助かるけど、霊夢はその、平気なのか？一応俺も男なんだが。」
霊夢「そうね。あんたが何もしなきゃ大丈夫よ。したらしたで幻想郷の土に還ってもらうだけだし。」
アッヤッパリソウイウコトナンデスネ、ハイ、ワカリマシタ。ソンナコトハチカッテシマセン。
霊夢「そ。他に聞きたいことは？」
泊めてくれるだけで、願ったり叶ったりだし、此方から要求することなんて特には・・・。

あ、そう言えば
千斗「その、仕事ってのは具体的には何をすれば良いんだ？」
霊夢「さあね。」
さあねって・・・えーと犯罪に手を染めるのダメ、絶対！
霊夢「追い出されたいの？」
千斗「ごめんなさい。」ドゲザー
すいません。マジふざけたこといってホントにすいません。もうふざけません。これからは真面目に生きていきます。
・・・あれ、なんか刑務所から服役する囚人みたいな言い分だな。
俺はいつの間にか罪を犯していた？（錯乱）
霊夢「はぁ・・・。」
やばい、調子に乗りすぎた。
霊夢が呆れて何処かへ行こうとしている。ちょ、ちょっと待って！
霊夢「何よ。」
俺は声には出してない筈だが、霊夢は振り返ってくれた。なんとも不思議な光景である。
千斗「ほ、本当の本当に、いいんだな？」

我ながらくどいようだが、自分的にもあんなに可愛い子と一つ屋根の下とか、ちょっと覚悟が必要かもしれない。霊夢は女の子なんだから尚更の筈だ。

霊夢「だから、良いって言ってるでしょ。何度も言わせないで。あんたは神社(うち)にお賽銭してくれたし、悪い奴じゃ無さそうだから、別に良いのよ。」

そう言って霊夢は、目を細め、やれやれと言いながら肩を竦めた。口や態度ではこうしてめんどくさそうにしているが、まだ付き合いが浅いながらも、彼女は嫌な事は嫌とハッキリ言うタイプなのは分かっていた。つまるところ、霊夢は純粋に俺を心配してくれているのだろう。

・・・・・・正直キュンと来たね。

散々怖いとか恐ろしいとかいってゴメン。

霊夢、ありがとう。

この借りはいずれ必ず！

霊夢「別に期待してないわよ。」

・・・・まだ何も言ってないのに。

――???

紫「霊夢？」
霊夢「何。」
紫「彼、のことだけど。」
霊夢「あいつがどうかした。」
紫「彼、ここに来たばかりで心細い筈だから、あなたが気遣ってあげて？」
霊夢「はぁ？何で私が。」
紫「お願い、幻想郷のためなのよ。」

霊夢「あんたが引き取ればいいじゃない？」
紫「・・・・・・・・・。」
霊夢「・・・あーもう。わかった。分かったから、そんな顔すんな！」
紫「ありがとう、霊夢・・・。貴女のそういうところ、私は好きよ。」
霊夢「はいはい、貸し一つだかんね。」
紫「ええ、分かっているわ♪」

ーー博麗神社・母屋

霊夢に泊めさせて頂くこととなった最初の晩。
当たり前の様に特に何も起きず、今は次の日の朝である。
布団から出て、見慣れない景観が目に入り、あぁここは自分の家じゃないんだなと、改めて実感する。
霧雨の家だと、寝て起きても知らない天井で、あぁ今のこの状況は夢じゃないんだな、何て思ったりもしたが。それとはまた別で、何と言うか、寂しさのようなものが込み上げて来る。これがホームシックか・・・。
霊夢「いつまで寝てんのよ。もうご飯出来てるわよ。」
俺がオセンチになっていると、霊夢が勢いよく部屋の戸を開けて俺に言った。声量はやや大きいものの、相も変わらず無表情である。もう慣れたが、霊夢は感情の起伏が小さい子なのだろう。しかし昨日の一件で霊夢に対する好感度は爆上がりなので、そんな些細な事は気にならないし、何ならクールでカッコいいまである。
千斗「悪い、すぐいくよ。」
俺はとりあえずそう返事して、布団を畳み、厠に行き、洗面台に行き（何故か俺用の

歯ブラシが用意されていた）歯を磨き、霊夢に声を掛けられてから5分ほどで居間に到着した。

霊夢「先に食べてるわよ。」

霊夢はそう言いながら俺の方を一瞥すると、また食事に戻った。絵になる女だなぁ・・・。

こういう所はとても15歳とは思えん。

俺が霊夢に感心していると、いつの間にかじっと見つめていたようで。

霊夢「何。」

霊夢は箸を止め、俺の方を向いて少し怪訝そうにそう言った。君に見とれてたのさ、何て言ったら俺は埋められるかもしれない。この子に冗談を振ると命も振ることになるかもしれないので、ここは波風立たないように素直に謝っておく。

千斗「いや悪い、何でもねーよ。」

霊夢「そ。」

じゃあジロジロ見ないでくれないかしらとか言われるもんだと思ってたが、以外にも霊夢はすんなり引き下がった。まぁその方が俺としても助かるが。

霊夢「そういえば、魔理沙があんたのこと心配してたわよ。」

霊夢にそう言われて、俺はもう一人の天使のことを思いだす。

霧雨魔理沙。最初に幻想郷で会った人物であり、俺の恩人と言っても過言ではないだろう。思えば霧雨にも大変世話になったし、この上気遣ってくれるなんて恐れ多いくらいだ。寧ろ俺が彼女の為に何かしてあげたいね。

千斗「霧雨は、なんて？」

霊夢「あいつ泊まるとことか無いだろうから、また私の家に来てもいいぜ、だって。」

・・・犯罪的だぁ！天使すぎる！

異世界に一人という不安と、これからの見通しが持てない俺に一握りの優しさ・・・。

染み込んで来やがる、心に・・・！

千斗「なんてええ子なんや・・・涙止まらん。」

霊夢「全然泣いてないじゃない。」

例えだよ、た・と・え！

・・・ったく、霊夢はそれだから

霊夢「何か言った？」
口には出してないですねぇ。
霊夢「そう。」
もうなんかこのテレパシー？会話に違和感を感じなくなってきた。でも何も知らない人からみると霊夢がヤバイ奴に見えるかもしれないから、気を付けないといけない。
千斗「ところで霊夢さんや。」
霊夢「ん。」
霊夢は顔と目線は食器から動かさず、声だけで返事をした。
千斗「俺これから、どうすればええんかな？」
霊夢「知らないわよ。」
予想通りの返事だった。期待してはいなかったが。
千斗「何かないの？面白いの。」
霊夢「じゃあ人里にでも行ってみたら。暇潰しにはなるでしょ。」
人里？ここから近いのか？
霊夢「飛んできゃ大した距離じゃないけど、歩いていくと3時間はかかるわね。」
三時間!?行ってみたらってレベルじゃねぇぞ！
霊夢「それに、道中に人食い妖怪とかいるから、行くなら気を付けて。」

・・・それでも行くって言う奴がいたら会ってみたいね。疲れるだけでなく命の危険と隣り合わせとか、そんなギリギリな散歩はしたくないです。

霊夢「じゃあ能力の特訓でもしてれば？」

あっ、忘れてた。

『あらゆるガンダムになれる程度の能力』だっけ。

とりあえず当面生活の問題は何とかなりそうだし、いよいよ特訓パートと洒落込みますかぁ！

・・・そういえばどうやって能力を発動するか検討もついてないんだった。

霊夢「・・・ごちそうさま。」

俺が一人で勝手に落ち込んでいる内に、霊夢はいつの間にか朝食を食べ終えていた。

因みにメニューは白米、味噌汁、お新香、イワシの干物2ヶだった。質素だが、味はとてもよく、特に味噌汁が美味しい。霊夢が料理上手な事が伺える朝食だった。

あっ、食器とかは自分が洗っときます。

霊夢「ん。」

食べ終えた食器を台所に持っていく途中の霊夢は、振り返らず声だけで了解の合図をした。

実は少しだけこの『ん。』が可愛いと思ってる。少しだけだが。なので個人的にはこの

返事で満足である。
千斗（旨いなぁ）モグモグ
それはそうと、霊夢が作ってくれた朝食なので、ゆっくり味わって食べていたが、いかんせん量が少ないので、あっという間に食べ終わってしまった。
千斗「ごちそうさまでした。」
ご飯茶碗を置き、辺りを見渡すも霊夢の姿は既に無く、何処かへ行ったようだった。恐らく神社の中にはいないのだろう。何となくそんな気がする。
千斗「さて、んじゃま、行くかね。」
能力特訓に霊夢の協力は得られないだろうが、これから来る波乱万丈な未来を予感して、俺は意気揚々と母屋の外へ繰り出すのだった。

やべっ、食器洗っとかなきゃ。

能力発動、気絶！

ーー博麗神社・境内

さて、食器洗いは終わり、今は母屋の外。鳥居から本堂までの広大なスペースに一人ポツンと立っている。

今日も天気は晴れ。かといって暑い訳でもなく、相変わらず心地よい風が、無造作に伸びた髪を揺らす。昨日より風は強いかな。まぁ気持ちいいレベルの範疇だが。

千斗「んー、どうしたもんかね。」

いよいよ満を辞して能力発動、と行きたいのはヤマヤマだが現実はそうもいかない。既に色々と無我夢中で試して見たものの、結果は芳しくなかった。

それもそのはず、発動条件も発動方法も分からない能力を使おうとしているのだ。

突然脈絡も無く『X＋yを求めよ』って言われてるようなもんだぞ。どっちか片方でも分かんねーとどうしようもねーじゃんか。

なので、仕方なしにとりあえずそれっぽいことを色々やってみているのだ。あくまでも主観によるそれっぽいことなので、ぶっちゃけ他人に見られたら恥ずかしいようなことばかりだった。

例えば、スーパー〇イヤ人になるときのポーズで大声出してみたり、特に意味もなく何もないところを殴ったり蹴ったりしてみたり、座禅して瞑想してみたり、無意味に踊ってみたり、歌を歌い出してみたり、その場でＲＰＧのラスボスみたいな高笑いしてみたり・・・。

あれ、半分くらい全く能力発動に関係なさそうな事してね？

振り替えると恥ずかしいなんてレベルを遥かに超越しているが誰も見てないからセーフなのだ。そう、誰も見てないからな。

千斗「誰もいないよな・・・。」

一応、一行動前に辺りを確認したりはしているのだが、いかんせん木、木、本堂である。人の気配なんかまるでない。思えばここは神社だから、参拝客なんかが来そうなものであるが、今のところ誰一人として神社に訪れた人はいない。

博麗神社立地最悪だし、来るのも一苦労だろうが、外観はそこそこ立派で、そこにい

る巫女さんも美人とくれば、それ目当ての人も幾ばくかいそうではあるが。
千斗「あれ、そういえば霊夢が人里への道がどうとか言ってたな。」
そこで俺は、今朝の霊夢との会話を思い出した。
霊夢『片道で三時間、道中に人食い妖怪がいる』
千斗「って言ってたっけ。」
今朝の事なのに、どうにも忘れっぽいが、確かにそう言っていた気がする。そりゃ命懸けてまで参拝しようとは思わんよな。でもそうするとこの神社の存在意義は一体・・・。
いや、神様が住んでいるのであって、人間は肖っているだけだから、別に本質的には参拝客は必要無いんだろうけど、こう、生活するって意味で・・・。
千斗「いや、やめよう。何か怖くなってきた・・・。」
何事にも触れてはいけないとこってのはある。
それこそ、俺は現在進行形でこの神社にお世話になってる訳だし。何となく本能的に、これ以上の思考はよした方が良いと判断した俺は、また無理難題に頭を悩ませる。
千斗「うーむ、うーむ、うーむ・・・。」
？「お困りのようね？」
一人唸っていると、急に何処からか声が聞こえたと思った次の瞬間、目の前に謎の異

物が現れる。
千斗「おおう!?」
んん？いやこれは見たことがあるぞ・・・。
千斗「八雲・・・さん？」
紫「正解♪」
突如として俺の前に現れた謎の異物、それはスキマ妖怪である八雲紫さんだった。
千斗「こ、こんにちは。昨日ぶりですね？」
紫「そうね。昨日ぶりねぇ。」
この妖怪は、見た目こそ黒い空間に無数の目、両端に赤いリボンという、如何にも『THE・妖怪』といった様な、恐ろしい見た目をしているのだが。
話してみると、柔らかい女性的な口調で、人間だったら所謂、いい人っぽそうというのが、俺のこの妖怪に対する評価である。しかし何処から声を発しているのかはちょっとだけ気になっていたりする。
千斗「八雲さん、霊夢に何か用ですか？」
俺は八雲さんから用件を聞くより先に、そう尋ねる。別に捻くれている訳でもなく、八雲さんとは付き合いもまだ浅く、自分を訪ねて来るようには思えないので、消去法である。多分その過程で神社の外にいた俺を見つけたんだろう。

しかしその霊夢は、朝食を食べると早々に何処かへ行ってしまったのである。別に霊夢が何しようと勝手なので特に行き先等気にしなかったが、次は確認した方が言いかもしれない。

俺はその事を八雲さんに伝えようとしたが

八雲「いいえ。今回は貴方に用があって来たの。」

と、予想外の一言で面食らってしまう。

千斗「え、俺に用ですか?えっとなんでしょう。」

こう言ってはなんだが、自分一人しかいない状態で、見た目恐ろしい妖怪に『あなたに用がある』何て言われたら、喰われるんじゃないか、と思ってしまうのも無理は無いと思う。大分失礼な想像をしている自覚はあるが。だって怖いものは怖いんだもん。

紫「あなたの、能力についてよ。」

どうやら自分の想像とは違ったようだ。心の中で八雲さんにごめんなさいと謝りつつ、思わぬ助け船が来たかも知れない、と停滞した状況の前進を仄かに期待する。

紫「うふふ、どうしていいか分からないのでしょう?」

千斗「いや本当にそうなんですよ。まったくもってサッパリで・・・。」

紫「霊夢はどうしたの?手伝って貰えなかったのかしら。」

千斗「いやあの、色々と世話になってるし、あんまり頼むのは気が引けるなーと・・・。」

嘘である。あわよくばバリバリ協力してもらおうと思っていた。結局ダメっぽそうと思って頼まなかったのだが。

紫「あらそうなの。ああ見えてあの子、以外と面倒見が良いとこあるのだけれど。」

あれ、そうなのか？

いやでも、以外とそうなのかもしれない。なんだかんだ言って、俺を神社に泊めてくれて、頼んでないのに俺の分も朝食を作ってくれて、歯ブラシなんかも用意してあった。思い返すと素っ気ない態度のせいで分かりにくいが、霊夢は思慮深い人物なのか、も・・・いやそんなことはないか？

千斗「あはは・・・。」

結局愛想笑いを浮かべるのがせいぜいだった。霊夢の事は分かった気がしているだけで、実の所、良く分からん。

でも、良い奴なのは間違いないかな。

紫「それで、千斗くん？」

千斗「はい。」

紫「何か、良い方法思い付いた？」

千斗「いえまったく。」

情けないが、見栄張っても仕方ない。全くの手詰まりなのだから。

紫「そう・・・。」
落胆しているのだろうか？八雲さんの声は少し残念そうに聞こえた。
千斗「えと、何か不味かったですかね？」
うーん言い方。何か言い方がうーん。
紫「あ、ううん。何でも無いのよ。」
千斗「はぁ。」
恐らく何かあるようだが、追求しようとは思わなかった。何故だか他人が触れて良い部分ではないと、直感的にそう感じた。
紫「・・・それじゃあ、私からアドバイスね。」
千斗「え・・・？」

何か、変わった。
まただ。
この感覚は、覚えがある。
何か、何かが、変わっている。
それは、いったい何だ・・・？

紫「機体を、イメージして。パイロットを、イメージして。最後に、自分をイメージしてみるのね。」
千斗「あ、えっと・・・。」
機体、パイロット？
なぜこの妖怪がそれを？
紫「では、御機嫌よう。」
八雲さんがそう言ったと認識したときには、既に眼前にその姿は無かった。変な感覚だ。頭が浮きそうな。何だ、八雲さんはいったい何をしたんだ・・・？
千斗「・・・ッと！大丈夫か、落ち着け俺。」パンパン
何だかもう良く分からないので、いったん言われた通りにしてみるか。上手く考えが纏まらない。思考が、普通じゃない。
千斗「えっと、機体をイメージ・・・。」
特に理由は無いと思うが、俺が思い浮かべたのは・・・。
千斗「んで、パイロットを、イメージ・・・。」
ん、んん？おおうえぇ!?
千斗「・・・・・・・・・」
こ、この、両腕は・・・!?!?!?胴体も、足も・・・。

千斗「きゅーいちに、なっ・・・て・・・うっ。」

ーー俺の記憶はそこで途切れた。

ー
???

・・・ぅん？
？「あ、起きた！」
・・・霊夢、か？
霊夢「良かった！目が覚めないかと思って心配したんだがら！」
あれ・・・俺は確かガンダムに、なって・・・。
霊夢「そうよ。それで、外で倒れてて・・・！
もう目覚めないかと思って、心配したんだから！」
え？霊夢、なんか顔赤くね……？
目元も潤んでる様な・・・。
霊夢「き、気のせいよ！ちょっとこの部屋が暑いだけよ！」／／／／
暑いか？むしろ涼しいんだが・・・。
霊夢「び、病人は黙って寝てなさい！風邪を引くわよ!?」

いや、風邪引いてんのお前何じゃ・・・。
霊夢「わ、私の事を心配してくれるのは・・・その、嬉しいけど、アンタの方が危ないんだから！安静にしてなさい・・・！」
あ、あぁ。おう、ありがとう霊夢。
霊夢が「べ、別にお礼なんて良いわよ・・・。それに・・・千斗の寝顔も見れたし・・・。」
ゴニョゴニョ
ん？最後の方聞き取れ無かったんだが、
何て言ったんだ？
霊夢「何でもないわよ！バカ！」
ご、ごめん・・・。
でも・・・霊夢がなんかいつもより可愛く見える。
霊夢「……かっ、可愛いっ!?な、何言ってんのよ!?アンタ！」カアア／／／
・・・あ、心読めるんだった。
でもそれで、余計可愛く見えるな。
霊夢「せ、千斗！やめて！恥ずかしいからぁ……！」／／／／
・・・うん。

千斗（これ絶対夢だよなぁ・・・。）

ーー博麗神社・母屋

千斗「・・・見たことある天井だ。」
次に目に入ってきたのは、既視感のある天井だった。
体を起こそうとするが、頭がまだ痛む。体を上手く動かせないようだ。何か俺、すっごい疲れてないか・・・？
？「あら、起きたの？」
声がする方へ顔を向けると、霊夢がこちらを見ていた。
その表情はいつもの無表情で、さっきまでの霊夢はやはり夢だったらしい。ちょっと残念な気持ちと、妙な安心感が一緒に込み上げて来て、なんだか変な感じだ。
千斗「・・・ここ、俺の部屋で合ってるか？」
霊夢「そうね。」
どうやら母屋の自分に割り当てられた部屋にいるようだ。いつの間にやら布団に寝

かされてたらしい。
それにしても何でこんな疲労感があるのか。徹夜で物凄い運動したって、こんなダルくて疲れたりはしないと思うが。
千斗「なあ、俺、どうしてた？」
霊夢「地面で寝てた。」
千斗「・・・・・・・・・・。」
・・・やっぱりこれが霊夢だよなぁ。
地面で寝てたって、その通りかもしれないが、俺が好き好んで地面で快眠してたとでも思ってんのか。
霊夢「じゃあ地面に倒れてた。」
じゃあって何だよ、じゃあって。
・・・まぁいいや。
千斗「そんじゃ、お前が倒れてる俺を布団まで連れてきてくれたのか・・・？」
霊夢「そうね。」
・・・素っ気な。
でも、ありがとな。
霊夢「ん。」

千斗「そういえば・・・八雲さんは。」
霊夢「その紫から伝言。」
ーーえ、何だ・・・？
霊夢「気絶させてしまってごめんなさい。しばらく安静にしてね、以上。」
気絶させてしまって、か。
やっぱり八雲さんの仕業か。
でも不思議と悪い気はしない。何でだろう。もちろん気分は凄い悪いが。
あれ、でも・・・。

ーーここで、俺の意識はまたも途切れた。

??????????????

ーー博麗神社・母屋

千斗「ん・・・。」

本日三度目の起床。意識失いすぎだろ俺、とツッコミたくなるが、自分ではどうしようも無いので仕方がない。気絶したくて気絶してるわけでは無いんだからな。

千斗「・・・体は、よし動く。」

二度目と違って目覚めは良い。頭痛もない。ダルさもないので、布団から体を起こして・・・

千斗「うん、大丈夫そうだ。」

全身が思うように動かせる事を確認してから、辺りを見回す。どうやら近くに霊夢は

いないようだ。次に外を見ると、空はすっかり真っ暗だった。特訓していたのは午前中だったので、俺は半日も眠っていたことになる。

千斗（マジであの妖怪俺に何したんだよ・・・）

昨日だって割とグッスリ眠れたのに、俺はその次の日も、それ以上に眠れる様な奴ではない。八雲さんが何かを俺にして、それでこんなに疲れて眠っていたと考えるのが自然だろう。

千斗（しかし、ガンダムになってたよな、俺・・・）

特訓の時に八雲さんが言っていた言葉が甦ってくる。

紫『機体をイメージ、パイロットをイメージ、最後に自分をイメージ。』

確かにあの妖怪はこう言ってた。その通りにしたら、いつの間にか体がガンダムになっていたんだよな。展開が急すぎて、理解が追い付かなかったが、つまるところ八雲さんは、ガンダムになる能力の発動方法を教えてくれた・・・？

千斗（どうして教えてくれたんだ？それに何で発動方法がわかった？そもそも、どうして『ガンダム』の存在を・・・）

考えても答えがでないのは分かっているが、思考はしばらくやめられなかった。結局八雲さんへの謎は深まるばかりである。

千斗（とりあえず今度会ったとき聞くとしよう・・・）

俺はそう自分を納得させて、布団から出ることにした。まずは霊夢を探すか。流石にこの時間だし、何処かに行ってるってことはないと思うが・・・。

霊夢「・・・・・・・・・・。」ズズ

そう考えながら居間に行くと、霊夢は俺に背中を向けて、ちゃぶ台でお茶を啜っていた。うーんやっぱり絵になるなぁ。

霊夢の事だから、俺が後ろに立っているのは分かってると思うが、彼女からは何も言ってこない。

千斗「霊夢。」

仕方なしに俺が声を掛けると、霊夢は体の向きは変えずに、首を少しだけ左にむけた。ちょうど霊夢の左目だけが微かに見えるような格好だ。

霊夢「あら、起きたの。」

何だかさっきも似たような事を言われた気がするが、若干言葉のニュアンスが違うか？

いやでも霊夢だし大差無いか・・・。

霊夢「あんた、体はもう平気なの？」

おぉ、霊夢が俺の心配をしてくれている。

元々心配してなかったらそもそも布団に寝かせてくれたりして無いと思うので、頭で

は分かっていたが、やはり言葉で伝えられるとまた違った嬉しさがある。
千斗「おう、おかげさんで、もうこの通り。」
俺はその言葉に感謝を伝える意味も込めて、多少大げさに腕を振ったり、その場で軽く跳ねたりしてみた。
霊夢「そ。」
残念ながら霊夢のそれに対するリアクションは無かったが。まぁ感謝は伝えられたと思うので良しとしよう。
千斗「・・・・ググー・・・あっ。」
と、途端に腹の虫が鳴った。勿論俺のである。
そういえば昼御飯は食べてないし、夕食もまだだ。
霊夢に腹の虫を聞かれた羞恥心よりも、空腹感が勝る程度には空腹だった。
しかし外の様子を見ると、残念ながら霊夢は既に夕食を食べ終えている可能性が大きい。それでも俺は一縷の望みを懸け、じっと霊夢の事を見つめる。
霊夢「・・・・・・・・・。」テクテク
その霊夢は、特に何も言わず立ち上がると、そのまま別の部屋に行ってしまった。何も言わないところを見ると、恐らくもう夕食は食べ終えているのだろう。
霊夢が立ち上がったとき、ちょっとだけ『ご飯作ってくれるのかな～』なんて期待し

たりもしたが、いくらなんでも図々しいという自覚はあった。仕方ない、自分で何とかするか。

千斗「おーい、霊夢・・・。」

俺はそう思い、霊夢に食材を使用する許可を貰うため、霊夢が行った方向へ向かおうとした。

霊夢「ん。」

千斗「ヘッ!?」

するといつの間に入れ替わったのか、おぼんを持った霊夢がちゃぶ台の前に立っていて、俺は二重の意味で驚いた。

千斗「おまっ、いつの間に・・・?」

霊夢「感謝して食べなさいよ。」

霊夢は俺が驚いているのを意に介さず、それをちゃぶ台に置くと、俺の言葉は無視して、また元いた部屋へ引っ込んでしまった。そして居間には俺と、霊夢が作ったらしい夕食だけが残った。

千斗（・・・あいつイケメン過ぎんか?）

俺が女だったら惚れてるまであるぞ。奴は女だが。行動があまりにもカッコ良すぎる。狙ってやってる・・・訳じゃないよなぁ、霊夢だもの。

霊夢のイケメンっぷりに、しばらく感嘆していた俺だったが、鼻に掛かるクリーミーな香りで、我に返る。霊夢が持ってきたおぼんをを見ると、シチュー、サラダにサンドイッチと、朝とは反対に洋風なメニューがラップにかけられ置かれていた。

千斗（おぉ・・・ありがとう霊夢。）

俺は霊夢に感謝しながら、それらをゆっくりと味わって食べた。どれも絶品で、空腹な事もあって、頬っぺたが落ちるほど美味しかった。

シチューのちょうど良い塩加減、サンドイッチの素材の深みがある味わい、サラダの新鮮な野菜のシャキシャキとした食感と、一昨日に食べた霧雨の料理と、同クオリティーか、それ以上の出来だった。

千斗「あぁ～幸せだぁ・・・。」

思わずこんな声が漏れてしまうほどの満足感である。ホントに最高だった。マジでありがとう霊夢！

俺はその感謝をもう一度伝えようとしたが、そう考えて、やめた。

千斗（これは・・・多分もう寝ちゃったな）

何だか幻想郷に来てからというもの、やけに勘が冴えてるような気がするのだが、気のせいだろうか。

・・・まぁいずれにせよ、寝る邪魔をするのは戯けない。

千斗（明日改めて言えば良いか。）

そう思った俺は、特にすることも無く、夜も遅いので、歯を磨いてから布団に入った。昼間さんざん寝ていた筈だが、料理で得られた心地よい満腹感のお陰か、寝付くまでにそれほど時間はかからなかった。

動き出した物語

ーー博麗神社・母屋

霊夢「あんたの仕事が決まったわ。」
千斗「ふぁい？」

――霊夢(この女)はいつも突然すぎる

目が覚めてまだ間も無く、寝ぼけ眼の俺に、眼前の霊夢はそう言った。突然すぎて反射的に聞き返してしまったが、居候させて貰っている以上、仕事は出来ることなら何でもするつもりではあった。
ーーそう、出来ることなら。

千斗「・・・えーと、ホントに俺も戦うんですか？」

霊夢「そうよ。悠長にはしてられ無いけど、時間の許す限り、あんたを鍛えるわ。」

今朝、開口一番に霊夢に『仕事が決まった』、と言われた。まあそれはいい。こっちは寝起きで、とても話を理解できる状態では無かったが、相手は霊夢だ。そこに文句言った所で、無駄なのは分かってい

・　・　・　・　・

る――

霊夢「・・・って訳だから・・・あんた人の話ちゃんと聞いてんの？」
千斗「それはお前だ！」
さっきから『ちょっと待て』とか『もう一回言ってくれ』とか俺が言ってんの、全部無視してたじゃねーか！
霊夢「・・・とりあえずあんたは、このあと外で」
千斗「ナチュラルに無視を継続するな！」

ーー分かってはいるが、流石にこれは酷いと思う。
結局その後も、霊夢の話はトントン拍子（俺が言ってる事は無視）で進み、今は神社のだだっ広い参道で、俺、霊夢、そして霧雨の三人で集まっている状態だ。
経緯を色々とすっ飛ばしているが、それは目の前の巫女に言ってくれ。一応当事者であるはずの俺だって、まだはっきりと飲み込めていない。
とりあえず理解出来た範囲でだが、霊夢が言っていたことは

・幻想郷に『異変』という危機が迫っているらしいこと
・霊夢はそれを解決しなきゃいけない立場にあるらしいこと
・『異変』とやらを解決するためには、騒動を起こした張本人を懲らしめる（物理）必要があること
・懲らしめるときには、幻想郷『独自のルール』を用いなければいけないこと
・『俺の仕事』が、この異変とやらを解決する手伝いをする事、になったこと
・その為に、その『独自のルール』を憶えるのと、ある程度戦えるよう実力を着けるために、特訓する必要があること
・霧雨はその手伝いをしてくれること

まとめるとだいたいこんなところか。

霊夢俺が質問だったり、可否の判断をするのは関係なく、ガンガン話を進めていったからな。実のところ、『異変』とやらに全然ピンと来てないが、霊夢が言うには、『異変』には首謀者がいるらしく、そいつを懲らしめれば万事オーケーらしい。なんだそりゃ。

勿論のこと、俺は訳も分からず『戦え』と言われて、喜ぶような戦闘狂ではない。小さな頃から物理的な『喧嘩』とは、縁の無い人生だったし、何か武道等をやってるわけでもない。精々『刃牙』を見たことがあるくらいか。向き不向きで言えば、圧倒的に後

者なのである。
　しかしだからといって、霊夢の言っていることを正面から突っぱねる事も、俺の望んだことではなかった。
　今日まで世話になった恩がある。それも勿論の事だが、それ以上に霊夢（年下の女の子）に一人で物騒な喧嘩に行かせる訳にはいかない、という思いがあったのも事実なのだ。
　・・・いやまあ霊夢だし心配要らなくね？
　と思ったことも否定はできないが。
　これでも一応人並みには正義感があるつもりである。それに従って、渋々ながらも霊夢の言う『特訓』を受ける事を承知したので、今神社の参道（ここ）にいるという訳だ。
　魔理沙「ま、一緒に頑張ろーぜ。千斗！」
　千斗「あぁ、霧雨さんもやる気満々ッスね・・・。」
　因みに霧雨は、特に義務があるわけでも無いだろうが、俺の特訓に付き合うためか、わざわざ朝早くから神社まで足を運んでくれたのだ。この子はホントに良い子過ぎると度々思う。どんな風に言いくるめられたのか知らないが、霊夢等（悪い奴等）に騙されないでいて欲しいものだ。
　霧雨は元々異変（このこと）は分かっていた様子で、特に違和感なく霊夢の話を聞いていた。早朝から神社に来ていた事を考えても、元々霊夢と話を付けていたと考えるのが自然であ

る。俺だけ置いてかれてるのが気になるが。
まあ無理もない。昨日は半日以上ダウンしてたわけだし、その間に霧雨にはもう話してあったんだろう。
俺はそう考えて、目の前の霊夢に問いかける。
千斗「そんで、まず何をするんだ、霊夢。」
霊夢「まずは『弾幕勝負』のルールを憶えてもらうわ。」
弾幕勝負ゥ？
言葉だけだと意味が良く分からない、というのが率直な所だ。俺の怪訝そうな表情を汲み取ってか、霊夢は続けて
霊夢「弾幕勝負ってのは、『殺傷能力を押さえた弾幕技を、スペルカードに封じて、それを用いて戦う勝負』よ。」
と言った。
千斗「・・・うん、すまん、さっぱり分からん。」
弾幕技？スペルカードに封じる？
そもそも弾幕とは何ぞや・・・。
霊夢「一から説明するわ。まず弾幕ってのは、これ。」
霊夢はそう言いながら右手を前に出すと、そこから青白い光の弾のようなものが出て

きた。

千斗「いやこれドラゴ○ボールで見たことある・・・。」

今の俺を鏡で見たら、さぞアホ面をしていることだろう。しかし目の前で、文字通りアホみたいな事が起きているのだ。正しい反応な筈である。

霊夢「そうなの。それなら話は早いわね。これを、このスペルカードに封じて・・・それを使って戦うのよ。」

そのまま、左手に持っていた長方形の白い紙と、右手の弾をくっつけた。すると青白い弾はその紙に溶けて消えていった。えぇ・・・。

ちょっと超常現象過ぎてツッコミが追い付かない。そういやここ異世界だった（n回目）。

・・・・霊夢が右手から出したのは、ひょっとして『気功砲』だろうか？

ほらあの、体から気を放出して手から放つアレ。

○空とかベジ○タとかが、戦ってる時に打ちまくってるアレである。

え、『それを使って戦う』ってなに？

青白い弾を人にぶつけて戦うの？

痛そう（小並感）。

千斗「ち、因みに霧雨さんは・・・弾幕、出せるんでしょうか・・・。」

霊夢が、さも当たり前のように気功砲らしきものを出した事で、一時的に思考が退化した俺だが、気を取り直して霧雨に恐る恐る聞いてみた。嫌な予感が的中しないことを祈るばかりである。

魔理沙「・・・？。出せるぜ？」

霧雨は不思議そうな顔をしながら、右手の人差し指を上に向けると、その先端がバチバチと音を立てながら光る。

千斗「なんかレールガンとか打ちそう（現実逃避）。」

魔理沙「レールガン？何だそれ？」

いやなんか・・・そ、なんか・・・。

この世界ぼのぼのじゃなくて、日常バトル系な世界じゃねーか！

霧雨の反応を見るに、恐らく俺の予感は当たっている。大方、弾幕とやらを出せるのは当たり前なんだろう。この世界の住人は。

千斗「て言うか霧雨、確か触媒がないと魔法は使えないとか何とか・・・。」

魔理沙「いや、これは弾幕だからな。触媒は魔力だぜ。」

俺からしたら、弾幕も十分『魔の法』なんですがそれは・・・。

霊夢「はぁ・・・。」

と、俺たちのやり取りを静観していた霊夢がため息を付く。何だか落胆している様子

だ。
霊夢「その様子だと、やっぱりあんたは弾幕を使えないみたいね。」
魔理沙「えっ？そうなのか、千斗？」
ちょっ、霧雨の純粋な一言が地味に傷つく。
悪気が無いのは分かるが。そりゃ皆さんには当たり前に出来ても、俺にはそんな超常現象起こせません！
千斗「結論から言うと、出来ない。使えるようにしたり出来ないのか？」
霊夢「・・・そうね。こう、霊力を手に集中させて・・・ボンって。」
無理そう（達観）。
千斗「霊力ってのは？」
霊夢「人間が体内に持つエネルギーみたいなもんね。」
魔理沙「人間なら霊力。魔法使いは魔力。妖怪なら妖力、だぜ！」
分かりやすい説明をどうもありがとう霧雨。
つまりは体内に蓄えられた見えない力ってとこか。
千斗「俺にもあるのか？その霊力ってのは。」
霊夢「そりゃあんたが人間ならね。」
・・・何かバカにされたような気がするが、ここはスルーしておこう。しかしという

ことは、それを上手く纏めて一気に放出すれば言いわけか。
千斗「どうやってやるんだ・・・。」
これってつまるところ、かめは〇波を打てって言われてるようなもんだよな？普通の人間に。
あれだって気を一点に集中させてそれを放出するわけだし。やってる事は一緒のはずだ。
そういえば子供の頃は良くやったなぁ・・・ドラゴン〇ールごっこ。
霊夢「あんたは練習しても弾幕打てないだろうから、別の方法を考えましょう。」
千斗「別の方法っても、いったいどうやって・・・。」
ーーこの時千斗、電流走る。
千斗「あぁ、そういうことか！」
霊夢「ん。」
魔理沙「？」
霧雨は不思議そうな顔をしているが、俺はあるとっておきの方法を思い付いた。霊夢はそれが分かっているのか、特に驚いている様子はない。まぁ霊夢だし。
俺の思っているものが、『弾幕』の代用になる保証はないが、とにかく試す価値はあるだろう。

千斗「・・・ふぅ。昨日の通りに・・・。」

ーーGF91・・・パイロットは・・・シーブック・アノー!!

千斗「・・・うお、お、おおう!?」

この感覚は・・・。

霊夢「・・・・・・。」

魔理沙「な、何だ!?」

俺の視界は一瞬光に包まれ、次第に、世界が鮮明になっていく。この感覚は。

千斗「右、左、よし!!」

右手を大きく回し、握りこぶしをを腰の近くにやり、肘を少し曲げる。左手も同じようにし、少しだけ胸を張る。

千斗「この感覚は、覚えがある!」

魔理沙「せ、千斗が変身したぁ~!?」

霊夢「うるさっ。」

ーー二度目の能力発動は、気絶しないで成功したようだった。

]
]
???

??????????????????

紫「霊夢。」
霊夢「紫？　どうしたのよ、やけに疲れてるわね。」
紫「それは良いの。それよりも・・・。」
霊夢「何よ。」
紫「『異変』よ。」
霊夢「・・・・・・・・・。」
紫「あなたにとっては初めての『異変』。そして、ある意味では、幻想郷の未来が掛かった異変よ。」
霊夢「・・・それって、まさかあいつを連れてけって？」
紫「分かってるじゃない。霊夢には彼の成長を、助けてあげて欲しいの。」
霊夢「・・・・・・・・・。」
紫「・・・・・・・・・・。」
霊夢「それは、紫がしたいことなの？」
紫「・・・・・・・そうね、わたくしの願いでもあるわ。」
霊夢「・・・・・・・・・。」
紫「・・・・・・・・・。」
霊夢「・・・はぁ。仕方ないわね、分かったわ。」

紫「霊夢。」

霊夢「・・・あんたが私に頼み事するなんて、思ってなかっただけ。面倒だけど、やるしかないもの。」

紫「・・・ありがとう、ございます。」ボソボソ

霊夢「・・・？　何か言った？」

紫「いいえ・・・。助かったわ霊夢。それじゃ、後のことお願いね。」

霊夢「はいはい。」

機体を動かしてみよう！

ーー博麗神社・参道

千斗「よっしゃ、発動成功！」

ーー俺の思い付いたとっておきの方法・・・それは。

千斗「これで！　・・・あ、あれ。これでえっと・・・。」

俺はつい先程、自身の特異能力、『あらゆるガンダムになれる程度の能力』を発動。結果として、今の俺は人間から姿を変え、『ガンダム』になっていた。ガンダムに『のる』ではなく『なる』事への抵抗は、まだ若干拭いきれないが、贅沢言える様な立場ではないだろう。

なにせ、俺のようなガンダムにわかでもあらゆるガンダムになれる能力に心踊るくら

いなのだ。所謂『ガノタ』と呼ばれる、ガンダムを愛して止まない人々からすれば、今の俺は羨望の的だろう。何か申し訳ねぇ・・・。

因みに俺が変身した『ガンダム』は、多数あるガンダムバリエーションの中でも、一際小柄な『ガンダムＦ９１』だった。何故Ｆ９１かと言うと、最近森口〇子の『君を見つめて』を聞きふけっていたからである。あの歌マジで良いよね！

話を戻すが、前回の様に能力発動するも気絶、みたいなことにはならず、体も普通に人間の時と同じように動かせるみたいだ。それは良かった。が、代わりに大問題が発生していた

千斗「なっ・・・!?　ぶ、武装が・・・無い!?」

そう、機体の何処を探しても、武装らしい武装が無いのだ。精々バルカンくらいのものだろうか。あっ、マシンキャノンもあった。

千斗（これで、いったいどうやって戦えばいいんだ!?）

弾幕として使えない事もないかもしれないが、あまりにも虚しすぎる。何が悲しくてガンダムでバルカンだけを使って戦わなければならないのか。もっと他に色々あるじゃない！

千斗「うわ、マジかよ。結構いい考えだと思ったのに・・・。」

ーーそう、俺のとっておきの方法とは、ガンダムには付きものである、『ビームライフル』、『ビームサーベル』等の各武装を、弾幕対決に応用してやる！　というものだった。

しかし肝心の武装が何一つ無い。これじゃ丸裸Ｆ９１である。

あれ、なんか言葉の響きが売れない芸人っぽいな・・・じゃなくて！

千斗「お、おいどうしよう霊夢!?」

霊夢「知らないわよ。」

悲しみのあまり、意味が無いと悟りつつも霊夢に尋ねる。しかし案の定一蹴されてしまった。仕方がないのでそのまま霧雨の方を見る。

魔理沙「せ、千斗・・・なのか？」

千斗「あぁ、この姿は・・・。」

霧雨は今の俺のガンダム(姿)に狼狽えているようだ。ぶっちゃけ知らない人から見たら、突然人間がロボットに変身した訳だし、狼狽えるのも無理はない。

・・・しかしなんと説明すればいいものか。

千斗「まぁその、何だ、あのー、変身して戦う姿なんだよ。」

魔理沙「・・・お、おう。」
そりゃこんな説明じゃ（。д。）ポカーンよな・・・。
でもなんて言えば良いか分かんないの！　とりあえず霧雨には無理矢理納得してもらうとして。
千斗「ライフルもサーベルもランチャーも、ヴェスバーまで無くなっとる・・・！」
俺は機体（からだ）の至るところをくまなく探すが、存在していると記憶している武装は全て、あるはずの場所に無いのである。
おいおいホントかよ!?
『あらゆるガンダムになれる程度の能力』
注：だだし戦えるとは言ってない、ってか!?
何？『程度の』ってそういう意味だったの？
嘘だぁぁぁ!?
千斗「ど”う”ぢ”て”た”よ”お”ぉ”ぉ”!”?”」
俺はあまりの理不尽さに、地の底から響くよ”うな声を出しながらその場で天を仰ぐと、膝を付き、四つん這いで頭を項垂れる。こ、これは立ち直るまで大分時間掛かるかもしんない・・・。
魔理沙「せ、千斗・・・大丈夫？」

俺の様子を見かねた霧雨が、心配そうに声を掛けてくるが、今は何も反応できそうに無い・・・。

心にポッカリ穴が空いたような気分である。なんだかんだ言いながらも、ガンダムで縦横無尽に戦う事が出来ると期待していたので、その分落胆も大きかった。

千斗「はぁ～・・・。」

霊夢「・・・多分、こういうことじゃないかしら。」

千斗「へ・・・？」

俺がクソでかため息を付くと同時に、霊夢が問題を解決する兆しがありそうな言葉を呟く。一縷の望みを懸け顔を上げてみると、霊夢は四つん這いになっている俺の目の前に、一枚の白い紙を差し出してきた。

千斗「これは・・・スペルカード、だっけか？」

霊夢「そうよ。何だか良く分からないけど、これに念じばいいんじゃないの？　あんたの場合。」

千斗「念じるって・・・何を？」

霊夢「さあ。」

さぁって・・・主語がないぞ主語が！

いったい何を念じたら武装が出て来てくれるんだ・・・。

はっ!?

千斗「まさか、このカードに武装をイメージして・・・?」

霊夢が言いたいのは、このスペルカードに武装を封じて、そこから取り出せば良いって事なのだろうか?

それって二度手間では? とも思ったが、一応やるだけやってみよう。試すだけならタダだ。別に失敗したところで、俺が凹むってだけでどうってことは無い。

千斗「むむむむ・・・イメージ、ライフルを、イメージ・・・。」

俺は目を閉じて、カードを右手に持ち、ひたすら頭の中でビームライフルをイメージした。すると・・・

千斗「・・・おぉ!? こ、これは!?」

なんと白紙だったはずの紙に、銃らしきものが描かれているのである!

そう、それは紛れもなく『ビームライフル』だった!

千斗「おおおおおぅ・・・やっだぁ〜よがっだよぉ・・・!」

正直、こんな方法で武装が出てくれるなんて思ってなかった俺は、感動のあまり声が上擦ってしまった。

何せこのまま武装が出せなかったら、ガンダム（素体）で殴り合いを強いられる訳だし。まったく、何処の世界にそんなガンダムがあるのか。

千斗（あっ、Gガンがあったわ・・・）
そういえばうっかりしていたが、あの辺は寧ろ殴り合いがメインだったな。それでもGガン系統しか乗れないというのもアレなので、ホントに良かった。
千斗「しかし霊夢、どうしてこの事が分かったんだ・・・？」
霊夢「勘よ。」
勘かよ。
お前の勘、もはやなんでもありだな。勘で異変の首謀者探し当てて、勘でバレないように首謀者だけ懲らしめたりできないのか？
霊夢「は？そんなこと出来るわけないでしょ。頭おかしくなったの？」
千斗「お前の勘よかマシだよ!!」
こいつの勘はおかしいなんてもんじゃない。
ニュータイプすら超越してる気がする・・・。
千斗「・・・まあでも、その、助かった。サンキューな。」
霊夢「ん。」
改めて言うのは、少し照れ臭かったが、霊夢のお陰で武装を出す事が出来たのだ。本当は感謝しかない。
千斗「とにかくこれで、俺も戦う事が出来そうだ。」

あれ、でもこの紙から取り出すとき、どうやって取り出せば良いんだ・・・？

霊夢「それはこうするのよ。『霊符・夢想封印』！」

霊夢は何がが描かれたスペルカードを、人差し指と中指の間に挟むと、呪文のような言葉を叫んだ。

千斗「・・・!?」

するとどうだろう。霊夢の周りから、大小色とりどりの弾幕が現れたかと思うと、それらが凄い勢いで次々と大空へ飛んでいった。

霊夢「この『スペルカード』は、事前に閉じ込めてた弾幕技を、使いたいときに発揮するためのもの。方法は今見せた通りよ。」

・・・うーんと、つまり？

千斗「こうか？『光線・ビームライフル』！」

俺は霊夢に従って、それっぽく叫んでみた。すると次の瞬間、俺の右手には、『ビームライフル』が握られていた・・・。

千斗「うおぉぉ！すげぇ！ライフルが、これか！」

ついに待ちに待った武装と対面することが出来た。特に代わり映えの無いそれは、アニメで見たまんまのビームライフルだった。

千斗「よし、試しに・・・。」

俺は適当な木を見繕うと、それに目掛けてライフルを向け、そのトリガーを引いた。

＞ピシューン

少しの反動とともに、ライフルからは発射音と同時に緑色の光線が、木に目掛けて一直線に放たれる。

千斗「おぉぉぉ!!これは・・・たまらんなぁ!!」

光線が当たった木は、その表面が多少色が変わった程度で、大した威力ではなかったが、それ以上に『銃を撃つ』という男なら一度はやってみたい事に加えて、その銃が架空の存在だった『ビームライフル』であることが重要だった。

なんというか、最上級と最上級がいっぺんに襲い掛かってきて、バゴーン!!　というか・・・。

上手く言葉に出来ないのがもどかしいが、ものすんごく感動の嵐！　なーんて奇跡なんでしょ！

魔理沙「・・・す、凄い。千斗、凄いぜ！」

俺が感動に打ち震えていると、横に居た霧雨がキラキラした目で俺を見ながらそう言った。

千斗（・・・おいおいよせやい照れるぜ（キリッ））
霊夢「調子に乗るな。」ブンッ
千斗「あがっ!?」
すると背後に居た霊夢に、尻に見事なローキックを御見舞いされた。マンガならバコンッ!! という効果音が聞こえてきそうなレベルである。霊夢ガンダム（こいつ機械）の尻蹴って痛く無いのだろうか。
千斗「てめ、何すんだ霊夢!?」
霊夢「半人前の分際で、偉そうなこと言うのが悪いのよ。あとうるさい。」
千斗「いや言ってないからね!?」
武装が出た時とかの反応が、うるさかったのは認めるが・・・。でもそれが聞こえてるのはお前だけじゃねーか！
くっそ～蹴られ損だ・・・。痛ってぇ・・・。
千斗「ゴリラみたいな脚力しやがって・・・。」ボソッ
霊夢「あ゛？」
千斗「ヒイ!? な、何でもないですぅ!!」
霊夢がおよそ女の子が出すとは思えない声を出したので、命の危機を感じて早々に撤退する。命は投げ捨てるモノではない・・・。

魔理沙「まあまあ・・・落ち着くんだぜ霊夢。」
あぁ^～大天使霧雨が霊夢を諌めようしてくださっている。霧雨マジ女神。それに比べて、はぁ・・・。
霊夢「・・・ったく。次は無いわよ。」
千斗「ハイ。」
どうやらお許しくださるらしい。まぁこれ以上冗談言うと機体(からだ)をバラバラにされそうだからやめておこう。話も進まないしな。
千斗「・・・さて、んじゃま他にも試してみるかな。」
霊夢にうるさいと言われたので、少しテンションは控えめに、俺は他の武装も試すことにした。色々と触ってみたいし、弾幕対決する上で手数は多いに越したことはないだろう。
千斗「霊夢、紙ちょうだい。」
霊夢「はい。」
紙とはスペルカードの事であるが、俺からすれば何の変哲もないただの白い紙である。どういう仕組みかはぶっちゃけ興味ない。
霊夢から数枚カードを受けとると、また同じように念じ始める。うーむむ、ヴェスバー、ヴェスバー・・・。

千斗「・・・よし、成功だ！」

念じてしばらくすると、やはり同じようにカードに武装が現れた。つまり、この方法でスペルカードを造り出せることが確立されたわけだ。やったぜ！

千斗「んじゃま早速・・・

『砲火・ヴェスバー』!!。」

俺がスペルカードを宣言すると、背中に巨大な二門のビーム砲が現れる。

千斗「・・・うおっ!?」

その途端にやや機体（からだ）全体が重くなった。感覚的には背中にリュックサックを背負っている様な感覚だ。

どうやらヴェスバー（この二門）がかなり重たいらしい

千斗（これは・・・常時出しっぱにしない方が良いか・・・？）

ビームライフルもヴェスバーも、当然物質であるので

重さがあって然るわけだが、それならば運用方法も考えなければならない。常時出しっぱにしておけば、好きなときに使うことができる反面、回避が疎かになるので、戦闘経験も無い俺はすぐに堕とされてしまうだろう。

千斗「ん、そういや９１って飛べるよな・・・。」

俺は武装の運用方法を考えている内に、どうすれば機体を３６０度動かせるかを考え

るようになった。しかしその為には空中を動く必要がある。要するにスラスターを駆使して空を飛ばなければならないのだが。

霧雨の箒で後ろに乗せてもらったときに、空を飛ぶという数奇な経験はしたが、あれは『空を飛ぶ』と言うよりは『飛行機に乗って空を飛ぶ』という表現が近い。動かしているのは自分ではないのだ。

この機体で空を飛ぶには、スラスターを使わなければいけないと思うんだが・・・いかんせん人間の体には存在してないものである。どうやってそれらを動かせば良いか、見当も付かない。仕方がないので試しに霊夢に聞いてみるか。もしかしたら参考になるかもしれないし・・・。

千斗「なあ、霊夢はさ、空飛べるのか？」

霊夢「飛べるけど。」

そう言って霊夢はその場で空中に浮いた。ごく当たり前のように行われたそれに、俺も特に何も思わなかった。まぁ霊夢だしね。

千斗「それ、どんな感じで飛んだんだ？」

霊夢「こう・・・フワッと。」

・・・やはりまったく参考にならなかった。読めてはいたが、いかにもセンスで飛んでます、と言わんばかりの説明である。やれやれ、これだから天才は・・・。

千斗「霧雨、霧雨は空飛ぶときどんな感じで？」

魔理沙「・・・・・・・・はっ。あぁ悪い、何だ千斗？」

俺は霊夢の意見は参考にならないので霧雨に聞いてみるが、霧雨は何か考え事をしていたようだ。俺の言葉には反応したが、話は聞いていなかったらしい。

千斗「いや、空飛ぶとき、どんな感じかなって。」

魔理沙「どんな感じ・・・こう、フワッと。」

ブルータス（霧雨）お前もか！

残念な事に霧雨もセンスプレイヤーらしい。いや別に残念ではないか。霧雨がセンスプレイヤーなのは良いことだ。話せるセンスプレイヤーなのだから有益である。

・・・誰かとは違って。

しかしそうなると、いよいよどうしたものか。そんなフワッと、飛ぼうとしたら飛べたわ、みたい感じでホントに飛べたりするのだろうか。何ならやってみるかね。

千斗「そーれフワッと・・・・・・・・

・・・・・・・・

!?!?!?」

次の瞬間、俺の体は空中に浮いていたのだった。

機体を乗りこなしてみよう！

ーー博麗神社・参道

千斗「飛んでる・・・飛んでるぞ俺!?」
霊夢「・・・・・・・・・。」
魔理沙「やったな、千斗！」
・・・試しに霧雨と霊夢の言う通りにしたら、空を飛べました。自分でもどうして飛べてるのか分かりません。こう、飛ぼうって思ったら、飛んでました。うわぁなんか変な感じ・・・。
実際の所は、ガンダムＦ９１が背中のスラスターと脚部のモーターを使用して、空中で姿勢制御している状態である。機体のバランスを保ちながら、空中に浮遊しているのだが、これが結構難しい。地を蹴った飛び初めの時に、ブランコを全力でこいだ時に良くある、お腹がくすぐったくなるあの感覚があり、地面から足が離れると、背中のスラ

スターに重心が移動するような感じだ。
機体を上昇させる時は、つま先に力を込めるというか、空中にいながらも、地面につま先立ちするような感覚でいると、上昇させることが出来るようだ。下降するときはその逆で、少しずつ込めた力を小さくしていくと、だんだんと、体が地面に近づいていく。
左右に移動する時は、右なら右斜め前、左なら左斜め前に重心を傾けると、機体がその通りに動く。自転車に乗りたての小学生が、必死にバランスを取っていると思ってくれると分かりやすいか。空を飛んだからと言って、それほど特殊な感覚があるわけではなく、あくまで地面に立つときの延長線上のような感覚だった。
千斗「くっ、でも結構難しいぞこれ？」
霊夢「慣れよ、慣れ。」
魔理沙「私も最初は千斗みたく戸惑ったけど、練習すれば普通に飛べるようになるのぜ！」
と、二人の有難いお言葉を貰ったので、そのまましばらく姿勢制御を頑張ってみる。空中に止まるだけなら別に難しく無いんだが、体を前後左右に動かそうとするのが中々上手くいかない。それに加えて空中なので上下もあって、余計にややこしいのだ。
千斗「おっ、と、とと。」
霊夢「・・・・・・・・。」

魔理沙「千斗頑張れー！」

霊夢は黙って俺の様子を見ているのか、はたまた何か考えてるのか、視線は俺の方に向けてはいるが、焦点が合ってない。なかなかどうして、器用な事をするやっちゃ。

霧雨は普通に応援してくれていた。よっしゃ、もう少し頑張ろ。

そうしてしばらく姿勢制御の練習をしていると、突然霊夢が口を開いた。

霊夢「・・・ま、こんなもんでしょ。私やることがあるから魔理沙、あとよろしく。」

千斗「え。」

魔理沙「え？」

そう言うと、一人神社の本堂の方へ飛んでいった。

本当に色々と突然過ぎる奴である。何が『こんなもん』なのだろうか。下にいる霧雨も驚いた様子で霊夢を見ていたので、霧雨にも何も言ってないのだろう。アイツ俺を鍛えるって言ってなかったっけ・・・？

魔理沙「急過ぎるぜ霊夢・・・。」

まったくである。とりあえず一旦地面に降りるとしよう。

俺は爪先に込める力を少しずつ緩めて、地面に降りようとする。その様子は下降する、というよりは空中を沈んでいる、と言った方が良いかもしれない。いかんせん下に降りるスピードが遅すぎるのだ。やはり下に向かって進もうとしなければいけないの

か。でもどんな感じでやれば・・・。

俺は機体をスピードを持って下降させるために、体の色んな所に力を入れてみた。あちこち動かしている内に、ちょうど空気イスをする要領で膝から太股辺りに力を込めると、機体が下に向かって進んでいくことが分かった。

千斗「おっ、と！」

その加減が難しく、地面に着地するときに勢いが付きすぎて少し膝に衝撃があったものの、スピーディーに着地することは出来た。どうにか、上昇下降の感覚は掴むことが出来たか。

地面に降りた俺は、その足で霧雨の方へ向かった。飛び始めの地点からそれほど動いた訳でも無いので、数秒ほどで霧雨の前に到着する。すると彼女が口を開いた。

魔理沙「霊夢の奴、何か用事があるらしくて、特訓は私に任せるって言ってたんだぜ。」

千斗「そうなの？　霊夢の奴、何か他にやることでもあるんかな。」

どうやら霊夢の奴は、一応事前に霧雨には自分が居なくなることを伝えていたようである。霧雨はそのタイミングがいつかは知らなかったようだ。それで驚いた様子だったのか。

魔理沙「それと、今から一週間後に千斗が模擬戦をして、それで力を見るとも言ってたぜ。」

千斗「模擬戦？　誰と？」
魔理沙「多分霊夢とだろ？」
千斗「マジかよ・・・。」
霧雨の口からまさかの事実が発覚したが、決定権は霊夢にあるわけだし、致し方ない。そこで俺は気になったことを霧雨に聞いてみる。
千斗「霊夢ってやっぱり強いの？」
魔理沙「強いぜ？　といっても本気を出した所は見たこと無いから何とも言えないが、手を抜いてもアイツは充分強いんだぜ。」
千斗「てことは霧雨は霊夢と戦った事があるの？」
魔理沙「まぁな。」
そう言って霧雨は、顔を俯かせて右手に持っていた箒で地面をなぞった。リボンの付いた黒い三角帽の下で見え隠れする表情には、少しの悔しさと劣等感のようなものが垣間見えた。俺は、なんだか凄く居たたまれないような気持ちになったので、話を変えることにした。
千斗「霧雨、とりあえずこれからどうする？」
魔理沙「・・・・・・・・。」
俺がそう言うと、霧雨少しの間黙ったままだったが、やがて空いている左手で帽子を

被り直した。そして顔を上げてニカッと笑いながら

魔理沙「私と模擬戦をするんだぜ♪」

得意気にそう言ったのだった。

???????????????????

ーー魔法の森近く・青の草原

霧雨に連れられ、どこかの草原に着いた俺は、まず模擬戦闘以前に、ある程度まともに機体を動かせるようにする事から始める事にした。

時間的余裕はあまり残されていない。霊夢との模擬戦まで、あと一週間。どんなに悪くても、異変までには機体を扱えるようにしないと、異変を解決するどころでは無くなってしまう。居候させてもらっている身なので、その恩返しとなる異変解決のために、お荷物になる事態だけは避けたかった。

焦っても仕方がないが、悠長にもしてられない。今は能力を発動させたまま、とにかく動き回る、ということをしていた。

千斗「・・・っほ、よっ、っと。」

最初に飛んだ時よりかは上手く動けているが、まだまだ思い通りにとはいかない。模擬戦や実戦では、これに加えて武装を適切に使う必要も出てくる。とにかく飛んでる感覚を体に憶えさせる事が大事なので、前進、後退、旋回、上昇下降と、あらゆる動きを行い、練習していた。

因みに手持ち無沙汰な霧雨は、俺とは遠く離れた場所で弾幕を撃ちまくり、空中を飛

び回っていた。
　今は俺がまともに機体を動かせるまで、各自で特訓、という取り決めになっているので、霧雨も自身の特訓をしているのだろうか。遠目から見る限りでも大分エグい動きをしているんだが・・・。
　神社で模擬戦をすると霧雨に言われたときに、二人で話し合って各自で特訓する事になったのだが、そのとき霧雨は、俺が現在の姿勢制御もままならない状態でも、模擬戦しても良いと言ってくれた。もちろん、俺のためにそう言ってくれたのは嬉しい。だが冗談ではない。
　今の状態で模擬戦なんぞした暁には、それは戦闘ではなくただの虐殺になるのは、火を見るよりも明らかである。気持ちはありがたいが、せめてまともに動けるようになってからと、俺から霧雨に断りを入れて、今の状況がある。
　いずれ機体を満足に動かせるようになったら、模擬戦でも何でもして、経験を増やしていく。当然俺には実戦の経験などないので、少しでも多く『戦い』を経験するに越した事は無い。
　その為に問題は山積みだが、ガンダムを動かして戦うということが、何よりのモチベーションなので辛さや苦しさは無い。寧ろ楽しいまである。
　今まで生きてきた中で、何かに真剣に打ち込むことは珍しかった。いや、無かったと

言った方が正しい。それほど薄っぺらい人生だった。何事に対しても本気になれず、あらゆることが『それなり』だった。強いて言えば、勉強の面では他よりも少しばかり秀でていたかもしれない。それでも微々たるものであって、とても人に誇れるようなモノではない。

それが今はどうだ、建前では霊夢に居候させてもらっている借りを返すためと言ってはいるが、そんなものは詭弁に過ぎない。他ならぬ俺自身が、ガンダムで戦いたいと思っているのだ。今までこれ程強く、何かをしたいと思ったことは無かったと思う。

千斗「・・・っと、ふっ、たぁっ、・・・へへっ。」

・・・思わず自嘲めいた笑みが零れてしまった。この異世界で本気で、やりたいことが見つかるもしれない、そんな淡い期待を胸に秘めつつも、機体を動かす特訓を続けるのだった。

??????????????????

―特訓三日目―

丸二日掛けて、ある程度機体を動かせるようになったので、試しに霧雨と模擬戦をしてみた。

結果は惨敗。それはまぁ分かりきっていた事だが、飛びながら武装を使いこなすのはまだ難しく、まともに戦闘にすらならなかったのが実情である。

空間を動き回るだけならある程度は何とかなるのだが、そこで重量のあるライフルやランチャーを持ちながら行動するとなると、途端にバランスが取りづらくなり、結果として動きが鈍くなり霧雨の放つ基本的な弾幕すら避けられなくなり・・・墜とされる、と言った具合だ。

しかしこの模擬戦で、二つほど収穫はあった。

一つ目は自身の動体視力が劇的に良くなっていた事である。霧雨の放つ弾幕は、弾と言うよりはビームに近く、手を前に構えてそこから随時発射される、というものだったのだが。

この、事前動作である手の僅かな動きが、人間の姿でいた時とは比べ物にならないくらい、鮮明に見えるようになった。一応、能力を解除し、同じような動きを霧雨してもらって確認したが、その差は一目瞭然だった。

流石に手から放たれた弾幕を、見てから回避するのは不可能だったが、放たれる前に、手の動きからその軌道を予測して避けることは出来た。

今は避けるので精一杯だったが、これには霧雨も驚いた様で、三日目の終盤の方になると、スペルカードを用いようとしてきたので、全力で止めた。そんなものを食らったら気絶は免れなく、日数を棒に振ってしまう。霧雨は少しだけ残念そうにしていた。

二つ目は、痛覚の鈍化と全体的な耐久面での強化だ。

霧雨の弾幕は生身で喰らうと、普通に火傷、場合によっては皮膚を貫通するレベルの代物であるが、Ｆ９１になった状態で喰らうと、その時に痛いは痛いが、特に外傷は無く、その後の行動にも支障は無かった。

また、空中で弾幕を避けているときに、死角から接近してきたホーミング弾が後頭部

に直撃し、一瞬意識を失いかけ、そのままかなりの高度から地面に落下したのだが、これもまた、目立った外傷は無く、落ちた時の衝撃もそれほど感じなかった。まぁ普通に痛かったんですけどね。

この事は、神社に戻った時に霊夢に相談したが、どうやら俺は、自身の霊力を媒介にして身体強化、すなわち能力を発動しているらしい。動体視力の強化もその為なのだろうか。

つまるところ、霊力が枯渇しない限りは無意識によるものか、はたまた『ガンダム』という特性によるものか、定かでは無いにしろ、この耐久力強化が継続されるようだ。因みに霊夢が言うには、俺の保持している霊力量は『中の上』くらいらしい。そんなところまで『そこそこ』なのか俺は・・・。

―特訓五日目―

殆ど自分の体の様に、空中でも機体をを動かせるようになってきた。さしもの高速移動はまだ無理にしろ、霧雨が手加減をしてくれると、それなりに戦いになるようにはなっていた。結果として、そのおかげでさらに収穫もあった。

どうやら、俺がスラスターを吹かしたり、ライフルやランチャーを撃ったりするときにも、霊力を消費するという事が判明した。

またそれに伴って分かったことだが、俺のこの『武装をスペルカードに封じて、そこから取り出して闘う』という戦法自体が、場合によっては大きなアドバンテージを得られるという事も分かった。

と言うのも、霧雨や霊夢はスペルカード発動中は弾幕技を出し切るまで、ずっと霊力（霧雨は魔力）を使用し続けているが、俺はスペルカードを発動するというよりは、スペルカードから召喚して使用するので、霊力使用の任意調節が可能な訳だ。これは一戦一

戦では効果は薄いが、継続戦闘に非常に長けている特性である。特にデメリットがないのも良いことだろう。さしずめ俺だけの武器と言えるのではないか。

さらに、各武装ごとに、消費される霊力に違いがあることも分かった。これはＦ９１の場合だが、ヴェスバー〉ビームランチャー〉ビームライフル〉ビームシールド（発生時）＝ビームサーベル（抜刀時）〉マシンキャノン〉バルカン砲〉スラスターでの移動といった具合だ。

確かヴェスバーやビームライフルなどは、設定上では、発射される弾の性能を変えることも出来た筈だが、その方法を見つけることは残念ながら出来なかった。また時間のあるときに、他の機体や武装を研究してみようと思う。

―特訓最終日―

特訓最終日ともなると、霧雨との模擬戦もそれなりに行えるようになっていた。まだ霧雨には及ばないものの、初日からは考えられないほど『戦う』事が、出来るようになった。これは恐らく、Ｆ９１に搭載されている『バイオ・コンピューター』の学習能力によるものだと推測されるが、定かでは無い。もしかすると俺にはスーパーパイロットのセンスがあり、僅か一週間で動きをモノにする事が出来たのかも・・・いやそれは無いか・・・。普通にＦ９１のお陰だろう。

霧雨は俺の成長スピードに大層驚いた様で、「私もうかうかしてられないぜ。」なんて言っていた。だがその心配は杞憂に終わるだろう。何故なら俺は、霧雨とある程度戦えるようになるまでは早かったが、そこからさらに強くなるには、相当な時間と場数が要すると踏んでいたからだ。

その理由は単純で、特訓の序盤、中盤と確かに感じる事が出来た成長の手応えが、終盤にはほとんど感じられなくなった事による。これは恐らく、俺自身の持つ性質によるところだと思うのだが・・・悲しくなるので深く考えるのはやめにした。

それぞれの機体ごとの強さの最高値は低くても、多数の機体を駆使して相手を翻弄するという戦い方も考えられるので、そんなに悲観はしていない。まぁ今まともに使えるのはＦ９１だけだが。これからはそういう練習にシフトする事になるのかね。

因みに何気なしにウイングガンダムゼロ（ＴＶ版）で模擬戦をしようとしたことがあったのだが、Ｆ９１とは勝手が違うのか、まともに飛べないわ、武装は扱えないわで、模擬戦の体を成していないために断念したのである。

ゼロはフルブやバーサスでも愛用の機体だったので乗りこなしたかったが、今回は時間が無いので仕方がない。霊夢との模擬戦の後に時間があったら練習するとしよう。

――そしていよいよ、霊夢との模擬戦の日が訪れたのだった。

～Ｓｔａｇｅ—０～　ＶＳ　博霊霊夢

ーー博霊神社・参道

霊夢「準備は出来たみたいね。」
霊夢（目の前の女）は、抑揚の無い声でそう聞いてくる。
千斗「あぁ、大丈夫だ。」
昨夜もゆっくり眠れたし、朝飯もしっかり食った。体調は万全である。
現在の時刻は午前９時を回ったところ。遂に模擬戦（その）当日を迎えた俺は、霊夢と共に、参道のより開けた所にいた。
千斗「そう言う霊夢は、準備オッケーなのか？」
意趣返し、とは少し違うが、冗談混じりに俺は霊夢にそう問い掛ける。

霊夢「生意気。」

しかし相手は相変わらずのようだ。特に表情を変えずに、ただの一言で俺の挑発を一蹴する。

千斗「・・・っ、と失敬。」

そんな霊夢の様子に、逆にたじろいでしまう始末である。我ながら情けないが、まあとにかく気を取り直して、俺は弾幕対戦（模擬戦）の内容を再確認する事にした。

スペルカードは昨日の特訓でしっかり作成してある、『ビームライフル』『ビームランチャー』『ビームサーベル』『ヴェスバー』の四種類。使う機体はガンダムＦ９１。相手は博霊霊夢（ニュータイプの巫女）。

霊夢の話では、しっかりした形式の弾幕対戦自体は、霊夢も初めての事らしい。しかし弾幕を使用した戦闘自体は、それなりに経験していると言う話だったので、特に強調材料にはならないだろう。

しっかし俺はつい最近まで、普通の高校生やってたはずなんだがなぁ・・・こんな異世界の地で、年下の女の子と闘うことになるとは。人生ってのは分からないもんである。

まあ何にせよ、こちらは霊夢戦（これ）が始めての実戦形式での戦い。霊夢の事だから、そう何度も模擬戦に付き合ってはくれないだろうし、彼女からの評価にも直結する。気を引

き締めなければ。
とは言え、模擬戦は練習であって異変ではない。気を張りすぎて、実力が発揮できないというのが、一番よろしくない。
相手は知人で、こちらは胸を借りる立場。
緊張も油断も無く、集中していく！
霊夢「もう一度ルールの確認をしておくわ。使用できるスペルカードは４枚。勝敗はどちらかが負けを認めるか、気絶するか、５回以上の直撃弾、もしくはスペルカードを使いきるかで決めるわ。
範囲は神社の境内。ただし神社に傷を付けたら潰すわよ。」
自分に気合いを入れ直していると、霊夢が唐突にルールについて語り出した。　ってちょっと待て。
千斗「もう一度って何それ？　俺初めて聞いたんだけど。」
霊夢「今決めたのよ。」
・・・今決めたって、そんな大事な事を突然決めないでくれ。何々、直撃が許されるのは五回までで、スペルカードを使いきったら負け？
千斗「四枚のスペルカードを使いきっても相手が健在なら、使いきった側の負けになるのか？」

霊夢「そうね。でもあんたの場合は、武装(それ)が破壊されない限りは大丈夫でしょ。」
今回のルールなら、霊夢の弾幕技(スペルカード)を４回凌ぎきれば、それでも勝利という事になるようだ。
こちらは霊力切れ(パワーダウン)以外でスペルカード(武装)が自然に消滅することは無いので、このルールがこちらに有利に働くかと思われたが、すべての武装を破壊されると、自機が元気でも勝負は負けになるので、どっこいどっこいと言ったところか。各々の武装がどれほどの耐久値を持つのか分からないが、あまりに雑に使うわけにもいかなくなったな。
しかしこの霊夢の言葉を聞いて、一つの疑問が生まれる。
千斗「あれ、でもこのルールって、異変(本番)でも適応されるのか？」
霊夢「それは臨機応変よ。」
千斗「え、相手が応じなかったらどうするんだ？」
霊夢「何とかなるわよ。他には。」
千斗「・・・・・・・・・。」
異変について未だに詳しく知らないが、そんな適当で大丈夫なのだろうか。今までは漠然と、異変について、幻想郷に対して悪事を働く事で、それを懲らしめるモノだと思っていたが、そいつらが素直にこっちのルールに従うとは思えないし、何だか余計に分からなくなったな。まぁいざとなったら、霊夢に全部任せれば良いのか。

霊夢「あっそ。じゃあ始めるわよ。」
まだ何も言ってないんだが・・・。
――っと、始めるのはいいが、開始の合図ってどうするんだ？
決闘（デュエル）！
・・・・・・だったり？
霊夢「ほら、始まったわよ。さっさと来なさい。」
千斗「いや、合図無いのかよ!?」
ホントに全部が全部突然な奴だなコイツは。
にしても霊夢のヤロウ、さっさと来なさいだと？
余裕ぶっこきやがって・・・！
なら此方も遠慮なく行かせてもらうぜ！

千斗「Ｆ９１ガンダムは、矢部千斗で行きます！」

幻想郷の空。一機（一人）のモビルスーツ（男）と一人の巫女との弾幕対戦（闘い）が幕を開けた。幻想郷での始めての弾幕対戦。その初動は、男のスペル宣言からだった。

千斗「行くぜ！『光線・ビームライフル』！」

千斗が右手に持ったスペルカードを眼前に構え、高らかにそう宣言する。すると機体（千斗）の右腕に、突如としてビームライフルが現れた。すぐさま千斗は、その銃口を霊夢（巫女）へと向けて構えると、躊躇なく引き金を引く。

刹那、薄緑色の鋭い弾幕がライフルから発射された。

ほとんど予備動作無くして発射されたそれを、霊夢は始めから分かっていたかの様にいとも簡単に左へ躱した。そして、そのまま人差し指を立てたかと思うと、澄ました顔で自らの方向へ引いたのだった。

千斗「舐めやがって・・・！」

明らかな挑発に応える様に、千斗はビームライフルを構え直し、霊夢に目掛けて発射する。

霊夢「甘いわね。」

千斗の構えるライフルの銃口がブレている訳でもなく、センサーでロックも掛かっているはずだが、そんなものは始めから無かったかのように、霊夢はそれを軽やかなステップで躱した。さらに、その体勢からお払い棒を千斗に構え、多数の弾幕を放ってきた。

千斗（・・・ッ!?　来た！）

大小色とりどりの弾幕が千斗に迫る。ランダムに周囲にばらまかれたそれは、それほどの密度ではないが、不規則に動き、一定の距離を進むと空中に霧散していった。

千斗は機体のスラスターを目一杯に吹かすと、その弾幕を躱しながら、霊夢に向けてライフルを撃っていく。

それを鮮やかに霊夢が躱す。

しばらくはその応酬が繰り広げられる。

一見すると、互角のように見えるが、よく見ると千斗は、ほとんどギリギリで弾幕を躱しているが、対する霊夢は銃口から放たれる鋭い弾幕を、一つ一つ余裕を持って躱わしている。

この時点で二人の実力差は明らかだった。
そしてその応酬は、突然終わりを告げた。
千斗「うわっ!?」
霊夢の放った弾幕の内の一発が、千斗のビームライフルの先端に直撃したのである。
千斗が慌てて右手で握っていたライフルを離すと、直後にそれは空中で爆散した。
霊夢「スペルカード・ブレイクね。」
千斗「ッ・・・！　あぁ、そうだな・・・！」
苦虫を噛み潰した様な表情で、霊夢を見る千斗。どうやら機体に損傷は無かったようだが、折角のスペルカード（ビームライフル）を破壊されてしまった。
千斗は、その後の霊夢の行動を警戒して、距離を取ろうとするも、霊夢は何もしなかった。弾幕を放つのを止めそのまま微動だにせず、千斗を見下ろしていた。
千斗（そのままを追撃してこないのか!?）
千斗は思わず小さく舌打ちし、すぐに二枚目のスペルカードを宣言する。
千斗「『閃弾・ビームランチャー』！」
すると機体の左腕に、ビームライフルの約二倍ほどの長さのランチャーが現れる。その銃口はライフルよりも太く、千斗は機体の左肩にそれを乗せた。
霊夢はそれを見ても、なんら動じることなく、その無機質な瞳で千斗を見つめ続けて

いた。まるで、『何をしようが無駄だ』と言わんばかりに。
しかし千斗のスペル宣言は、まだ終わってはいなかった。
千斗「もうひとつ！『砲火・ヴェスバー』！」
千斗「……さらに、『光剣・ビームサーベル』！」
同時に三つのスペルカード宣言をした千斗。
ウェスバーは腰の両脇に既にセットされており、二本のサーベルを左腰に装着して、ランチャーを霊夢へ向けてゆっくりと構える。発射こそしていないものの、いつでも霊夢に向けて放てる状態で、霊夢の出方を待つ。
そしてこの瞬間、初めて霊夢に僅かな動揺が走った。
霊夢（なるほどね・・・。）
なるほど。確かにスペルカードの同時宣告はルール違反ではない。しかし、スペルカードというのはあくまで一つの弾幕技をカードに封じ込めたものである。技の制御や、内部エネルギーの消費スピード等の点から、スペルカードを同時に発動するという事は、特殊な場合を除いて、ほぼ不可能に近い事だった。
しかし、彼の場合は武装をカードに封じ込めているだけなので、同時に発動し、使うことができる。
勿論その分、霊力の消費は凄まじいが、撃たなければ霊力を消費することは無い彼の

スペルカードは、まさに彼特有の武器と言っても過言ではない。
いかに霊夢と言えども、スペル二回分ならまだしも、三回分を通常弾幕だけでいなすというのは、些か無理があった。
霊夢「・・・仕方ないわね。」
そう呟いた霊夢は、憂鬱そうな表情で一枚目のスペルカードを取り出した。
霊夢「『霊符・夢想封印・界』！」
霊夢がそう宣言すると、突如として千斗の周囲を覆うように、無数の札が現れた。
千斗「・・・なっ！これは!?」
周りを隙間なく埋め尽くしていく札に、千斗がひるむ。僅かに見える隙間から、霊夢の様子を伺おうとした次の瞬間、七色の弾幕が、通常弾幕よりも速いスピードで自身に迫っていることに気付いた。
千斗（つな!?逃げ道が・・・！）
千斗が気付いた時にはもう遅い。既に弾幕は目の前に迫ってきていて、その内の一発をもろに受ける。
千斗「うげっ・・・!?」
たった一発当たっただけで頭がふらつき、体を仰け反らせる程の威力。しかも通常弾幕と比べてスピードもかなり速い。

しかし千斗にはその事を冷静に思考する時間も余裕も無い。既に次の弾幕は迫ってきていて、とにかく反射神経と勘で躱すしかないという状況だった。霊夢は変わらず七色の弾幕を撃ち続けているし、千斗は折角の武装（スペルカード）を全く使えていない。それどころか、武装の重量のせいで余計に動きが鈍くなってすらいる。

ただ躱す事で必死な千斗。霊夢のスペルブレイクが先か、千斗の被弾が先か、それは時間の問題だった――――――

――――――死角から接近した一発の弾幕が、千斗の後頭部に直撃したのだ。

千斗「がぁっ・・・!?」

弾幕が直撃したガンダム（千斗）は一度大きくふらつくと、やがて制御を失い、地上へ墜ちていった。

霊夢（・・・終わりか。）

霊夢「案外、あっけなかったわね。」

霊夢（スペルカード三つを同時に宣言するなんて事をしておきながら、最後はそれを生かせずに敗北・・・。発想は悪くないけど、それを生かす技術がまたまだってとこね。ま、初めてでこれだけ出来たのなら悪くないか。）

千斗にそう評価を付けた霊夢が、スペルカードを解除しようとしたその時――――

――――突然ガンダムＦ９１が立ち上がった。

霊夢（・・・まだ意識が？）

あの倒れ方では、もう気絶しているだろうと踏んでいた霊夢は、起き上がった千斗に少し驚き、スペルの解除をやめた。

ガンダム（千斗）が起き上がったという事は、まだ闘いが終わっていない事を意味する。高速弾幕は出ていないものの、札は千斗の周りを漂ったままである。

霊夢「アンタ予想以上に頑張るわね。でももう負けを認めたら？」

霊夢から発された降伏勧告ともとれる発言に対して、千斗からの返答は無かった。霊夢の声は聞こえているはずである。先程の戦闘の時よりも、二人の距離は近い。

しかしＦ９１は不気味に佇ずんだまま、動かない。
霊夢「それは、続行するってことで良いのかしら？」
霊夢がそう質問するが、またもや千斗からの返答は無い。
霊夢（本当に聞こえていないのか、それとも何かの作戦なのか、分からないけど）

霊夢は千斗へ向けて再度スペル弾幕を発射する。
機体の周りは札で覆われたまま、再び高速弾幕が千斗へと向かっていった。

そのとき――――

――――ガンダムがにわかに発光しだす。

霊夢「・・・・・・・・？」
すると両肩から三本の棘なものが露出し、フェイスの構造も変わった。霊夢の弾幕は変わらず、そのままガンダムへ襲い掛かる。

しかし

千斗「『道が無いなら・・・作りゃ良いだろ！』」

霊夢「なっ・・・!?」

そう叫んだ千斗は、ランチャーを素早く背中にしまうと、左腰にしまわれた二本のサーベルを両手に装備し、手首を高速回転させながら、周りを囲む札へ突っ込んでいった。

すると札は、高速回転しているサーベルに当たると同時に消滅していく。

霊夢（今の声は何・・・!?）

あまりの予想外の出来事に、今度ばかりはさすがの霊夢も驚きを隠せないでいた。

それもそのはず、千斗の動きを封じ込めていた札は、彼のサーベルによって次々に破壊され、それによって出来たスペースで、霊夢の放つ高速弾幕を回避しているのだ。

それだけではない。千斗は一瞬で姿勢を制御すると、無数に迫ってくる弾幕を縦横無尽に回避しながら、霊夢に接近してくる。

霊夢（こんな・・・あり得ない！）

その姿を見た霊夢は心の中で悪態をつくと、接近してくる千斗から距離を取ろうとする。

霊夢（クッ・・・コイツ、速い・・・！）

しかし発光した機体は、残像を残しながらそれを上回るスピードで霊夢に迫っていく。ちょうどその時、霊夢のスペルが終わりを告げた。

霊夢（このタイミングで時間切れ(スペルブレイク)!?

・・・不味い！）

霊夢「・・・ちょっと大人しくしてなさい！」

霊夢は威勢の良い声と共に通常弾幕をばら蒔くが、それらは既に、千斗に対して意味を成していなかった。

千斗『『邪魔をするなぁ！』』

千斗はそう叫ぶのと同時に、再びサーベルを高速回転させると、向かってくる弾幕全てをかき消していく。さらにそのままの体勢から、霊夢へ向けてヴェスバーを放つ。

千斗『『落ちろぉ！』』

腰に装着されている二門の銃口から、鋭いビームが霊夢に襲いかかった。

霊夢（さっきのよりも速い!?）

霊夢は咄嗟に、右後ろにステップすることで、ウェスバーを回避しようとした。しかし回避した先にガンダム(千斗)のランチャー砲が飛んでくる事を直感で察知する。

霊夢（避けたら、当たる・・・!?）

持ち前の勘で、事前に千斗の連撃を予測する霊夢。

しかし、自身の動きを先読みしたかのような千斗の攻撃に、その表情がいよいよ驚愕に染まる。

霊夢「ッ!!」

気が付くと、ヴェスバーから放たれたビームがすぐ目の前まで迫っていた。それを霊夢は、体を高速で捻る事でギリギリ回避するが、巫女服が掠れていた。どうやら直撃は免れたものの、紙一重の差だった様だ。

霊夢（危なかった・・・あと少し反応が遅れていたら直撃していたわね・・・）

千斗「『・・・・・・・・。』」

霊夢はそのまま油断せずに千斗と正面から対峙した。

堕ちる前とは違い、まばゆい輝きを放つそれは、動きまで最初とは比べ物にならないレベルになっていた。かつ武装（スペルカード）を三つ同時に使用しており、自身のスペルはそれらによる、信じられない方法で攻略されてしまった。通常弾幕で相手をするのは恐らくもう不可能だろう。

霊夢（これは・・・いったい何。）

霊夢は、今まで感じたことの無い何かを、ガンダムから感じていた。スペルカード残数は霊夢が有利。被弾数も霊夢が有利。客観的に見れば霊夢の方が勝利に近い。

なのに

霊夢（嫌な感覚・・・。勝てる気が、しない・・・？）

霊夢は、この得体の知れない感覚に当惑するだけであった。なにせ今まで何ものにも感じたことの無かった未知の感覚だ。どう表現すればいいのか分からないが、確かにそれを普通の人間（目の前の男）から感じていた。

自身の直感は、この男を倒せばそれが分かると訴えているが、得体の知れない感覚のせいで、あと一歩が踏み出せないでいた。

霊夢（しっかりしなさい！博霊霊夢・・・！）

自分にそう言い聞かせるものの、やはり体は着いて来てくれない。やがて訳もなく手が震え始める。

霊夢（嫌、気持ち悪い・・・！）

目の前のガンダム（男）は先程から一言も発っさずに、空中に浮遊している。それが一層霊夢が感じる『何か』を際立たせる。

霊夢（これが、紫の言ってた千斗（アイツ）の力なの・・・？）

霊夢がそう思考していると、目の前の機体の様子がおかしい事に気付いた。先程までまばゆく発光していたそれは、今はもう白を基調とした色合いに戻っており、全身に装備されていた武装（スペルカード）も綺麗に無くなっていた。

霊夢（今度は何を・・・）

次の瞬間、機体はその姿のまま、地上へと落下していった。
霊夢「・・・はぁ？」
霊夢がそう呟くと同時に、千斗の能力（変身）が解ける。幸い地上に落下してから解けた様なので本人に怪我は無いようだ。
霊夢は倒れたままの千斗へあわてて駆け寄り
霊夢「・・・もう、いったい何なのよアンタは。」
そう言いながらペシペシと千斗の頬を叩いた。しっかりと呼吸はしている。ただ気絶しているだけらしい。しかし霊夢は、千斗の体内には生命を維持する程の霊力しか残っていない事を感じ取る。
霊夢（普通、ここまで自力で霊力を消費するのは無理。やっぱりさっき感じたのは、千斗じゃない誰か・・・？）
霊夢は倒れている千斗をそっと抱き抱えると、そのまま母屋へ向かって飛び立った。
・・・複雑な心境を胸に抱えながら。

対戦の後に

――???

霊夢「紫。」

紫「あら、霊夢。何か用？」

霊夢「白々しいわよ。アンタも見たでしょう。アレを。」
紫「・・・彼の事を行っているのなら、それは見当違いね。」
霊夢「どういうこと。」
紫「私にも分からないってことよ。少なくとも、今はまだ。」
霊夢「外部からの干渉によるものじゃ無いって訳？」
紫「それは保証するわ。少なくともあの場にいたのは、あなたと、彼だけ。」
霊夢「・・・たかが模擬戦（予行演習）の為に、結界を張った事は？」
紫「そんな大それたものじゃないわよ。異変の前に披露する訳にはいかないでしょう？」
霊夢「・・・・・・・・。」
紫「そんな目で見つめないで。卒倒しちゃうわ？」
霊夢「はぁ・・・。」
紫「一週間の特訓程度で、霊夢（アナタ）に善戦したのだから、素直に認めてあげても良いのではなくて？」
霊夢「追求しても無駄って訳ね。」
紫「あらあら。」クスクス
霊夢「・・・まぁいいわ。そっちは準備出来たの？」

紫「そうね。あと三日ほどで、始まる手筈になっているわ。」
霊夢「そ。邪魔したわね。」
紫「・・・くれぐれも、彼のことはお願いね？　霊夢。」
霊夢「ん。」フリフリ

・・・・・・・ッ？
あれ、ここはどこだ？
確か霊夢と戦ってて、必死に弾幕を避けてて・・・

？「おはよう。」
えっ？
？「・・・・・・・・・。」ニコニコ
君は、誰？
？「はぁ？　寝惚けてるわけ？」
いや、見たことはあるけど、見たことがないというか。
？「何よそれ。変な千斗。」
なあ一応聞くけど、霊夢だよな？
霊夢「当たり前じゃない。他の誰に見えるのよ。」
なんでお前、制服なんか着てるんだ・・・？
霊夢「これから学校に行くからに決まってるでしょ。シャキっとしろ！」
お前はそんなに表情をコロコロ変える奴じゃないだろ！
霊夢「何よ。私が根暗とでも言いたいわけ。」ギロ
いやそんなことは・・・。
霊夢「・・・千斗、何か、あったの？」
それは現在進行形で・・・って近い近い!?
霊夢「ねぇ、悩みがあるならちゃんと話して？

幼馴染の、私に。」

・・・・・・・幼馴染？

ーー博麗神社・母屋

千斗「・・・夢か。」

目が覚めると直ぐに、そう感じた。俺は寝ている体を起こし、辺りを見回す。いつもと変わらない風景がそこにはあった。また自身の部屋で寝かされてたらしい。つい一週間ほど前にも、これと同じ展開があったので、特別改まって感じることはない。夢見の内容は、少し違っていたが。

千斗「二回連続で、霊夢の夢か・・・。」

夢はその人の無意識に望むモノを見せることもあると、どこかで聞いたことがある。やれやれ、俺は霊夢(あの女)に幼馴染になって欲しいなどと無意識に思っているのだろうか。

千斗「・・・いやいやいや。それは無いって。」

何せ相手はあの霊夢だ。俺が邪な考えを持っていれば、他ならぬアイツがとっちめてくるだろう。だって心読まれてるし。

千斗「それにしても・・・俺がここにいるってことは、はぁ・・・。」

幸か不幸か、奇妙な夢見のお陰で少しの間、気絶する前の出来事を忘れる事が出来たが、それも焼け石に水。時間が経つと共に、少しずつ現実を認識していた。

当時は意識が朦朧としていたので定かではないが、直前の記憶から鑑みるに、霊夢のスペルを躱しきれずに、被弾してしまったのだろう。こ丁寧に気絶するというおまけ付きで。

千斗「情けねぇ・・・。」

一発でも弾幕を当てることが出来ればと思っていたが、そもそも俺が使うことが出来た武装は『ビームライフル』のみ。他の三つは、出したは良いものの、一度も使うことが出来ずに落とされてしまった。

これでは異変（本番）では、足手まといもいいところだろう。霊夢は失望しているかもそれないし、あの女のことだ、何とも思っていないかもしれない。しかしそのこととは関係なく、俺の気分は憂鬱だった。

千斗「・・・・・・・・・。」

やりたかったことを、何一つ発揮できないまま終わってしまった。それが、何よりも悔しかった。模擬戦の前は、武装を一遍に持つと、回避が疎かになることは分かりきっていたのに。いざその時になると、簡単にスペルカードブレイクされたことで、焦って相手の行動も予測せずに行動してしまった。

実戦経験の不足によるものと言えば聞こえは良いが、それが免罪符にはならない。

千斗「霧雨にも、あれだけ世話になったのに・・・。」

霧雨も、わざわざ俺のために一週間時間を裂いて、特訓に付き合ってくれたというのに、全くその事を活かせなかった。振り返ってみればみるほど、ネガティブになる内容ばかりだな・・・。

千斗「・・・はぁ～。」

霊夢「元気そうね。」
俺がため息を付くと同時に、背後からそう声を掛けられる。
千斗「っ・・・霊夢。」
声の主は、壁に寄りかかりながら、顔を僅かに傾けて、その視線は、こちらをじっと見つめていた。まるで品定めでもするみたいに。
霊夢「体は何とも無い？」
千斗「あ、あぁ。特に問題は・・・無いよ。」
俺はそういって立ち上がって見せた。体に違和感があるわけでもなく、気絶しただけで、特に大事は無いようだ。
心の方は大事だが・・・。
千斗「・・・？　霊夢？」
霊夢「何。」
そこでふと霊夢との間に、何というか、距離感が生まれているような、異様な感覚があった。俺が悲壮感のあまり、無意識に壁を作っているのか？
いや寧ろ、壁を作っているのは、霊夢・・・？
霊夢「・・・・・・。」
これは勝手な想像だが、恐らく俺のあまりの情けなさに、霊夢は失望してしまったの

だろう。それで壁を作られている、と考えるのが自然な気がした。

千斗「俺、その、ゴメン弱くて・・・。」

霊夢「・・・・・・・・。」

しかし霊夢は、俺の謝罪に対して何も言ってはくれなかった。ただ無言で、じっと俺の事を見ていた。お前に話すことは無いということだろうか。

まぁそれも当然かもしれない。霊夢が本当に見かったのはこんな謝罪ではなく、少しでも俺が彼女に善戦する姿だろう。

千斗「・・・・・ッ・・・。」

霊夢「・・・・・・・・・。」

俺は自分の不甲斐なさに、涙腺が緩くなってくるのを感じた。この状況で男が涙を流すなんて、それこそ情けなさの極みである。どうにかしてそれを押さえようとするが、一度そう認識してしまうと、中々それは引っ込んでくれない。

俺は下に俯き、落ち込んでいる風を装って、心はその決壊を止めるのに必死だった。当然霊夢の顔はまともに見れないし、霊夢が今何を考えているか想像する余裕もない。

そうしてしばらく自身との闘いに奔走するが、何時まで経っても霊夢が何も言ってこないので、恐る恐る顔を上げてみる。

千斗「・・・ぁ・・・。」
そこには、霊夢の姿は無かった。
俺の涙腺はそこで限界だった。

ーー博麗神社・母屋

・・・いつまでそうしていただろうか。
俺は霊夢がいなくなった後も、燃料が切れたロボットのように、一人でじっと部屋に佇んでいた。
？「おおーい、霊夢ー、千斗ー！いないのかー？」
そんな俺の意識を覚醒させたのは、良く聞きなれた声だった。ソプラノボイスというのだろうか。本堂の方から聞こえるそれは、酷く憔悴していた俺に、不思議と些かの気力を与えてくれた。
その声に返答出来るほどの元気はまだ無いが、知人の来客である。これを無視する事の罪悪感も手伝って、俺の足は自然と声のする方へ向かった。
魔理沙「あっ、千斗！」
縁側から顔を出すと、その少女・・・霧雨魔理沙は俺を見つけて、小走りで駆け寄ってきた。彼女のその姿が、何だか微笑ましく感じて、声を出すことも、今ならそれほど億劫でもないかもしれない。
千斗「・・・や、霧雨。」
母屋の方へ近づいてくる彼女に、苦笑いというか、酷くぎこちない笑みを浮かべなが

ら、どうにかそう返す。
途端に、霧雨の表情に不安の色が見て取れた。気を悪くさせてしまっただろうか。俺は思わず、その事を謝罪しようとするが
魔理沙「千斗・・・？　体調はもう大丈夫なのか？」
どうやら霧雨は、俺の事を心配してくれていたらしい。冷静に考えれば、返事の一つや二つで、彼女が気を損ねるような人物ではないのは、分かっていた事だが、先程の出来事で、無意識に思考が卑屈になっていたようだ。心の中で彼女に謝罪する。
千斗「うん、体の方は。メンタルはまだちょっとね・・・。」
俺は飾っても仕方ないので、自分の思っていることをそのまま霧雨に伝えた。しかしここで、ある疑問が頭に浮かんだ。
千斗「あれ、俺が気絶した事は霊夢から聞いたの？」
すると霧雨はかぶりを振って
魔理沙「いや、私も昨日千斗の様子を見に来たんだぜ。」
・・・昨日？
霧雨の言葉が自身の承知している状況と食い違いを起こした。昨日はまだ目の前の少女（霧雨）と草原で特訓をしていたではないか。俺はその疑問を口にしようとするが

魔理沙「今起きたってことは、千斗は一日半寝てた事になるな。」
と、衝撃の言葉を口にした。
千斗「えっ、一日半!?」
今の時刻は母屋の時計で午後3時を回ったところ。霧雨が言うには、俺は霊夢との模擬戦のあとずっと、丸一日眠ったままだったとのこと。俺の感覚ではもちろんそんなことは無いので、てっきり半日ほど気絶していたかと思ったが、本当は３６時間も意識を失っていたらしい。
魔理沙「そうだぜ。霊夢は『ただ疲れて眠ってるだけだから心配は要らない』って言ってたんだが・・・そ、まぁ挨拶も兼ねてな。」エヘヘ
霧雨はそう言いながら、少し気恥ずかしそうにはにかんだ。言外に『霊夢にはそう言われたけど、お前の事が心配で来た』と言っているその様子に、俺は感情の高ぶりを表に出さないようにするので必死だった。
最近は男勝りな振る舞いが多かった霧雨にうっかり失念していたが、霧雨(この子)はそんな言動とは裏腹に、その根底は途轍もなく女の子らしく、かつ思慮深い性質を持っていたのだった。
ぶっちゃけ何が言いたいのかと言うと、『ものすんごくかわいい』のである。今までの憂鬱とした気持ちも、今の一言で綺麗さっぱり吹っ飛んだまである。

魔理沙「そ、それより千斗！　やけに沈んでたみたいだが、一体どうしたんだ？」
霧雨はやや焦った様子で、早口で捲し立てるようにそう続けた。かわいい。
千斗「いや、今日・・・じゃなくて昨日か。昨日の模擬戦、俺霊夢に何も出来ずに負けちゃってさ・・・。」
実際にそう言葉にしてみると、霧雨のお陰で消えかけていた感情が、また彷彿としてくる。それと同時に、目の前の少女への、申し訳なさという感情も滲み出てきた。
千斗「それで、その・・・ッ・・・。」
一週間も付きっきりで特訓に付き合った男が、その一切を活かせずに、あっけなく気絶するという、事実だけ羅列しても、あまりに情けない内容に、俺は続ける言葉を見失ってしまう。
魔理沙「なぁ、千斗。少し昔話を聞いてくれないか。」
霧雨はそう言って、座っていた俺の左隣に腰掛ける。二人の距離は肩が触れるか触れないかの近さだった。霧雨の予想外の言動に、思わず俺は霧雨の方を向いた。すると、霧雨の憂んだような、儚げな横顔がそこにはあった。
魔理沙「私はな、霊夢に勝ったことが無いんだ。」
霧雨の視線は遥か遠くを見つめていて、その言い方は隣の俺に向けて話すのに加えて、自分に言い聞かせているようにも感じられた。

魔理沙「昔から人見知りで、何の取り柄も無かった私だけど、『魔法』だけは大好きだった。人間の癖にな。」

千斗「人間？」

魔理沙「私は元人間だぜ。言ってなかったか？」

まったくの初耳である。人間から魔法使いになるのか、人間が魔法を使うから魔法使いなのか、そのところは良くわからないが、とにかく今重要な事ではないので、それ以上の追求はしない。

魔理沙「・・・まぁそれはいい。それで、紆余曲折があって、私は晴れて魔法使いになれた。」

千斗「・・・・・・・・。」

魔理沙「当時の私は、そのことで色々あって、随分と荒れていてな。近付く妖怪を手当たり次第に退治していったんだ。」

霧雨その後に、『まあ妖怪だけじゃないんだけどな』と、苦笑いしながら続けた。

魔理沙「それで、闘う魔法、つまりは弾幕だな。それに覚えがあった私は、下級妖怪はもちろん、下っ端の中級妖怪だって目じゃなかった。本気を出せば上級妖怪にだって匹敵するんじゃないかって思ってたくらいさ。」

魔理沙「アイツに合ったのは、ちょうどそんなときだった。」

似た者同士

「そんなときだった、アイツに合ったのは。」

ーー人里付近の森

・・・家の外で、何者かの気配を感じる。

魔理沙「・・・はぁ。」

今日はもうこれで三度目だ。招かれざる客にはもう慣れたが、いい加減、力関係を覚えて欲しいものである。低俗な妖怪相手にそれを求めるのは些か滑稽な事だろうか。何にせよ、私はそれの相手をするために、家の外へ出る。

？「・・・アンタが白黒の魔法使いってのであってる？」

そこには居たのは、予想していた下級妖怪ではなく、赤白のへんてこな巫女服を着た少女だった。確か、博麗の巫女とかいう。

魔理沙「何か用ですか・・・？」

私は努めて不機嫌そうに、そう返した。実際不機嫌である。妖怪だろうが人間だろうが、研究の邪魔をされれば不機嫌にもなる。しかし相手は、一応年齢も自分と同じくらいの人間である。妖怪の時のようにただ凪払わずとも、威圧してやればすぐにここから

立ち去ると思った。

？「アンタを懲らしめてくれって依頼が来てるのよね。」

しかしその女は、にわかに信じられない事を口走った。

魔理沙「私を？　貴女が？」

？「そうね。アンタに恨みは無いけど、報酬も先にもらっちゃったし、ちゃっちゃと倒されなさい。」

何を言うかと思えば、懲らしめる？

私は巫女の宣う絵空事に、失笑を禁じ得なかった。ちゃんらちゃら可笑しな話だ。第一、博麗の巫女が闘うなんて話は、聞いたことも無い。聞こえてくるのは、やれ『神事をしない』だの『だらしがない』『不真面目だ』などという悪評ばかり。昔の博麗の巫女は悪い妖怪を退治するなんて話を、お母さんから聞かされた気もするが、それも所詮は昔の話。そもそもただの人間である博麗の巫女が、魔法使いの私を懲らしめるなんて、勘違いも甚だしい。

魔理沙「やけに挑戦的ですけど、怪我をしても責任は負いかねますよ？」

？「そういうの良いから、さっさと掛かってきなさい。」

巫女はそう言って、澄ました顔で私の事を見てきた。

なるほど、痛い目を見ないと分からないようだ。私は彼女の挑発的な態度に、少しば

かり頭に来ているらしい。彼女に向けて発する語気を強める。
魔理沙「・・・そんなこと言って、後で泣いても許してあげませんから！」
私はそう言うと、彼女へ向けて鋭い弾幕を放った。威力はそれほどでもないが、スピードはかなり速い。指から一直線に放たれたそれを避けるのは至難の技だろう。
口ではそう言って見せたが、本当に怪我をさせるつもりではない。その弾幕も当たれば軽く後ろに吹き飛ぶくらいで、そのまま退散してくれればそれで良かった。
？「・・・・・・・・。」スタッ
しかし巫女は、体を反らすことでそれを軽やかに躱した。そしてどうということのない様子で、私のことを見て来た。
魔理沙「・・・ッ!?」
並みの人間なら反応することすら難しいはずの弾幕を、巫女はいとも簡単に躱してしまった。
魔理沙（有り得ない・・・唯の人間の癖に・・・。）
？「これで終わりかしら。」
すると巫女は、片眼を閉じると気だるそうに伸びをしながらそうほざいた。
魔理沙「莫迦にしてっ・・・！」
そのまたしても挑発的な言動に、私の理性は激情を抑える事をやめた。

魔理沙「これを避けられますか！『ノンディレクショナルレーザー』！」
私がそう唱えると、前方に向けて両手から計１０本の熱線が高速で回転しながら発散された。殺傷能力を極力抑えた弾幕の中では、強力な魔法の一つだ。弾幕の密度も威力も申し分無いし、その熱線に直撃すれば火傷では済まされないだろう。
？「甘いわね。」
巫女はそう言って、空中へ飛んだ・・・飛んだ!?
魔理沙「嘘・・・!?」
？「人間だから飛べないとでも思った？　残念、中には飛べる人間もいるのよ。」
幻想郷で空を飛ぶということは自体は、それほど珍しくも無いが、人間が空を飛ぶという話は聞いたことが無い。しかし現に、目の前の巫女は空を飛翔しながら、私の渾身の弾幕を難なく躱して見せている。
この『ノンディレクショナルレーザー』はその性質上、空中にいる的にも、ある程度効果を発揮してくれる。しかしレーザーは虚しく空を切るばかりで、ちっとも巫女に当たる気配がない。そのうち、私の方が魔力の維持が持たなくなってきた。
魔理沙「くっ・・・！」
このままではジリ貧になると考えた私は、弾幕の展開を解除する。
？「あら、終わりかしら。」

弾幕が消滅したのを見て、地面に降りた巫女は、無表情でそう言ってきた。この『何て事は無い』と言わんばかりの表情が酷く気に入らない。人間ごときに、まるで私の力は大した事が無いと言われているようで、我慢ならない。

魔理沙「・・・いい気にでいられるのも今の内。貴女には悪いですけど、命の保証は出来かねますよ。」

反応されて避けられるのなら、反応させなければ良い。私が思い付いたのは単純明快で、かつ確実な方法だった。

これを人間に放ったらどうなるか、分からない私ではない。しかし数多の妖怪供を、退治すると称して殺してきた。あいつらは殺しても死なないような存在だが、殺しは殺しである。今さら殺生どうこう言ったところで、私は地獄行きは免れない。

・・・それに、私は魔法使いなのだから、生物の生き死ににいちいち感情を動かすのも馬鹿らしい。私はとにかく尤もらしい理由を付けて、私が巫女に対してそれを放つのを躊躇させないようにした。

？「・・・・・・・。」

流石の巫女も、その尋常ならざる様子を感じ取ったのか、何も言わずに私の行動を注視していた。

魔理沙（やっと私の事を見たわね。でももう遅い。貴女はこれで、御仕舞いなのだから！）

魔理沙「避けられるものなら避けてみなさい！
『Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｓｐａｒｋ』!!!」

私がそう叫ぶと、巫女へ向けて構えた両手から、まばゆい光を放つ、超高速の弾幕が発射される。私の『最大最高火力弾』。それは目では追えない程のスピードで、一直線に巫女へと進んでいった。瞬間、大きな音と衝撃と共に、巫女がいた場所が大きな土煙に見舞われた。

魔理沙「やった・・・！」

当たった。私にはその確信があった。あんなものを人間が反応出来る道理は無いし、放つ直前まで巫女はそこから動いた様子も無かった。間違いなく直撃している。

やがて土煙が晴れてくると、そこには何も無かった。

魔理沙「・・・あぁ。」

その光景を目の当たりにして、私は始めて本当の意味で自分が何をしたのか実感することになった。

私がしたこと、それは『人殺し』だ。それも、自分と同じくらいの年の少女を。
魔理沙「嘘・・・わ、私は、一体、何を・・・。」
我に帰った途端、物凄い罪悪感が襲ってきて、吐きそうになる。どう合理的に考えたところで、人殺しは人殺しだった。妖怪を殺すのとでは訳が違う。
魔理沙「・・・ゲホッ！ゲホッ！・・・くぅぅ・・・！」
私は大きく咳き込み、その場で踞った。眼から涙が滲んで来て、私は自分のしたことを酷く後悔した。今になって思えば、巫女の行動は人を煽っているように見えるだけで、直接煽るような行為は何もしてこなかった。自分が勝手に腹を立てて、過剰威力の弾幕を放ち、彼女を殺してしまった。
魔理沙「私は、何てことを・・・！」
ただ人間一人を殺しただけなのに、どうしてこんなに心が痛むのだろう。私は、『魔法使い』であるはずなのに・・・。
？「ねぇ。」
すると突然、背後から声を掛けられる。それも、ついさっき聞いた事のある声を。
魔理沙「・・・へっ？」
私が声のする方へ向くと、そこには信じられない人物が立っていた。尻餅を付き、恐れ慄く私に対してそれは、お払い棒らしきものを、眼前に突き付けて

？「私の勝ちってことで、良いかしら。」

最初に合ったときと、まったく変わらない声質で、私にそう言ったのだった。

ーー博麗神社・母屋

魔理沙「それが、私とその巫女・・・『博霊霊夢』との始めての邂逅だったのさ。」
霧雨はそこで一旦話を止めて、俺の事を見てきた。
魔理沙「さっきも言ったけど、当時の私は荒れに荒れててな。それが言い訳にはならないけど・・・まぁ、相手が霊夢で良かったぜ。ホントに。」
彼女の言葉からは後半に行くに連れて、後悔と安堵が入り交じったような感情が読み取れた。
この天使を体現したような子に、そんな激昂させるような事をした霊夢も霊夢だとは思うが、確かに今の霧雨からは『人を殺すことを躊躇しない』など、とてもじゃないが考えられない。きっと彼女の過去には、俺には推し測れない様な色々な事があったのだろう。
そのことを追求する気にはなれないので、俺は当たり障りの無い話題を振ることにした。
千斗「霊夢の奴、昔から相変わらずなんだな・・・。」
霧雨の話の中でも、良く言えば泰然自若、悪く言えば傍若無人な人柄の霊夢だった。
霧雨の『昔』というのが、どの程度のものなのか定かではないが、霊夢は産まれた時か

ら、現在のような性格だったのではないかとすら思ってしまう。
それほどまでに、良い意味でも悪い意味でも、『不変』という言葉が似合う奴だった。
魔理沙「誰にだって同じなんだよ、霊夢は。お金の事になると目の色変わるときがあるけど・・・。」
それを聞いて俺はお賽銭を入れたときの事を思い出した。あぁなるほどね・・・。
魔理沙「まあとにかく、その後も納得出来ずに、しつこく霊夢を訪ねてさ。その度に返り討ち。毎回完膚無きまでにな。」へへッ
霧雨はまるでそれが嬉しいことだと言わんばかりに、無邪気な笑みを浮かべた。俺にはその真意は分からなかった。彼女にとって、霊夢に勝負を挑み敗れるというのは、嬉しいことなのだろうか。
魔理沙「それでだんだん仲良くなって・・・って言っても、霊夢は最初と殆ど変わってないけどな。」タハハ
少しバツが悪そうに笑う彼女は、俺から視線を切って、そのまま遠くを見つめた。俺も特に言うことは無かったので、そのまま黙って霧雨と同じようにした。
魔理沙「・・・つまり、私が何を言いたいかって言うとな。」
そのまましばらくそうしていたが、やがて霧雨はそう言って、顔をこちらに向けた。俺も霧雨の方を見ると、眼と眼が合った。その、見ていると吸い込まれそうな瞳に、反

射的に目をそらしそうになるが、何とか堪えて霧雨が言葉を紡ぐのを待つ。
魔理沙「たった一回負けたくらいで、男がくよくよすんなって事だぜ！」
霧雨はそう言うと、今日一番の笑顔を俺に向けた。
ここに来て俺は、ようやく霧雨が言いたかった事を理解した。
昔の霧雨は自分の実力には自信があった。しかしその自信を完膚なきまでに霊夢に潰された。一週間もの時間を、全て模擬戦の為に費やし、それを全く無に帰された俺と、程度は違うものの似たような境遇だろう。
だからこそ、俺の今の気持ちが良く分かり、ほっとけなかったのだろう。努力して得る事が出来た力を、圧倒的な実力でねじ伏せられる気持ちを。
そして、霧雨が霊夢と闘って負けた事を嬉しがったのも、今なら理解できる。
霧雨は霊夢と闘って負けることを嬉しがったのではない。負けたことで自身の課題が見つかり、また強くなれる事を嬉しがったのだ。霧雨が伝えたいことは、つまりはそういうことなのだろう。
俺は目を閉じて、気持ちを落ち着けた。自然と口角が上がる。
・・・ここまで励ましてもらって、いつまでも意気消沈してるわけにはいかない。霧

雨は自身の醜い部分をさらけ出してまで、俺を元気付けようとしてくれた。その恩義には報いなければ、俺は俺で無くなってしまう！

千斗「・・・サンキュー霧雨。元気、出たぜ！」

俺は大袈裟に、右手でガッツポーズをする。

千斗「ああ、そうさ。たかがメイン機体がやられただけさ！　だったら別の機体でリベンジするまで！」

俺はたった一度の敗北を引きずりすぎてたみたいだ。何度負けたとしても、何度でも挑めばいい。大事なのは、負けてそれを悔いる事じゃない。そこから学んで、次に生かす事なんだ！

千斗「よっしゃ、俺はやるぞぉ!!」

魔理沙「その意気だぜ、千斗!!」

俺と霧雨は拳を合わせて、頷き合った。

千斗「そういえば俺が霊夢と模擬戦してたとき、霧雨は何してたんだ？」
魔理沙「・・・!?　えっと、それはだな、ちょっと用事があったと言うか・・・。」
千斗「？」

一章・紅霧異変編

人里にて

――紅霧異変。

これは後に、そう呼ばれる事になる異変が起こる、少し前のお話。

ーー人里

千斗「・・・んで、どうすりゃいいのよ。」
現在、俺は幻想郷の人々が住んでいるという集落、所謂人里に来ていた。なぜかと言われれば、霊夢と答える。
『千斗へ。人里でお味噌とお米を買ってきて。』
あの模擬戦の日から二日後。新機体の調整から帰って来ると、このツッコミ所満載の

置き手紙と、幻想郷で使う硬貨らしきものがちゃぶ台に残されていたのだ。

千斗（急だな！　俺がこの時間に帰ってこなかったらどうすんだよ！　朝言っとけよ！　そんでもって人里がどこにあって米と味噌をどの程度買うかくらい書いとけよ！　あと硬貨（これ）の価値どんなもんかわかんねーよ！）

と、それを見た当時は思ったが、人里の大まかな方向は教えて貰っていたのを思い出し、とりあえずその方向にあてもなく飛行することに。居候の身で、手紙の内容を突っぱねる訳にもいかないので、仕方なしである。そうしてしばらく飛んでいると、集落らしきものが見えてきた。

千斗「あれが人里か・・・？

・

・

・

・・・とりあえず降りてみるか。」

俺はいきなり街中に降り立つと、注目を集めると思ったので、町の外れの人気の無いところに降りてから能力を解除する。ぶっちゃけ機械が一人で街中歩いてたら怖いか

らね。

そうして人里に入ったは良いものの、見慣れない建物に、塗装されてない道。俺は右も左も分からず、冒頭に戻るというわけだ。

千斗（えーと、食品売場はっと・・・そんなのありそうに無いなぁ・・・）

人里の景観は、木製の家屋が建ち並び、通りを歩く人もみな和服を着ていて、なんというか、一昔前の日本の集落という感じを受けた。

江戸時代後期・・・そこまでは行かないか？

レトロでモダンな建物が幾つか見受けられたかと思えば、街中で牛らしき動物が、俵の積まれた荷車を引いてたりと、都会なのか田舎なのかはっきりしない所だな。

ただ気になるのは、街中を歩いていると色んな所から視線を感じる事だ。俺とすれ違う人が高確率で振り向いたり、俺を避けようとする等、なぜだか居心地が悪いと感じる。

まあただ単に、俺が自意識過剰なだけかもしれないが・・・。

そうして人里に到着してから１０分ほど経った頃だろうか。あてもなく歩き回るが、それらしい店は見当たらず。これからどうするか思案していた時だった。

？「あれ、千斗くん？」

突然、どこかで聞いたことのある声が背後から掛かった。俺がそれに振り向くと、そこには女性が二人並んで、俺の事を見ていた。

？「あ、やっぱり千斗くんね？」

その内の一人の女性・・・髪型はウェーブ掛かった金髪のショートカットで、蒼い瞳に白い肌、まるでフランス人形がそのまま動き出したかと錯覚するほど整った顔立ちをしている人が、こちらに親しげに近付いてくる。

千斗「あ、えっと、アリス・マーガトロイドさん、でしたよね。」

そう、俺が一番最初に幻想郷に来たときに、霧雨の家で会ったアリスさんその人だった。

霧雨の家に泊まらせて貰った時に、たまたま霧雨を訪ねてきたアリスさんと、少しだけ交友を持ったのだが、それで声を掛けてくれたのだろう。まあ仮に俺が先に彼女を見つけたとしても、絶対に声を掛けることは出来なかったと断言できるが。

アリス「あら、ちゃんとフルネームで憶えててくれたのね。嬉しいな♪」

そう言って嬉しそうに微笑むアリスさん。ホントそういう無自覚な行動が世の男子を勘違いさせるんですよって、率直にそう思った。もちろん口には出さないが。

アリス「ほら、私って名前言いにくいじゃない？

マーカロイドとか、マーガドロイトなんて言われて、良く間違われるのよ。」

こんな美人な女性の名前を間違えるなんて、けしからん奴もいるもんだなぁと思う今日この頃。確かに一回で憶えるのは些か難しいかもしれないが、俺はしっかり憶えてますからね。だってインパクトが凄いし。

千斗「ははは・・・。」

俺はその言葉に、愛想笑いで返すのがやっとだったが、アリスさんは気にする様子もなく、そのまま話を続けた。

アリス「あ、それと紹介するわね。この子は咲夜。私の友人。」

咲夜「初めまして。十六夜咲夜と申します。」

アリスさんの隣にいる女性は、そう言って両手を前に組むと、綺麗なおじぎをしてきた。胸の辺りまで伸びる美しい銀髪のストレートヘアーで、頭には緑色のヘアピンを付けている。アリスさんとは対称的に瞳の色は赤、背はアリスさんより若干高く、１６５センチ前後のモデル体型で、容姿は安定の超絶美人である。

『安定の』『超絶美人』ってこの世界どうなってるの？

美しい女性のエレガントな所作に、思わず舌を巻き言葉に詰まるが、そのまま黙ってる訳にもいかない。俺は必死の思いで、返事をしようとした。

千斗「は、はじま、始めました、矢部千斗と申すものでございます！」

が、口から出たのは良く分からない日本語で、しかも相手の目をまともに見ることす

らできなかった。最悪である。
咲夜「ふふ。よろしくお願いします、矢部さん。私の事は気軽に咲夜とお呼びください。」
しかし十六夜・・・咲夜さんは、これまた絵になる微笑みと共に、ありがたいお言葉を俺に掛けてくれた。幻想郷（この世界）は女神が多すぎる。
千斗「は、はい！あ、俺の事はお好きに読んでくださって結構ですんで、はい！」
我ながらテンパり過ぎである。隣でアリスさんが笑いを堪えていた。つらい。
咲夜「では千斗さんと呼ばせて頂きますね。」
咲夜さんはそう言うと、ニッコリ笑った。ヤバイ（語彙力）。
アリス「所で千斗くんはどうして此処に？
てっきりもう外の世界へ帰ったのかと思っていたのだけど。」
お互いの自己紹介が終わったのを見計らって、アリスさんが俺に訪ねてきた。
千斗「えーと、それに関しては色々ありまして・・・もうしばらく幻想郷（こっち）に滞在することになったんです。」
色々あったと言っても、別に元の世界に戻るためには、この世界を救わないといけないとかそういう大層な話ではなく。単純に世界間を行って帰ってするためという、超絶個人的な理由なのだが。面と向かってそう言う勇気は無いので、とりあえず含みを持た

せて納得してもらう。嘘は付いていないからね、しょうがないね。
アリス「あら、そうなの。此処には魔理沙に頼まれて？」
千斗「あ、いや、霧雨じゃなくて霊夢に・・・。」
俺はそこで一旦言葉に詰まった。アリスさんと霧雨は知り合いのようだが霊夢とはどうなのだろう。それに隣には殆ど情報が無い咲夜さんもいる。このまま話を進めて良いものかと思ったので、俺は二人に確認をした。
千斗「えっと、お二人は博霊靈夢って知ってます？」
アリス「えぇ。知ってるわよ。」
咲夜「・・・直接の面識はありませんが、噂は兼々。」
俺の問い掛けに対し、アリスさんは即答で、咲夜さんは少し間が空いてからそう言った。
千斗（なるほど。霊夢の奴、アリスさんとも知り合いだったのか。霧雨経由かな？）
咲夜さんは霊夢とは直接の面識は無いようだが、言い方から察するに、霊夢は人里でよく噂される人物なのかもしれない。それが良いか悪いかはちょっと分からないが。なにせ霊夢だし、どっちもあり得るからなぁ。
アリス「千斗くん、霊夢に何か頼まれたの？」
アリスさんにそう言われた俺は、特に隠す理由も無いので、事の顛末を二人に話す事

にした。
千斗「いや、頼まれたというか。霊夢の奴、無茶苦茶な手紙を置いてどっか行っちゃったんですよ。はい、これです。」
俺はそう言って、ポッケからその紙を取り出し、二人に見せた。『千斗へ　人里でお味噌とお米をを買ってきて』それだけが書かれた手紙をまじまじと見る二人。やがてアリスさんは呆れて、咲夜さんは困惑した様子でこう言った。
アリス「あぁ・・・霊夢らしいわね～。」
咲夜「これは・・・手紙なんでしょうか？」
咲夜さん尤もである。俺は探偵でもメンタリストでも無いのだ。こんな僅かな情報だけで本気で手紙としての体を成していると霊夢は思ってるんだろうか。
千斗（いや、思ってるからこれなんだろうなぁ・・・）
二人の反応から、とりあえず俺は間違ってなかったと安堵し、あわよくばと、問題の解決を試みる。
千斗「俺、人里（ここ）には今日初めて来たんですけど、
何がどこに売ってるかさっぱりで・・・。もし良かったら、教えてくれたり・・・。」
我ながら随分と図々しいと思ったので、言葉が後半に行くに連れてだんだんトーンダウンしていった。アリスさんともまだ大した面識もなく、咲夜さんに至ってはついさっ

き知り合ったばかりである。二人の予定もあるだろうし、俺の都合で道案内を頼むというのは些か虫が良すぎる話というものだろう。

・・・と、思ったのだが。

アリス「あら、良いわよ♪　咲夜もそれで良いでしょ？」

咲夜「異論はありません。流石に気の毒ですから・・・。」

と、まさかの快い返事を貰うことが出来た。

千斗「え、ホントですか!?　あ、ありがとうございます！」

この二人、容姿だけでなく性格も底抜けに良い人達のようだ。天は一体何物を与えれば気が済むのだろうか。いや、この二人と知り合うことが出来た俺こそが、天から与えられた幸運を・・・いやもうなんでも良いや！　とにかくやったぜひゃっほう！

アリス「それじゃ、行きましょうか、千斗くん。」

俺はアリスさん、咲夜さんと三人で人里を回ることになったのだった。

――それからしばらくして。

二人の案内で、無事に米問屋と糀屋に辿り着く事が出来た。

霊夢は分量を指定していなかったので、とりあえず貰った幻想郷の硬貨で、買える分だけ買った。その時の換算は、咲夜さん引き受けてくれたのだが、どうやら彼女はお店のお得意様らしく、値段を少しだけ負けてもらえた。

その結果、米を5キロ程と味噌を一升瓶ごと買う事が出来た。どちらも入れ物持参の小売りだったのだが、お店の厚意で入れ物はおまけしてもらった。至れり尽くせりである。やったぜ。

千斗「いやぁ、無事に買う事が出来てホントに良かった。一時はどうなることか

と・・・。」
アリス「良かったわねぇ。」
咲夜「お役に立てて幸いです。」
そして今回の成果の最大の功労者である二人には、感謝してもしきれない。いずれ何か恩返しをしなければ。
霧雨といい霊夢といい、この二人といい、俺は幻想郷(こっち)に来てから、世話になってばっかりだな・・・。何か俺でも役に立てることがあればいいんだが。
俺はそう思い、二人にさりげなくこの後の予定を聞いてみた。
千斗「そういえば、お二人はどうして人里(此処)に？」
咲夜さんは分からないが、アリスさんは見た目は人間にしか見えなくても、魔法使いという立派な種族らしい。なので人里に住んでいるとは考えづらい。何か用事があって人里に来ていると踏んでいたのだが・・・。
咲夜「実は、近日中に我が家でパーティーを開くことになったので、その買い出しに来てるんです。」
アリス「私はその付き添いよ♪」
どうやら用事があったのは咲夜さんの方で、アリスさんはその付き添いらしい。これは悪いことをしたな・・・。

千斗「すいません。そうとも知らず、時間を取らせてしまって。」
俺はお世話になった事も相俟って、非常に申し訳ない気持ちになり、二人に頭を下げた。
咲夜「あ、いえ！　そんな急ぐような事じゃないですから！　頭を上げてください！」
咲夜さんが慌ててそれを止めに入る。人通りは少ないとは言え、街中で大の男に頭を下げられても困るか。
アリス「ふふ。千斗くんったら、律儀なのね。」
アリスさんはそう言って、楽しそうに微笑んだ。二人とも俺が迷惑を掛けたなんて微塵も思ってなさそうだ。なんて良い人達なんだ・・・！
千斗「もし良かったら、荷物持ちでも何でもしますから、言ってください！」
俺はとりあえず何か出来ないかと思い、二人にそう提案してみた。
咲夜「千斗さんのお気持ちは嬉しいのですが・・・。」
すると咲夜さんは申し訳なさそうに俺の事を見てから、チラリとアリスさんと視線を合わせた。
アリス「・・・・・・・大丈夫よ千斗くん。実はね？　この後咲夜と二人でデートするつもりだったの♪」
咲夜「えっ？　アリスさん!?」／／／

アリス「ねっ？　咲夜♪」
咲夜「え、えっと・・・っ、はい、実はそうなんです。」／／／
アリス「だから・・・ねっ？」
アリスさんはそう言うと、軽く舌を出しながら俺にウインクしてきた。えっと、つまり。

千斗「・・・・・・ッ!!」
これはまずい。俺はなんて事をしてしまったのか。二人がそういうことなら、俺は圧倒的に邪魔者である。即刻この世から消え去るべきと言っても過言ではない。
千斗「あ、あの！　そうとも知らず、ホントすんませんでしたァ―!!!」
俺は気まずさと気恥ずかしさと申し訳なさの三点バーストによって、そのままガンダッシュで二人の側から離れる。とんでもない大馬鹿者だ。知らなかったとは言え、二人の幸せな時間に水を差してしまった・・・。
正直すぐにでも能力を発動して飛び去りたい所だが、それでは余りに義理が立たないので、俺は二人から１０メートルほど離れたところで振り向き
千斗「あの！　お二人とも本当にありがとうございました！　後邪魔してホントにすいませんでしたァ!!」

そう叫んでからすぐに踵を返し、なんだなんだとざわつく人々の間をすり抜け、とにかく二人とは反対方向へ全速力で走り出した。

アリス「うふふ♪　霊夢によろしくねー！」

咲夜「ちょ、ちょっとアリスさん・・・!?」

後ろから二人の声が聞こえなくなるまで、時間は掛からなかった。声が聞こえなくなってからも、走ることはやめなかったが。

持っていた一升瓶と米袋がかなり重たくて、何度か足を止めそうになったが、どうにかこうにか、人里の外れまで来た。そこでようやく足を止め、息も絶え絶えで荷物を地面に降ろすと、そのまま自分もへたりこんだ。

頭の中は疲労感よりも、大きな焦燥感と僅かな愉悦感に似た何かが支配しており、切れた息を少しずつ整えながらも、先程の事を思い返す。

千斗「・・・百合っプルって、都市伝説じゃなかったんだ。」

・・・・・・人里を飛び立ってから少したった頃、冷静になって考えてみると余りに下衆な発言だったと後悔した。

千斗「霊夢。ご要望の米と味噌、買ってきたぞ。」

霊夢「あら、遅かったわね。」

千斗「遅かったで済んで良かったよ・・・・・・。」ハァ

～Ｓｔａｇｅ―１～　　は回避

―
???

？「・・・いよいよ、ね。」

？「お嬢様、全て滞りなく。」

？「メイド長、貴女は？」

？「僭越ながら、巫女の相手を承りたく存じます。」

？「あら、そう。では私が博打ね。」
？「恐縮です、お嬢様。」
？「それもまた一興。全ては決まっているのだから・・・。」
？「・・・・・・・・・・。」
？「どうかしたのかしら？」フフッ
？「・・・いえ。ではお嬢様、失礼いたします。」バタン
？「ええ。
・
・
・
さて、奇怪な外来人・・・。貴方はどのような運命を奏でるのかしら？」フフフ

ーー博麗神社

千斗「なあ霊夢。一体いつになったらその異変とやらは始まるんだ？」

霊夢「知らないわよ。」

あの模擬戦の日から三日。霊夢に『幻想郷に異変が起こる』と言われてから、１０日ほど経った今日。朝食を食べていた時に突然、『来るわね。』と霊夢が呟いた。

霊夢の事だから多分本人にしか感じられない何かを感じ取ったんだろうと、当時は聞

こえないふりをしたのだが。

霊夢『千斗、準備なさい。異変よ。』

という霊夢の一言で、途端に弛んだ気が引き締まった。

『やっと』か、それとも『もう』か。俺の場合は後者だが、霊夢が異変を察知してから既に二桁日。客観的に考えると、やっと異変が始まったと考える方が、メンタル的には正解かもしれない。

そうして一通りの用意を済ませ、動き出せる準備したものの、肝心の霊夢は中々動かない。曰く、『まだ始まっていない』らしい。俺はこの期に及んでもまだ、異変について詳しいことは聞かされていないので、自分では行動のタイミングも指針もさっぱりである。そもそも『何処の誰がどういうことを引き起こしているのか』すら知らないのだ。一応俺も異変を解決する立場の当事者になるんだから、それくらいは教えてくれても良いと思うんだが・・・。

しかし霊夢にその事を聞いても、はぐらかすか無視するかで、何も語ろうとはしてくれなかった。霊夢の性格上、個人的な感情を押し付けてくる奴ではないので、何かしら事情があるのだろう。異変について詳しく知らない方が戦う時に有利になるとかね。あくまで希望的観測だが。

というわけで、朝食が済んでから二時間ほど。今は神社の時計で午前１０時頃。俺は

待ちぼうけを食らっていた。

千斗「・・・知らないって、お前は今朝何を察したんだよ？」

霊夢「異変。」

千斗（・・・あーはいはい、五月蝿いから静かにしてろってことですね分かりましたよ。ったく、何も知らされずに待たされるって、結構ドキドキソワソワするもんなんだぞ・・・？）

このドキドキソワソワが色恋的なモノではないのは言うまでもないか。少しだけワクワクもしていたりするのだが、比率的には９：１くらいである。ここまで情報を伏せられると、何が起こるか分からない恐怖心が心の大部分を占めていたのだ。我ながら臆病なモンである。

千斗（・・・どうしようかな。このままじっとしていても埒が明かないし。）

俺はそう思って、霊夢に機体練習する許可を得ようとした、その時。

千斗「・・・ん？」

突如として、辺りが暗くなる。疑問に思い空を見上げると、さっきまで白く光輝いていた太陽は、赤黒く覆われた雲に遮られ、完全に見えなくなっていた。

千斗「な、なんだ!?」

その『雲』が異常なのは、ワインレッドのような色合いだけではない。普通では考えられないスピードで、あっという間に空の端から端までを覆い尽くしてしまったのだ。

周囲には異様な雰囲気が漂い、昼とも夜とも夕方とも言えない光景が視界を支配する。

千斗「お、おい霊夢！　これ・・・ってあれ？」

俺は思わず霊夢に助けを求めようと、彼女の方を見るが、ついさっきまで隣に居た筈の霊夢は、いつの間にかそこから居なくなっていた。すぐさま首を振って辺りを見渡すも、何処にも霊夢の姿は見当たらない。

千斗「えっ、霊夢・・・!?　どこだー!?」

霊夢「何してんのよ。置いてくわよ。」

狼狽える俺に、霊夢がそう言った場所は、なんと空中だった。俺は一瞬脱力して、ポカーンと霊夢のことを眺めていたが、やがて我に返ると、すぐさま能力を発動して霊夢の方へ向かった。

千斗「お、お前・・・。なんでそんな平然としてるんだ？」

霊夢「はぁ？　あんたこそ何で動揺してんのよ。」

千斗「お前にはこの空が見えないのか!?」

霊夢「何よ。ちょっと紅色(あかいろ)っぽくなってるだけじゃない。」

千斗「えぇ・・・。」
空が紅く染まるってそれだけのことなのか？
もしかすると幻想郷では良くある事なのだろうか。異世界だし、自分(こっち)の常識で推し測るのは良くないのかもしれない。一応霊夢に確認を取ってみるか。
千斗「幻想郷だと、こうやって空が赤黒い雲に覆われるって、良くあるのか？」
俺の言葉に、霊夢は怪訝な表情でこう言った。
霊夢「あるわけないでしょ。何、外の世界ってこんな気色悪い雲に覆われる時があんの？」
千斗「ねーよ！　だからこんなに驚いてんだろうが！」
相変わらず話の通じない女である。俺のＩＱが霊夢より低いだけかもしれないが、バカが頭良い奴に話合わせるのはムリなんだから、頭良い奴がバカに合わせてくれ・・・！
いや、霊夢(この女)が特殊過ぎるだけか。口に出してない事を平然と理解していたり、ごく僅かな文面だけで意味が伝わるとか思ってるような奴だ。やっぱり霊夢がおかしいだけだろう。うん、間違いない、はず。
俺はこの異常事態とは別の事柄で不安になり、人差し指を空に向けて、霊夢にこう尋ねた。
千斗「・・・じゃあ、この、得体の知れない現象に、何でお前はそんな落ち着いてら

れんだよ。」
霊夢「異変だからよ。」
千斗「いや理由になってない・・・ってこれが異変なのか？」
霊夢「そうね。この霧はあっち・・・吸血鬼の館の方から発生してるわね。」
どうやら霊夢は、この空を覆う雲の原因は異変にあると見ているらしい。なんでそんな事が分かるのかなんて、今さら過ぎるのでツッコまない。霊夢の第六感（シックスセンス）紛いの現象は、今に始まったことではないからな。
千斗「吸血鬼の館・・・何だか恐ろしそうな所だな。」
この雲が吸血鬼の館なるところから発生しているとすると、今回の異変の首謀者は吸血鬼なんだろうか。吸血鬼と言っても、長身で羽が生えてて人間の血を吸うといった、漠然としたイメージしか沸かない。まさか石仮面付けて時を止めてきたりする吸血鬼じゃないよね・・・？
霊夢「分かった？　じゃ、行くわよ千斗。」
すると霊夢が館の方向へ移動し始めた。俺も慌ててそれに追従する。
千斗「じゃ、ってなぁ。まだ分からないことだらけなんだが。吸血鬼達と戦闘になったとき、俺は霊夢のフォローに回ればいいのか？」
霊夢「前にも言ったでしょ。臨機応変よ。自分で考える事ね。」

無茶を言うなよ・・・。こちとら始めての実戦なんだぞ。殺傷力を抑えた弾幕を使うルールとは言え、相手は異変を起こすような妖怪だ。何があるか分からない。そもそもこの『弾幕勝負』のルールちゃんと守ってくれるんかな？

霊夢「それに関しては、恐らく大丈夫よ。いざって時は私がいるし。」

何だか頼もしいお言葉と共に大丈夫と言われた。時折霊夢の奴は、この容姿端麗な見た目で男の俺から見てもイケメン過ぎる言動する時がある。人里での一件もあったし、こいつも絶対女の子に惚れられてるだろ・・・。

霊夢「変な事考えるのやめてくれる？」

おっといけない。思考がダダ漏れだったようだ。こいつは心を読んでくる時があるから気を付けないとな。

千斗「ところで霊夢さんや。」

霊夢「何よ。」

千斗「俺らの目の前にいる、あの女の子はなんなんだ。」

霊夢「妖怪ね。」

千斗「は?????」

？「わはー。」

ーー博麗神社・周辺の森上

ルーミア「私はルーミアなのだー。」
千斗「そ、そうか・・・。」
ルーミア「そーなのだー。」
この自らをルーミアと名乗る可愛らしい見た目をした少女は、白黒の洋服にロングスカート、柔らかなそうな金髪には赤いリボンを付けている。
ぶっちゃけ見た目だけだと一ミリも妖怪には見えない少女は、ふわふわと宙に浮きながら俺たちの前に立ちはだかった、のか、それともただ通りかかったかだけか。いずれにせよ、霊夢がこの子を妖怪と言った以上、油断はできない。こんな人畜無害そうな見た目をしていても、相手を騙す為に敢えてこういう態度を取っている可能性もある。とりあえず戦闘の意思があるのか確認してみるか。もし誤解だったら可哀想だし、なるべく優しく聞いてみるとしよう。
千斗「えっと、ルーミアちゃんはどうして一人でこんなところに？」
ルーミア「おなかがすいたからー。」
おなかがすいたから？
ここら辺に食事処なんてあるのだろうか。もしくは木の実なんかを取りに来たとか

？

ルーミア「あなたは食べてもいい人類？」

千斗「駄目です（即答）。」

ルーミア「そーなのかー。ざんねんなのだー。」

なるほどね。おなかがすいてた時に人間（食べ物）を見つけたから来たのね。オーケー、完全に理解した。

千斗（こんな幼気な少女と生死を掛けた殺し合いなんてしてたまるか（迫真）!! ）

どうやら向こうはこちらを食べよう（物理）として、接近してきたらしい。当然それを避ける為には、彼女と戦う事になってしまうのだが、この見た目も言動も可愛らしい少女を傷付ける前に、俺の心の方が傷付いて再起不能になってしまう。どうにかして惨劇を回避するために、何としても彼女を言いくるめなければならない・・・！

千斗「ル、ルーミアちゃんは人間以外に美味しい食べ物とか、知らない？」

ルーミア「んー？　べつに木の実とかもたべるけどー、人間が一番おいしいのだー！」

うわっ。目をキラキラさせながら凄いこと言ってるよこの子。正直ギャップがあり

すぎて目の前の光景を理解するのも一苦労だ。たがここで怯んではいけない。

千斗「いや、待って！　人間よりも美味しい物だってきっとあるよ！」

ルーミア「そーなのかー？」

千斗「そうそう！　ほら例えば・・・ほらあの・・・アレ、アレだよ！」

ルーミア「アレってなんなのだー？」

千斗「そう、どら焼！　甘くて美味しいよ!!」

俺が咄嗟に思い付いたのは、あの国民的ロボットの大好物だった。この子もどっちかって言うと猫みたいな見た目してるし、多分気に入るはずでしょ（適当）。

霊夢「・・・・・・・・。」チラ

霊夢の方から何か言いたげな視線を感じるが、ここは敢えて無視する！

ルーミア「あまいのかー！　そーなのかー！」

おぉ！　思ったより好感触のようだ。目を輝かせて空中を見つめている・・・！　これなら押しきれる！

千斗「でもね、ルーミアちゃん。俺は今どら焼持ってないんだよ・・・。」

ルーミア「・・・そーなのかー。」

千斗「だからさ、次会ったときにルーミアちゃんに食べさせてあげる為に、俺たちの事、見逃してくれないかな？」

ルーミア「うん、わかったのだー！」ワハー

千斗（計・画・通・り）ニヤ

今の俺は随分と悪い顔をしているだろう。それにしても面白いように上手く話が進んだ。やっぱり無益な戦闘は回避しなきゃね。

ルーミア「おにーさんバイバイなのだー！」

千斗「またねー！」

ルーミアちゃんはそう言うと、フラフラと俺達から離れて行った。

千斗「・・・・・・・・・・・。」チラ

霊夢「・・・・・・・・・・。」

さっきから視線は感じていたので、恐る恐る霊夢の方を見ると、全く色の無い表情で俺を見ていた。呆れているのか蔑んでいるのか、はたまた感心して・・・はなさそう。とにかく、何も言わずに無表情で見つめてくるのだ。正直言わなくても居心地は悪かった。

千斗「あの・・・。」
霊夢「・・・アンタってさ、思ったよりお人好しなのね。」
千斗「へ？」
しかし霊夢の口からは予想もしない一言が。俺は間抜けな声を出して、霊夢の顔を見た。
霊夢「それだけ。」
霊夢はそう言うと、踵を返してまだ空中を移動しはじめた。俺はしばらく唖然としていたが、ほどなくして霊夢の後を追った。しばらくの間、俺達は何も喋らなかった。

・・・しばらくして。

千斗（あれ、そう言えば俺は今Ｆ９１だよな。どうしてルーミアちゃんは俺が人間だって・・・）

霊夢「・・・千斗、今度から妖怪や妖精なんかに絡まれても、消し飛ばしていいから。」
千斗「え、いやいくら相手が妖怪とは言え、無駄な殺生は避けるべきだろ・・・。」
霊夢「あいつらは倒してもまたすぐに現れるのよ。」
千斗「え？」
霊夢「そういうもんなのよ。」

・・・そーなのかー（思考停止）

～Ｓｔａｇｅ―２～　ＶＳ　湖上の氷精

―霧の湖

千斗（霧が濃くなってきたな・・・）

空が紅く覆われてから３０分ほど。霊夢に追従して飛行している最中、幾度となく妖精や妖怪達から襲撃やらちょっかいやらを掛けられたものの、霊夢がその悉くを難なく跳ね除ける。

妖怪は見た目グロテスクなモノから人型のモノまで様々だったが、妖精は例外無く背中に羽が生えた、１０歳前後の女の子の姿だった。妖精の見た目と言えば、確かにそういったイメージがあるが、知能はそれほど高く無いらしく、単純な動きで低威力の弾幕を撃って来るタイプが殆どだった。ぶっちゃけ避けようとしなくても、普通に飛んでれ

ばほぼ当たらないレベルだったのだが、霊夢はそんな子達にもお構い無しに、情け容赦なく弾幕をばら蒔いて殲滅していた。お前は鬼か。

一応俺にも弾幕を撃ってきたりする奴は居たので、まだ少し抵抗はあるものの、とりあえずそれに応戦しようとはしたのだが、俺が対象にライフルを当てるよりも先に、霊夢が敵を全て殲滅してしまうのだ。はっきり言って俺の出る幕は全く無い。俺いらなくね？

その状況が移動中は延々と続き、終いには回避に専念して狙いを定める事すらしなくなっていた。いやもうエネルギーの無駄遣いなんで、霊力温存の為だから。霊夢が圧倒的過ぎてやる気無くしたとかじゃないから。

そんなこんなで今は何処だか分からない森の上、というかずっと森の上を飛び続けているが、いつの間にか辺りを覆い始めた霧で、視界が悪くなって来たので、霊夢を見失わないように気を付けなければ。

千斗（・・・ん？　あれは？）

そうしてしばらく進んでいると、連なっていた木々がだんだんと切り開かれて、前方に大きな水溜まりが出現した。霧のせいでかなり近くに行くまで存在に気付かなかったが、どうやらかなり大きい水溜まりのようだった。視界不良な事を加味しても、前方１８０度どこを見ても水溜まりが見える事から、もはや湖と見て良いだろう。

千斗（こんな森のど真ん中に湖ね・・・。）

どこから水が流れ込んでいるのか定かではないが、これだけの水量ならダムとして利用する事も出来そうだな。人里からもそれほど離れて無さそうだし、もしかしたら既に生活用水として利用されているのかも。

因みに霊夢が向かっている方向から左手に人里がある。今は霧で全く見えないが、平常時に森を一望出来る程の高度まで上がれば、木々の間にポツンと、人里と思しき空間が見える。目算で直線距離が凡そ3キロにも満たない程度なので、あながちこの推理も間違ってないかもしれない。

千斗（うわぁ、何も見えん）

俺と霊夢は湖の上を静かに進んで行く。視界の３６０度が完全に湖になるまでそれほど時間は掛からなかった。周囲を覆う霧の密度が相当に高い。まるで分厚い雲の中を移動しているんじゃないかと思う程だ。もしこの状況で妖怪や妖精に襲撃を掛けられたら、と考えるとゾッとする。

霊夢「逸れないように気を付けて。」

千斗「お、おう。」

どうやら霊夢も同じ考えだったようで、俺に念押ししてきた。霊夢は俺と逸れた所で地理的にも実力的にもなんて事は無いだろうが、俺が今一人になってしまうと、いくら

スピードも威力も無い妖精の弾幕とは言え、この濃い霧の中で集団に襲われでもしたらまず無事では済まない。下も湖なので、もし何らかの拍子に能力を解除する事態になったら、そのまま湖に溺れるｅｎｄまっしぐらである。俺は泳げない訳ではないが、服を着た状態では淡水の浮力に期待は出来ない。陸が近いなら未だしも、この広い湖である。ほぼ間違いなく沈んで死ぬ。

千斗（・・・・・・・・こわっ）

俺はその事を想像してしまい、無意識に身体を震わせる。それにともなって辺りが寒くなってきたような気までしてくる。

千斗（・・・いかんいかん。無いこと考え過ぎると本当に起きないとも限らん。余計なことは考えないようにしないと）

それを気のせいだと片付けて、霊夢の姿を追うことに集中する。いくら視界が悪いと言っても、霊夢との距離は目と鼻の先。１メートルにも満たない距離だ。気を付けていれば見失うことは無い。

そうして5分ほど経ったとき、それは起こった。

？「ん～？　なんで人間がこんな所にいるんだ？」

恐れていた事態が起こってしまった。そう問いかけてきたのは、水色の髪で背中に氷

の塊のような羽を携えた妖精だった。
？「チ、チルノちゃん、関わるのは止めようよ～。」
その隣には、これまた可愛らしい身なりをした緑髪の妖精もいた。こちらは鳥か虫か、判別の付かないような羽を付けている。
？「あ～!? お前は・・・! 誰だっけ?」
？「妖怪退治の巫女さんだよ～! この前チルノちゃんがちょっかい掛けて返り討ちにされちゃったでしょ!?」
その水色の髪の妖精が霊夢を指差して叫ぶが、要領を得ない。代わりに隣に居た緑髪の妖精が、水色の妖精に説明をしていた。
霊夢サン?
霊夢「そう言えば妖精の割に、やけに妖力の多い奴が居たわね。」
霊夢が興味無さげに呟く。そのやけに力のある奴ってのが水色の妖精なのかよ。
霊夢「妖精の割にね。別に大したことは無いわ。」
すると霊夢の言葉に、水色の妖精が怒ったように反応する。
？「なんだと～! 最強のアタイを、大したことは無いですってぇ～!」
この最強のアタイさんには悪いが、言ってることが小物臭い。霊夢の言う通り、大したことは無さそうだ。

？「バカにしやがって～！・・・・ってえ!?　何だお前は!?」
いちいちリアクションの大きい子だな。彼女は俺の事を見た途端、驚きの表情と共に大きな声を出して後ずさった。てか今まで視界に入ってなかったのかよ。隣の子は多分気付いてるぞ、アタイちゃんよ。
？「チ、チルノちゃ～ん！」
隣の子は混乱しているのか困惑しているのか、チルノと呼ばれた水色の妖精の服を引っ張って何処かへ行こうとしているが、残念ながら相方には届いていないようである。愛らしい見た目も相俟って、ちょっと気の毒にも思えてくる。
霊夢「で、何の用よ。チルノ。」
ここで霊夢が水色の妖精・・・チルノに向けてそう言った。するとチルノ（ソイッ）は、待ってましたとばかりに霊夢に向けて指を指した。
チルノ「アタイと勝負よ、人間！」
霊夢「嫌よ。」
チルノ「何でよ!?」
霊夢「あんた弱いんだもん。」
千斗（うわっ、容赦ねぇ・・・！）
チルノ「なーんですってぇ～!!?」

あーあ、怒ってる怒ってる。チルノは物凄い剣幕で、霊夢の事を睨み付ける。残念ながらチルノの容姿的な問題で、その姿に覇気も威圧感もあったもんじゃないが、本当に頭に来ている事だけは良く分かる。まぁ霊夢も霊夢だ。悪気は無いんだろうが流石に言いすぎである。俺だったらガチ凹みで一週間は立ち直れないぞ・・・。

霊夢「・・・じゃあアンタがコイツに勝ったら戦ってあげても良いわ。」

すると突然、霊夢の女隣は俺を指差して、とんでもない事を言い出した。

千斗「はぁ!? 何でだよ! 俺を巻き込むな!」

何度も言うが、何が悲しくてこんな小学校低学年の見た目をした少女と高校生の俺が戦わなくちゃならんのか。現代だったら即通報モノである。そもそも戦いを出来るだけ避けたいのに、霊夢のとばっちりで俺が戦う事になるなんて、たまったものではない。

チルノ「この良く分からない奴に勝てば良いのね?」

霊夢「そうね。勝てればね。」

千斗「ちょっ・・・! 話を勝手に進めるな!」

チルノ「よーしアタイと勝負よ! そこの・・・そこの?」

?「お人形さんだよ、チルノちゃん!」

千斗「頼むから話を聞いて!?」

あと俺は人形じゃねーよ!

いやまぁ、ロボットって概念を知らなかったら、人形に見えんのかもしれないけどね。ガンダムの事をお人形さんっていう人初めて見たぞ！

人じゃ無いけども！

チルノ「さっすが大ちゃん！　よーし、勝負よ人形！」

何で普通に勝負する流れになってんだよ・・・。

当事者である俺がＯＫ出して無いんですけど？

何、お前に決定権はあるのか？　無いですよ。

ハイハイ分かりましたよ。やれば良いんでしょ、やれば。

俺は半ば自暴自棄になり、仕方無くチルノと相まみえる。改めてチルノの顔を良く見ると、勝ち気な表情とは裏腹に、また随分と端正な顔立ちをしている。あと数年もすれば美少女と呼んでも差し支えないくらいにはなるだろう。

千斗（幻想郷って可愛い子しかいないのか・・・）

その隣にいる大ちゃんと呼ばれる妖精の子も、清楚な雰囲気と可愛らしい見た目で、これまた将来が楽しみな容姿をしている。正直に言えば、戦いたいより愛でたい気持ちの方が大きいまである。変態的な意味ではないぞ。

チルノ「いっくぞー！　食らえ、『アイシクルフォール』！」

俺が感慨に耽っていると、チルノはいきなりのスペルカード宣言・・・ではなく、ただ技名を宣言しただけのようだ。まあ妖精がスペルカード使うわけ無いわな。コイツバカそうだし。

千斗「・・・おぉ?」

チルノがそう宣言すると、途端に俺の左右に一つ一つが拳ほどの大きさの氷の粒らしき弾幕が、規則的に大量に展開される。チルノの両手から随時発射されているそれは、殆ど隙間なく埋め尽くされて、俺の左右への移動は封じられたも同然だった。

千斗（ま、まさかこの状態で弾幕を撃ちまくってくるんじゃ・・・）

左右の氷の弾幕壁までのスペースは2メートルあるか無いかほど。上下と背後もいつの間にか弾幕の壁に覆われていて、気が付くと、自由に動けるスペースが殆ど無くなっていた。

千斗（これは、ヤバイんじゃないの!?）

俺は慌てて、予測される正面からの弾幕を警戒して、ビームシールドを展開する。これを駆使してどうにか弾幕を防ぎ切らなければ、こちらに勝機は無い。確かに今まで襲ってきた妖精の中で、これほどの弾幕量を瞬時に展開してくるような奴は一匹たりとも居なかった。その殆どが単発の弾幕を数発撃ってくるような奴で、珠に多数展開してくる奴も居たが、量も密度もチルノの比では無い。何なら模擬戦の時の霊夢よりも、弾

幕量自体は多いとすら思えてくる。
チルノ「あっはっはっは！　どーだ！　アタイったらサイキョーね！」
俺の焦った様子を悟ってか、チルノが高らかにそう叫んだ。いや、冗談抜きでこの弾幕技最強では!?　全く逃げ場が無いんだけど!?
千斗「・・・・・・ん？」
しかし俺はここであることに気づいた。
何も起きないのである。
弾幕壁が段々と狭まってくる様子もなく、かといってチルノから高速の弾幕が中央区に発射される訳でも無く。俺はその場でジッとして、ビームシールドを構えて警戒しているが、チルノがそれ以上何かをしてくる気配が、無い。
チルノ「どうだ!?　参ったか人形!!」
チルノの態度は相変わらず高圧的だが、弾幕も相変わらずである。俺自身、少しも移動をしていない。Ｆ９１のスラスターで姿勢制御し続けているだけだ。
千斗（・・・コイツもしかして、底なしのバカ？）
チルノ「そろそろ降参するかー？　今ならアタイも許してあげなくもないｚ」ピチューン
千斗「ほい。」ピシューン

大ちゃん「チルノちゃ～ん!?」
俺はチルノが言い終わるよりも先に、チルノへ向けてライフルの引き金を引いた。驚くほど罪悪感も後悔も無い、清々しい気持ちだった。
チルノはライフルから発射された高密度のビームを、身体の正面で受け止めた。即ち直撃である。その瞬間に、チルノの身体は跡形も無く消え去っていった。霊夢との道中で幾度となく見てきた、妖精が霊夢の弾幕に当たって消滅していくのと、全く一緒である。
霊夢「終わったのね。」
するといつの間に避難していたのか、チルノが居た場所よりも更に前方から、霊夢が現れた。
千斗「終わった。」
なんとも釈然としない勝利であるが、勝ちは勝ちである。チルノの弾幕を回避（動いて避けるとは言ってない）しチルノにライフルを正面から直撃させた俺の完全勝利である。
千斗「・・・行くか。」
霊夢「ええ。」

この、何とも言えない感情は、吸血鬼の館に到着するまで付きまとうのだった。